

371.21
A191n



0042081-000

371.21-A191n

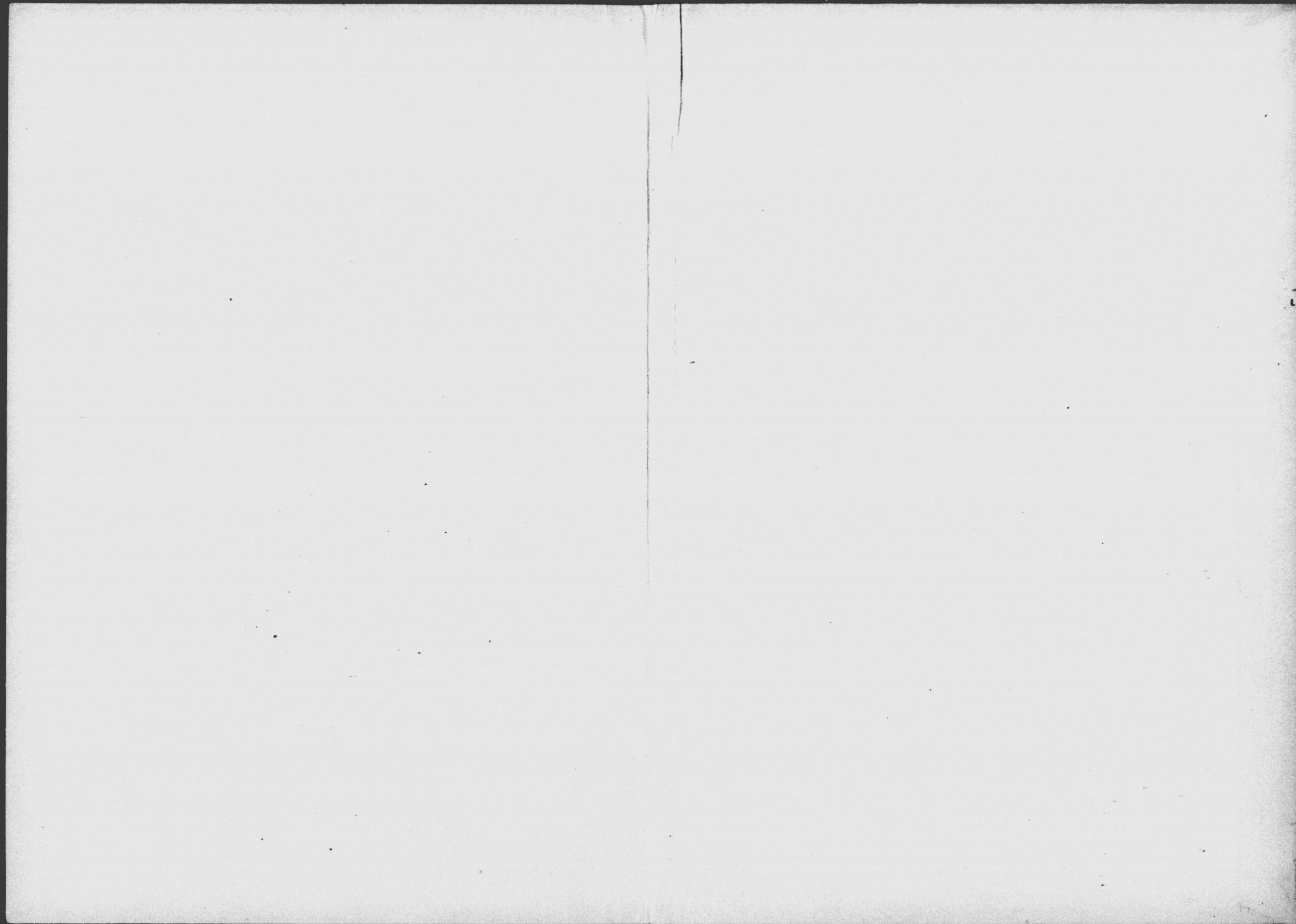
日本教育思想史

安達久・著

モナス

1930

AHB



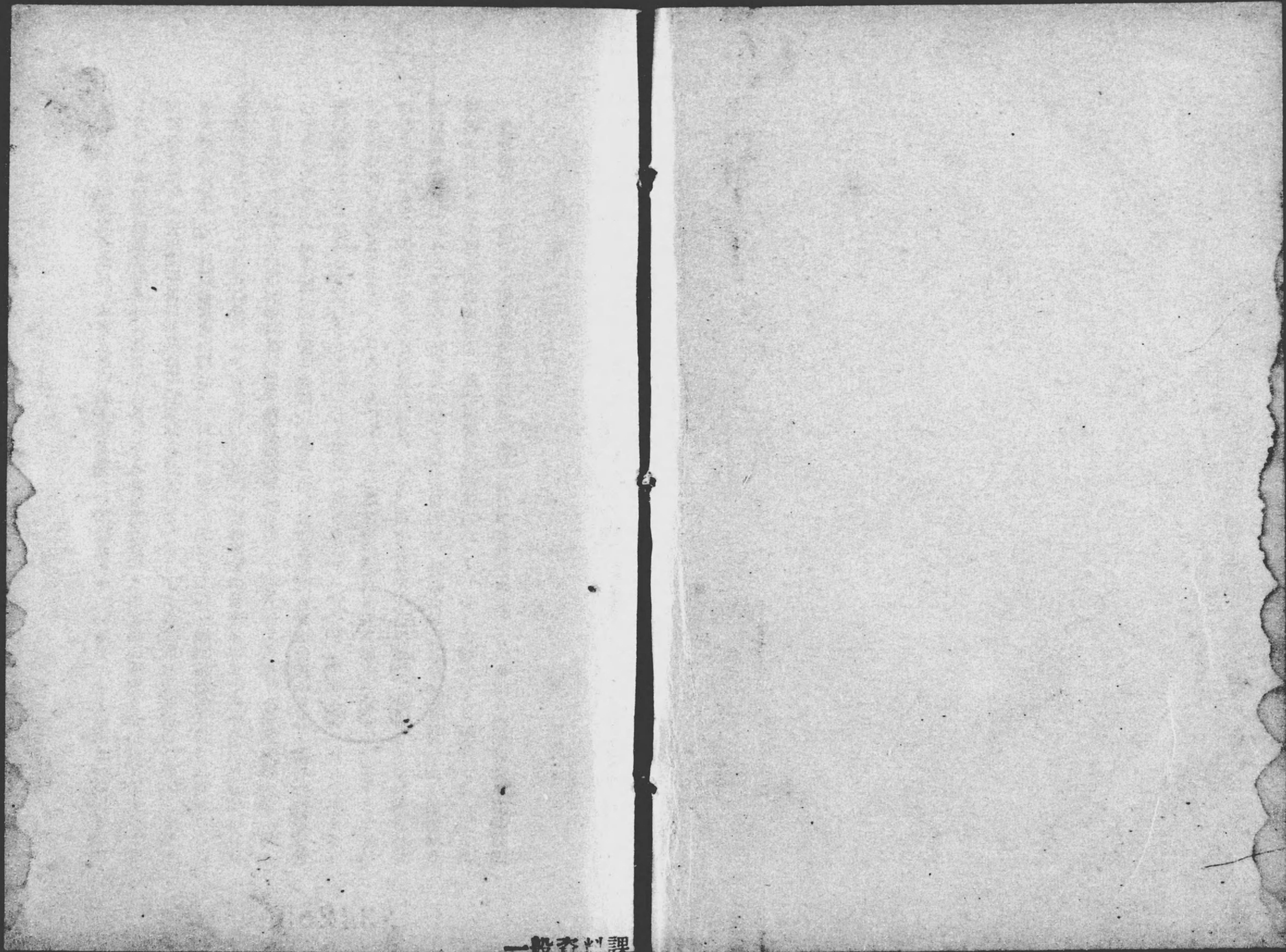
教育學術界

臨時增刊

日本教育思想史

東京十七號發行

昭和三十三年十一月 日本教育學會發行

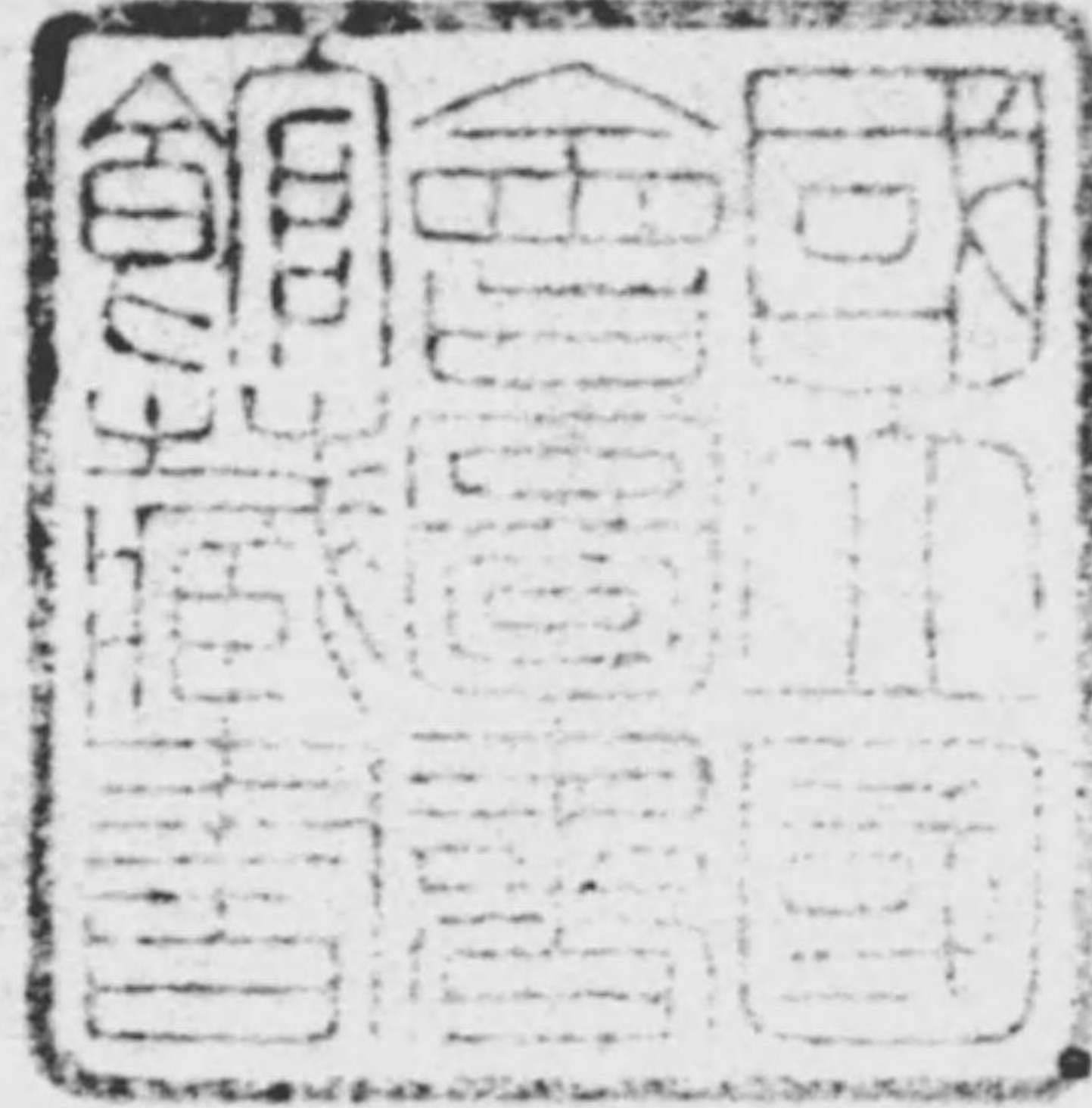


377.21 A 19/n

序

日本教育史の研究は、從來我が學界に於て種子扱ひにされて來た。この事から師範學校や高等師範學校に於ける日本教育史の教授も、西洋教育史の教授に比して、著しく輕視せられ勝ちである。これには色々な事情もあるであらうが、其の最も大なる原因は、我國の維新以後の教育が、全く西洋教育の移入であるとの誤解に基くやうに思はれる。しかし斯かる見方が全然誤謬であることは、最近の教育史家の齊しく認めてをるところであつて、その詳しい論述は本文に譲つておくが、要するに我國の教育は今日に到るまで三千年の間、日本國民精神によつて一貫してゐることは、疑ふべくもないのである。斯くの如き國民的自覺の勃興によつてか、最近日本教育史の研究が著しく學界の興味を惹いて來た。そして其の研究の結果、種々價値ある業績が現れて來たのである。乙竹教授の大著『日本庶民教育史』の如きは其の最たるものである。尙其の他の學者の著書も尠ならず公にされたが、其の大體から言へば、教育事實史に詳しく、且特殊的部分であつて、一般的組織的な教育思想史の方面に到つては、いまだ未開拓の部面が多分に殘されて居る。而してこの方面は未開拓の部分であるだけこれに伴ふ研究困難も亦著しいわけである。こんな事情から、この方面の研究も亦極めて遅々たる歩を運んでゐるに過ぎない。本書もこの遅々たる歩みの僅かな一歩に過ぎないかも知れないが、この方

(1)



334289

面の著書の鈔い現在に於ては、或は何かの存在理由をもち得るであらう、と、こうしたはかない期待を抱いて本書を世に送るのである。大方の批正と示教とを仰ぐことが出来れば幸甚である。本書を書くにあたって参考にした文献は可なり多数に亘つてをる。一々書名をあぐるの煩雑を避け、只先聲諸氏の思想的援助に對して厚く敬意を表するにとめておく。特に直接間接の御指導を辱ふしつある越川大分縣師範學校長には、本書の原稿の御閱讀と御批正を乞ふ筈であり、先生の御快諾も得てゐたのであるが、御洋行中の爲途に其の意を得ることが出来なかつたのは遺憾である。終りに淡窓研究の資料を御恵み下さつた中島市三郎氏、本書出版に當つて厚き援助を賜つた教育改造主筆武田勤治氏に深く感謝の意を表する。

昭和五年一月

大分にて 著者 謹

(2)

例言

一、從來殆ど等閑に附せられてゐた日本教育思想史を一先づ纏めて見たものが本書である。著者が筆を執るに當つて特に注意を拂つたのは次の諸點である。

(一)、太古より現在に至るまでの我國の教育思想を系統的に考察し、本書一冊におさめんとしたと。

(二)、隨神の道を日本思想の中心と見、儒教佛教はその兩翼たるべきものと見、其の三者の解説に力を注いだこと。

(三)、我國の教育は古今三千年にわたつて一貫してをること。即ち明治維新後の教育は西洋教育の移入矯正しでなくて、從來の日本教育それ自らの延長であり發展であることを明かにせんとしたこと。

(四)、從來の日本教育史は、動もすれば佛教の教育上に於ける功績を見落しがちであつたから、其の點には特に力を入れたこと。

(五)、獨立學派の思想が我國思想史上に於て、特に重要視さるべきであると考へ、三浦梅園、帆足萬里、廣瀬淡窓三先生の思想と教育説を紹介しておいたこと。

(1)

(六)、我國の思想家にあつては、其の倫理説と教育説とが密接不離の關係にあるから、その兩者を考察したること。

(七)、研究の便宜上、出来るだけ西洋教育史と比較し或は連絡をとつておいたこと。

(八)、俗に東洋教育史とよばれてゐる支那の教育史は、必要なる限りに於て我が教育思想史に統一して記述しておいた。文檢教育科等に於ける支那教育史の研究は、この程度で十分である。

(九)、現今師範學校に於ける日本教育史の教授用参考書及び生徒學習用の参考書が殆ど缺乏してゐる。従つて著者多年の経験によつて其の缺を補はんとしたのである。

(一〇)、文檢教育科受験準備上最も不便を感じるのは、日本教育史の良参考書がないことである。本書に於てはその缺を補はんことを期した。尙修身科受験者にも日本倫理學史研究上相當便宜を與へ得ることと信ずる。

二、文檢教育科及び修身科受験準備用として本書を参考されんとする方は、次の項を熟讀されて後研究に掛られんことを希望する。

(一)、知識の價値はその結論にあるのでなくて結論に達するまでのはたらきにある。合格か否かは結論的知識を所有するか否かによるのではなくて、問題をこなす力の有無如何にあるのである。それで單に答案式のおあつらへ向きの参考書だけ讀んだのでは、結論的知識は得られるが、その

知識に力がない。従つて受験者は或點までは自ら苦んで、その結論を作るべきである。その結論を作るところに眞の力がつくのである。本書は答案的な内容を與へようとするものでないから、讀者はこの中から、日本教育史の答案的な結論を構成しなければならぬ。その勞作をあえて惜まないとともに眞の力はつくものであることを悟られたい。

(二)、けれども單に讀者を苦しませる爲に書いものではない。著者自身の體驗から、從來の何れの日本教育史よりも、より受験的に組織されてゐる筈である。讀者は從來提出された問題と比較しながら、何れの部分が重要であるかに注意されたい。そしてノート作成の臺本とされるならば利する點が多いであらうと思ふ。

(三)、西洋に於てもそうであらうが、特に日本思想に放ては、哲學説、倫理説、教育説の三者が引きはなされぬ關係にある。教育説は哲學説や倫理説の實際論の如き位置にある。即ち哲學や倫理で説いた理想の實現方法を論じたものが教育説なのである。日本教育思想史と題しながら哲學説や倫理説を取扱つたのはこの爲である。しかし教育科受験者は教育説に主力を注ぐべく、修身科受験者は哲學倫理説に主力を注がれたい。しかして全體を通讀することは、自己の研究を一層助けるであらう。

(四)、引例文は一層深く研究しようとする人の爲と、著者の論述が獨斷的でないことを證する爲に

入れたのであるから、準備を急ぐ場合には本文だけ読めばよい。

日本教育思想史 目次

- 第一章 緒論.....一
- 第一節 日本教育史研究の必要.....一
- 第二節 日本教育史の區分.....九
- 第二章 太古の教育.....三
- 第一節 時代の概観.....三
- 第二節 太古の思想.....六
- 第一 太古の世界観.....八
- 第二 太古の人生観.....九
- 一、神觀 二、靈魂觀 三、生死觀 四、善惡吉凶觀 五、罪惡觀
- 第三節 太古の教育.....三
- 第一序説.....三

第二 太古の教育理想……………三三

一、敬神崇祖 二、忠孝 三、武勇

第三 太古の教育方法……………二九

第二章 上古の教育……………三〇

第一節 時代の概観……………三〇

第二節 儒教の傳來と教育……………三三

第一 儒教傳來の概況……………三三

第二 支那古代の教説……………三四

第三 孔子の思想と其教育……………三七

一、小傳 二、根本思想 三、教育の理想 四、教育の方法 五、要約

第四 儒教の影響……………四二

一、國民道徳思想への影響 二、道徳的感化影響 三、一般思想への影響 四、文字と文化の傳達

第三節 佛敎の傳來と教育……………四五

第一 佛敎傳來の概況……………四五

第二 印度古代の思想……………四七

第三 釋迦の思想と其教化……………五〇

一、小傳 二、教説 三、教育法

第四 佛敎の影響……………六〇

一、國民思想と佛敎 二、國民生活と佛敎 三、國民教化と佛敎 四、學校教育と佛敎 五、藝術の發達と佛敎

第四節 聖徳太子の教化事業……………六二

第一 時代の弊風……………六二

第二 聖徳太子の教化事業……………六四

一、冠位の制定 二、憲法の制定 三、學問の奨励 四、佛敎の奨励 五、學校教育

第五節 大化の改新及太寶令と教育……………六七

一、大化改新の歴史的意義 二、天智天武二天皇の教育事業 三、太寶令と教育

第六節 家庭教育及び社會教育……………七二

一、家庭教育 二、社會教育

第四章 中古の教育

第一節 時代概観	四			
第二節 私學の教育	六			
一、私學勃興の理由	二、主なる私學			
第三節 家學の教育	六			
一、家學勃興の理由	二、主なる家學			
第四節 菅原道真と其の教育的感化	六			
一、小傳	二、事績	三、感化影響		
第五節 最澄空海の日本の佛教	六			
一、最澄の天臺宗	二、空海の眞言宗			
第六節 家庭教育	六			
一、家庭生活の狀態	二、知的陶冶	三、道德的陶冶	四、藝術的陶冶	五、身體的陶冶
第七節 社會教育	六			

第五章 中世の教育

一、書庫の經營	二、國史の編輯	三、慈善事業	
第八節 女子教育	九		
一、假名の發明と女子教育	二、女流作家の輩出	三、一般家庭に於ける教養	
第一節 時代の概観	九		
第二節 武士道教育	九		
一、武士道の意義及び起原	二、武士道の發達	三、武士の教育	四、武士教育と騎士教育
第三節 新興佛教と其教化	一〇		
第一 禪宗と武士教化	一〇		
一、禪宗の教義	二、禪宗と武士		
第二 淨土教と民衆教化	一〇		
一、法然と淨土宗	二、淨土宗の教義		
第三 眞宗と平民教化	一三		

一、親鸞と真宗 二、真宗の教義 三、真宗と國民教化

第四 國家的宗教日蓮宗……………二一九

一、日蓮と日蓮宗 二、日蓮宗の教義

第四節 勤王思想の發達……………二二三

一、勤王思想發達の動因 二、勤王思想の發達(其一) 三、勤王思想の發達(其二)

第五節 學校教育……………二二六

一、足利學校 二、金澤文庫 三、基督教の學校

第六節 寺院の教育……………二三三

一、僧文筆の事情 二、五山の文學 三、寺小屋教育

第七節 女子教育……………二二九

第六章 近世の教育……………二四一

第一節 時代の概観……………二四四

一、徳川家康の文教奨励 二、歴代將軍の文教奨励 三、朝廷の文教奨励 四、民衆努力の充實 五、教育の內容 六、教育の機關

第二節 朱子學の發達……………二五三

一、孟荀二氏の學說 二、周程二氏の學說 三、朱子の學說

第三節 朱子學派の教育……………二六一

第二 藤原惺窩……………二六二

一、小傳 二、學風 三、教育論 四、批評

第二 林羅山……………二六五

一、小傳 二、學說 三、教育法 四、批評

第三 山崎闇斎……………二六七

一、小傳 二、學風 三、學說 四、教育法 五、蘭書の影響

第四 木下順庵……………二七二

一、小傳 二、教育法 三、其の影響

第五 雨森芳洲……………二七五

一、小傳 二、倫理學說 三、教育說 四、批評

第六 室鳩巢……………二七九

一、小傳 二、學風 三、倫理說 四、教育說 五、批評

第七節 中村悒齋……………	一八五
一、小傳 二、倫理說 三、女子教育論	
第八節 貝原益軒……………	一八七
一、小傳 二、學說 三、哲學說 四、倫理說 五、教育說 六、教育說批評	
第四節 陽明學の發達……………	二〇六
一、程明道の學說 二、陸象山の學說 三、王陽明の學說	
第五節 陽明學派の教育……………	二一一
第一 中江藤樹……………	二二三
一、小傳 二、學風 三、哲學說 四、倫理說 五、教育說 六、批評	
第二 熊澤蕃山……………	二二五
一、小傳 二、學風 三、學說 四、教育思想 五、批評	
第三 三輪執齋……………	二二三
一、小傳 二、學說 三、教育學說	
第四 中根東里……………	二二六
一、小傳 二、學風 三、學說 四、教育法	
第五節 佐藤一齋……………	二二四
一、小傳 二、學風 三、哲學說 四、教育說 五、批評	
第六節 大鹽中齋……………	二二九
一、小傳 二、學說 三、教育法	
第六節 古學派の教育……………	二五二
第一 伊藤仁齋……………	二五二
一、小傳 二、學風 三、哲學說 四、倫理說 五、教育說 六、堀川學派	
七、批評	
第二 伊東東涯……………	二六七
一、小傳 二、學風 三、復性の辨 四、教育說 五、批評	
第三 荻生徂徠……………	二七三
一、小傳 二、學風 三、倫理說 四、教育說 五、批評	
第四 太宰春臺……………	二九二
一、小傳 二、學風 三、學說 四、教育說 五、批評	
第七節 折衷學派の教育……………	二九九

第一 細井平洲……………三〇〇

一、小傳 二、學風 三、教育說 四、批評

第二 片山象山……………三三三

一、小傳 二、學風 三、學說 四、教育說 五、批評

第八節 獨立學派の教育……………三三九

第一 三浦梅園……………三三〇

一、小傳 二、學風 三、哲學說 四、倫理說 五、教育說 六、要約

第二 帆足萬里……………三三八

一、小傳 二、學風 三、學說 四、教育法 五、學校教育論 六、要約

第三 廣瀬淡窓……………三三七

一、小傳 二、學風 三、倫理說 四、教育說 五、咸宜圃の教育

第九節 國學派の教育……………三六一

第一 荷田春滿……………三六二

一、小傳 二、國學思想

第二 賀茂真淵……………三六五

一、小傳 二、學風 三、國學思想 四、要約

第三 本居宣長……………三九〇

一、小傳 二、學風 三、哲學說 四、倫理說 五、教育說 六、要約批評

第四 平田篤胤……………四〇三

一、小傳 二、哲學說 三、教育說 四、要約批評

第十節 武士道學派の教育……………四〇八

第一 山鹿素行……………四〇九

一、小傳 二、學風 三、倫理說 四、教育說 五、要約批評

第二 吉田松陰……………四三〇

一、小傳 二、學風 三、學說 四、學校教育論 五、松下村塾の教育 六、要約

第十一節 歴史學派の教育……………四四六

第二 水戸學派……………四四七

一、水戸學の發達 二、水戸學の特色 三、水戸學の影響

第二 賴山陽……………四七七

一、小傳 二、學風 三、學說 四、教育法 五、影響

第十二節 實學派の教育……………四六二

第一 二宮尊徳……………四六二

一、小傳 二、學風 三、哲學說 四、倫理說 五、教育論 六、要約批評

第二 佐藤信淵……………四七四

一、小傳 二、教育思想 三、要約

第十三節 心學派の教育……………四七九

一、平民勢力の勃興 二、心學教の起原及び發展 三、心學教の綱領 四、心學教の教

育法

第十四節 洋學の發達……………四九〇

一、洋學の起原 二、蘭學の研究 三、其の他の洋學

第十五節 徳川時代の女子教育……………四九一

一、女子教育の主義 二、女子教育の實際

第十六節 昌平黌の教育……………四九三

一、沿革 二、教育の目的及び主義 三、教官及び生徒 四、教科及び教授法
五、試験 六、其の功績

第十七節 藩學、郷學及び私塾の教育……………四九六

第一 藩學の教育……………四九六

一、藩學の發達 二、藩學の教育主義 三、藩學の教科内容 四、藩學の訓練
五、藩學の教育の價值

第二 郷學の教育……………四九九

一、郷學の意義 二、郷學の發達 三、郷學の内容 四、郷學教育の價值

第三 私塾の教育……………五〇一

一、私塾教育 二、原委 三、續德書院

第十八節 寺小屋教育……………五〇五

一、寺小屋の起原 二、寺小屋の發達 三、寺小屋教育の目的 四、教師及び生徒
五、教科目と教科書 六、教授法 七、訓練法 八、批評

第十九節 徳川時代教育の約説……………五二二

一、根本思想 二、教育理想 三、教育主義 四、學校教育論 五、兒童研究
六、教育の方法

第七章 最近世の教育……………五六

第一節 時代概説……………五六

- 一、第一期(皇道主義時代) 二、第二期(歐化主義時代) 三、第三期(反動思想時代)
- 四、第四期(國民思想統一時代) 五、第五期(國民自覺時代) 六、第六期(國家發展時代)

第二節 教育制度の變遷……………五九

- 一、第一期の教育制度 二、第二期の教育制度 三、第三期の教育制度 四、第四期の教育制度 五、第五期の教育制度 六、第六期の教育制度

第三節 教育思想の變遷……………五四

- 第一 第一期の教育思想……………五四
- 一、皇道主義 二、實利主義

- 第二 第二期の教育思想……………五五
- 一、歐化主義 二、實利主義 三、自然主義 四、要約

- 第三 第三期の教育思想……………五〇
- 一、反動思想 二、開發主義 三、重なる教育書 四、要約

第四 第四期の教育思想……………五三

- 一、國民思想の統一 二、ヘルバルト主義

第五 第五期の教育思想……………五六

- 一、社會的教育學 二、實驗教育學

第六 第六期の教育思想……………五四

- 一、自由教育説 二、人格的教育學説 三、勤勞作業主義の教育説 四、公民教育説
- 五、藝術教育説 六、八大教育主張 七、教育即生活論 八、プロセクトメソッド
- 九、ドルトンプラン 一〇、文化教育學説

第四節 最近世の教育家……………五三

第一 福澤諭吉……………五

- 一、小傳 二、根本思想 三、教育説 四、明治教育に及ぼせる影響

第二 伊澤修二……………五七

- 一、小傳 二、功績

第三 高嶺秀夫……………五七

- 一、小傳 二、功績

第四 能勢榮……………五二
一、小傳 二、教育思想 三、功績……………

結論……………五三

日本教育思想史

安達久著

第一章 緒論

第一節 日本教育史研究の必要

華やかな誇りの歩みを續けて來た過去數世紀に亘る西洋思想の行手にも、一抹の暗雲が低迷し、行路轉回の兆が漂うてをる。今や思想界は西洋思想に満たされざる或者を發見して、東洋思想に安住の地を見出さんとしつつある。やがて乾からびた概念の砂漠を放浪してゐた魂が、東洋思想のオアシスにそのやすらひを見出すであらう。思ふに今まで人々はあまりに西洋思想を崇拜し、之に捕はれすぎてゐた。尤も西洋思想には幾多の長所があり、世界文化の進歩發展に寄與した點に大なる功績を認めなければならぬのである。けれども西洋思想の根柢には、反省しなければならぬ幾多の短所がある。第一、あまりに偏知的である。即ち凡ゆるものは知識によつて捕えられ解決し得るものであり、知識

は人間生活最高至上のものだと考へてゐるのである。果してこれは眞理であらうか。第二、あまりに分析的である。即ち與へられたものは分析され得るもの、而して分析によつてその本質を捕へ得ると假定して、何物でも直ちに切りきざんでしまふ。物質の如きは分析しても其の本質は失はないかも知れないが、分析すれば直ちにその本質を失ふところの生命をすら分析のメスにかけるのである。果して生命は分析によつて其の本質を捕え得るものであらうか。第三、あまりに形式的である。即ち凡て概念又は法則に縛めねば承知が出来ないのである。其の結果概念や法則に捕はれて、生きた事實をすら無視せんとする傾向があるのである。つまり西洋思想の根本的立場は、知的・分析的・形式的であり一言に約すれば部分的偏局的である。部分をいくら集めても全體とならぬ以上、部分的偏局的な西洋思想が、世界思想を統一するといふ事は不可能な事である。ここに西洋思想の行き詰がある。一世の名著スペンダラー (Oswald Spengler 1800—) の『西歐の没落』が、大戦後の歐洲思想界に大なるセンセーションを巻き起した所以も此處にあると思ふ。

斯様な行き詰は、單に今日に始まつた現象ではなくて、既に十八世紀の頃から明かに現れはじめてゐる。傳統的な西洋思想の本質を觀破し、今日の行詰を豫見した程の人々は、當時に於てすら、既に西洋思想の本質に批判の眼を向け、之に警告を與へてゐる。ゲーテやシュライエルマツヘルや、シヨーペンハウエル等はその主な人々である。

ゲーテ (Goethe 1749—1832) の如きは、今を去る百三十年の昔、早くも西洋思想の主知的概念的にして、體驗性に缺くる點を觀破し、其の著フアウストに於て、メフィストフェレスに『一切の理論は灰色で、綠なのは黄金なす生命の木だ。』と言はせてゐる。そして東洋思想の深遠にして、體驗の豊かさに驚歎してゐる。つまりゲーテは、西洋思想の本質の中に、今日の行き詰を生ずべき必然性あることを直覺して、概念の世界、理論の世界を捨てて、體驗の豊かな生きた生命の世界を求めてゐたのである。

シュライエルマツヘル (Schleiermacher 1768—1834) の如きも時代の先覺者であつた。彼れは宗教哲學者として思想史上に極めて重要な位置を占めてゐる。『宗教の本質は絶対憑依の感情であり、此の感情によつて人は宇宙精神を分有し、小宇宙として絶対に合致することが出来る。』と喝破してゐる。彼れが感情を重じたのは、知的分析的方法が眞の實在を捕へることが出来ないから、情意的、全體的な體驗によつて眞の實在を把握しようとしたことに由來するのである。これによつて彼の思想的立場が那邊にあるかを知る事が出来るであらう。

精神科學に於ける斯かる重要な方法も、自然科學萬能の十九世紀の初頭に於ては、共鳴者も思想の祖述者も至つて尠なかつたのである。然るに自然科學の限界の認識と、西洋傳統的思想の破綻とは、遂に自らシュライエルマツヘルの復活を呼びおこさずにはゐなかつた。これが十九世紀末から現代に

かけて、西洋思想界の寵兒とも言ふべきデルタイ (Wilhelm Dilthey 1833—1911) を盟主とする精神科學派の一派である。要するにシュライエルマツヘルによつて起され、デルタイによつて發展せられた所謂精神科學派は、西洋傳統的な知的分析的方法を捨て、情意的全體的な體驗 *Erfahrung* 理會 *Verstehen* を重んずる點に於て、頗る東洋的な色彩をもつてゐるものである。

更に一層東洋的な思想の持主は、意志の哲學を説くショーペンハウエル (Schopenhauer 1788—1860) その人である。彼は傳統的な西洋思想に満足する事が出来ず、何人もまだ手をつけなかつた時代に既に深く東洋思想殊に印度佛教を研究して、西洋思想に見出すことの出来ない魂の安住地を見出してゐる。彼れはウパニシャツドの奥義書を得て、「それは私の生命の慰めであつたし、又死の慰めであらう。」と嘆賞し、世界最高のそして最も稱讃さるべき讀物であり、思想であると激賞してゐる。現にショーペンハウエルの學徒であるドイツセンの如きも、ウパニシャツド奥義書を「永遠の哲學的眞理」と呼び、カントの残した實在の問題即ち物自體の概念は、印度哲學によつてのみ解決することが出来る。とまで言つてゐるのである。

猶最近は形態學說 *Gestalttheorie* なる新學說が現れて、それが自然科學の方面に、或は精神科學の方面に、大なる影響を與へてゐる。形態學說は柏林大學のウエルトハイマー (Max Wertheimer) によつて初めて唱へられ、同じく柏林大學教授のケーラー (Wolfgang Köhler) ギーゼン大學のコフカ

(Koffka) 等の研究唱和によつて學界に認められた學說で、從來の西洋認識法に反對して起つたものである。從來の西洋思想では、與へられたものを複合體であると假定し、之を要素に分析し、その要素間の法則を明にするのが一般的な方法であつた。即ち與へられた複合體は、部分の集積から成るものと見て、之を要素に分析するのである。然るに形態學說は、複合體の假定を排して統一體の存在を主張し、この統一體に形態と成素とを認め、而して形態は成素よりも一層根元的であると見るのである。つまり全體は部分の集合以上のある性質を有すると主張するのである。要するに形態學說は西洋思想に於ける傳統的な認識法に反旗を翻したもので、頗る東洋的な認識法である。形態學說は西洋に於ては新しい學說であるけれども、我々東洋人は遠い古から既に斯かる認識法をもつてゐたのである。此處に我々は世界思想が東洋思想に向つて動きつゝある一事實を見出すことが出来るのである。

兎に角西洋思想はその行くべきところまで行つてしまつた。そして今や行き詰の狀態にあるといふことは、シュペングラの西歐の没落を播くまでもなく明かな事實である。この局面を打開し世界思想を統一するといふことは、正に東洋思想に負はされた使命でなければならぬ。西洋思想が理知の鋭劍を投げ捨て、生命の鐵扉の前に降を乞ひ、東洋思想の神秘なる寶庫が、彼等の前に開かれやうとしてゐるのが現代の思想界の現狀である。to the orient これが世界思想の勇ましい掛聲である。

然らば謂ふ所の東洋思想とは何を意味してゐるであらうか。これについては種々の意見もあらうと

思ふが、つまり神道・儒教・佛教がその代表であるといふ事に異論はあるまい。而して儒教の起つた支那には儒教が行はれず、佛教の起つた印度に眞の佛教はない。眞の儒教も佛教も、その純粹な姿は我が日本文化の中にのみ見出すことが出来るのである。實に日本文化は東洋思想の凡ゆるものを抱藏してをるのである。故に我が國の文化の中には西洋に於て見る事の出来ない特長あるものが存するのである。只自然科学方面に於てのみ彼に及ばないのであつて、宗教・哲學・倫理・藝術等に於ては、彼に對して何等の遜色のない、否寧ろ彼に勝る幾多のものがあるのである。例へば教理深遠にして世界最高の哲學であり宗教である大乘佛教思想はそれである。就中日本の佛教としての禪宗や日蓮宗や淨土宗や眞宗等は、世界の何處にも見出す事の出来ない優れた宗教である。或は又我國古來の隨神道カンナガワノミチに基く皇室中心主義の國民道德思想や、祖先崇拜と結合してゐる忠孝一本の倫理思想等も世界に誇るべきものである。なほ武士道の精神、藝術方面に於ける日本畫及び能なども、我國獨自のものである。これ等の東洋文化を代表し、世界に誇るべき我が日本文化は、西洋文化に見る事の出来ない生命の躍動と豊かな體驗とを持つてをる。而して斯かる日本文化は、我古來の教育がはぐくみ育てたものに外ならない。して見れば東洋獨特の文化を明にして、世界文化の發達に寄與しようとするならば、必ず日本教育史を研究しなければならぬのである。

以上は一般思想史の上から、日本教育史研究の必要を考察したのであるが、吾々教育學徒としての

日本教育史の研究の必要は、尙それ以外にあることを忘れてはならない。元來教育の研究に於て教育史を研究する主要な目的は、第一・現今の教育實際が如何なる徑路を通つて來たかを理解し、第二・現今の教育理論が如何なる辯證的發展をなして今日に至れるかを知り、第三・過去の教育が如何なる信念を以て如何に活動し如何なる教育的効果を擧げ得たかを味ふ事にある。斯くして教育思想を豊富にし、識見を高め、教育精神を養ひ、教育者としての人格を完成する事が出来るわけである。

日本教育史研究の必要も、結局現在日本の教育の理論實際の由來を理解し、古來の教育家が如何に獻身的に活動したかを味ひ、吾人が日々從事してをる教育に貢獻せしめることにあるのである。勿論純粹學術としての教育史の研究は應用とか、利用とかの功利を目的とすべきではあるまい。けれども吾々の研究はどこまでも教育の爲の教育史である。従つて日本教育史の研究も單なる史實の記述といふよりは、現在教育を常に視點としつつ進まねばならぬ。

斯様な立場に對して或人は言ふかも知れない。現在の日本教育を視點として日本教育史を研究するならば、現在日本の教育は理論に於ても實際に於ても歐米教育の輸入だから、日本古來の教育史を研究する必要はないであらうと。なる程これも一理ある。大寶令の學制が今日の學制の起原でもないし寺小屋教育と小學校教育は直接に連絡もないやうに見える。今日の小學校令の前身はプロシヤのフレデリック大王がヘツケルに、オーストリアのマリア・テレサがフェルビーゲルに起草せしめたものであ

り、今日までの教育學説は殆ど西洋の教育思想家の説の翻譯である。けれども西洋の制度や思想を取り入れたその主體は本邦古來の日本精神であつた。和魂漢才と言ふ思想があるが、明治維新後の西洋思想を取り入れたのも、眞の日本精神を生かさんが爲であつたから、新語を作るならば和魂漢才とも言ふべき思想であつた。尤も明治初年は西洋崇拜、西洋模倣が強く一時は西洋に心酔する様な有様があつたが、やはり日本精神を全然忘れる事はなかつた。日本精神は過去に於て儒教の傳來とか佛教の傳來とかの他國思想に出會つた際にも、之等を同化して來た程の強い同化力を持つてゐたのである。そこで明治維新後の西洋思想に對しても、全く自己を見失ふ様な事はなかつた。して見ると今日の我國の教育も制度内容は西洋に負ふことが多大であるが、(制度も全然外國模倣ではない。學制は淡窓の高弟長三洲が咸宜園の教育制度を参考として書いたものだといふ)その根本に働いてゐる精神、教育的意志は我國古來の所謂大和魂であり日本精神である。この大和魂、日本精神が日本教育史を飾る教育思想となり、教育事業となつて現れたのである、斯く考へて來ると今日の教育が維新以前の教育と密接に關係して來るのである。

然しながら既に述べた様に、現在の我國の教育が、西洋の教育の影響を非常に多く受けてゐる事は否定する事が出来ない。その結果歐米の教育を取り入れる事に急で、過去に於ける我が教育の中に含まれた長所を取り入れる事を忘れてゐる。幼稚であつたとは言へ、徳川時代の教育の中にも今日學ぶべきものが多々ある。例へば教育者が實踐躬行、身を以て子弟を導びいたこと、或は教授に於ける個性の指導、訓練に於て師弟の情誼の厚かつた事等はその一例である。この點から考へても自國の教育の跡を研究することが必要なのである。汝自身を知る事が向上發展の基礎要件である様に、自國の教育史を知る事が、國家教育の必要條件でなくてはならぬ。

第二節 日本教育史の區分

教育は社會の要求に依つて起り、時代思潮の影響を受くるものである。随つて社會狀態の變化と時代思潮の變動とは必然的に教育を動かさねばやまない。だから時代によつて、教育理論も實際も特殊な様相を帯ぶのである。然しながら社會狀態や時代思潮は、突然に變化するものではない。わけても時代思潮は辯證的に、即ち後の思潮は前の思潮の長所を探り入れながら成長して行くものであるから従つて教育は前代と後代が密接に關係してゐる。それで各時代の教育を嚴密に區分する事は、言ふは易い事ながら事實は仲々容易ではないのであるが、吾々は一般國史の時代區分及び教育史家の區分を参考として、次の如き區分によりたいと思ふ。(主として中島半次郎教授高橋俊乘氏村岡典嗣教授の説に依る)

第一、太古の教育——儒教傳來以前

第二、上古の教育——儒教傳來より奈良朝まで

第三、中古の教育——平安朝

第四、中世の教育——鎌倉、室町、戰國時代

第五、近世の教育——徳川時代

第六、最近世の教育——明治以後

第一の太古時代はまだ海外文化の影響をうけない時代で、國民思想は素朴であり、純粹であり、自然であり、簡素であつた時代である。宣長の説く神ながらの道が、純粹に行はれてゐた時代である。従つて教育は單純ながら、純粹に國民性に基いて行はれた時代である。

第二の上古時代は太古の素朴的な單純な思想及び教育が、支那の儒教や印度の佛教によりて、稍複雑にして豊富にされた時代で、文化的素朴主義の時代である。狹義の教育の起原は此の時代にあるのである。

第三の中古時代は平安時代のことと、支那印度の思想と日本の思想とが融和し一時貴族教育の全盛を來し、文藝が長足の發展を遂げた感傷的主情主義の時代である。眞淵がこの時代を「たをやめぶり」の時代と言つたのは、如何にもよく時代相を一言に表してゐる。我國に於て教育制度が始めて整備したのはこの時代である。

第四の中世時代は所謂鎌倉室町時代で、武士階級が社會の實權を握り、武士道なる我國特有の時代思想を發達せしめた實行的主意主義の時代である。又一般民衆がようやく教育の必要を感じ始め、平民教育の勃興しはじめた時代である。

第五の近世時代は舊日本の文化を一先づ完成して、新日本の偉大な發展の素地を描いた反省的主知主義の時代である。我國古來の古道、前時代の武士道、儒學思想、平民的な實學思想等思想界は百花撩亂の華かさを現出し、四民の教育機關も整然たる體系を備へ、偉大な教育家が出て、理論に實際に活躍した時代で、日本教育史上最も意味多き時代である。

第六の最近世時代は、王政復古し、凡ゆる教育が國家によつて統一され、教育の理論實際が西洋より續々移入され、建國以來二千五百年の間に生長した日本精神によつて消化せられ、國民文化の確立せる世界の有數なる一教育國としての今日の狀態を爲すに至つた時代である。

吾人は日本教育の變遷發達を、以上の六時代に分けて考察しようとするのであるが、眞の時代の觀念は、今後の敘述によつて明らかなるべきものであつて、今までの論述は單に概觀に過ぎないのである。

時代
第一、太古の教育
第二、上古の教育
第三、中古の教育
第四、中世の教育
第五、近世の教育
第六、最近世の教育

對教育	象育	神道	神儒佛	文藝	道德	學問	文化
				貴族	武士	平民	國民

◎教育内容が辯證的に推移してゐることに注意せよ。

◎教育對象が特權階級より民衆に擴大せる事に注意せよ。

第二章 太古の教育

第一節 時代の概観

神武天皇以前は所謂神代の時代で、正確な史實を知る事は出来ない。神武天皇以後と雖も、第三十三代推古天皇の頃までの歴史は、神話及び傳説が主となつてゐて、史實と傳説とを正確に判別する事が困難である。しかしながら古事記や日本書紀等の記録によつて古代の状態を略推察する事が出来ると思ふ。

古事記や日本書紀は推古天皇から約百年の後、詳しく言へば奈良朝の元明天皇の和銅四年、稗田阿

禮の暗誦してゐた帝紀及び舊辭を、太安麻呂が撰したものが古事記であり、元正天皇の養老四年に、舍人親王及び太安麻呂が完成したものが日本書紀であり。奈良朝まではこんな修史事業はなくて、史實は語部といふ特殊な職業家によつて次々に語り繼がれたものである。記紀もつまりこの語部によつて、語り傳へられた歴史の物語を集成したもの以外ならない。それで語部によつて語り繼がれてゐる間に誤りも加はつたであらうし、脚色も可なり加へられたであらう。とりわけ記紀を撰輯した當時の時代思想が、餘程加味されてゐるであらうことは想像されるのである。即ち奈良朝時代の思想とか社會状態とかを、太古に溯らしてゐると思はれるのである。例へば古事記の伊弉諾尊と伊弉冉尊とが國家を創造する物語の中で、女神の伊弉冉尊が發動的に出られたので水蛭子といふ不具者が生れ、男神の伊弉諾尊が發動的にでられて立派な子供が生れたと傳へられ、男尊女卑的な思想が太古にあつた様に傳へられてゐるが、それは儒教・佛教の思想による男尊女卑的思想をもつた當時の状態を、太古に映じたものであらう。我國の太古は母系制度に近い家庭組織であり、天祖も女性の方であるとせられてゐるから、決して男女尊卑的思想はなかつたと思はれる。

こんな事情だから、太古の状態は單に記録のみに依つて明にする事は出来ない。朝鮮・支那等の記録とか考古學・人類學・言語學とかの力を借らねばなるまい。とは言ふものの吾々は史實の研究が目的でもないし、又斯かる餘裕も與へられてゐない。吾々の目的は我國三千年來に流れて來た國家的教育精

神の源泉が、奈邊に發してゐるかを知らざる事である。記紀の内容に正確な史實を發見する事が出来なくとも差支ない。記紀の物語が個人的の産物でなくて、古代人の集合精神から生れた社會的な産物である以上、それ等の神話傳説の精神を味讀することによつて、太古の人々の思想習慣等を知る事が出来るのである。

古事記の物語りに依れば、天御中主神が高天原の主宰者である。この天御中主神を始めとして五柱の別天神及神代七代の悠久な時代が経過して、其の最後に伊弉諾、伊弉冉の二神がお出ましになる。二神は國土大八洲を創造され、天下の主天照大神及び月讀尊、素戔嗚尊をもお生みになる。これから天岩戸の變や八岐大蛇退治等の雅な物語に聞かされたなつかしい場面が展開する。それから素戔嗚尊の子孫である大國主命の國譲りとなり、瓊々杵尊の降臨となつて物語りの舞臺は、高天原からこの地上にをりて来る。瓊々杵尊は吾田の笠狭碕今の薩摩國阿多邊に宮居せられ、彦火々出見尊、鵜飼草葺不合尊を経て、神日本磐余彥尊即ち神武天皇に至つて東征となり、建國即位によつて帝國の基礎は確定されたのである。日本書紀によれば現在から二千五百有餘年の昔の事であるけれども、書紀の年代は約六百年程の誤算があるそうである。(栗田元次教授著綜合日本史概説二〇頁)

要するに斯かる神代の物語の精神は次の如くである。即ち奈良朝以前の君民關係に關する思想の物語化せられたものであつて、我國は國土・人民・山川草木に至るまで、總て皇祖天照大神と同じ様に伊

弉諾・伊弉冉の二神から生れたものである。従つて天照大神の天日嗣たる皇室は、國家の大宗家であり大中心である。永久に國土人民と同體不離である。皇室は國民と吉凶禍福を共にされ、人民を愛撫される。時に兵馬の權が豪族に移るような事があつて、人民が其の爲に苦しむに至れば、皇室は必ず人民に味方され、文武の實權も自然に皇室に復歸するのが常である。斯くて君臣の分は判然として亂れず、皇室は萬世一系であるとの意味に外ならぬのである。

最後に太古の社會狀態を考察しよう。當時の社會は一種の氏族制度の社會で、氏と姓が社會制度の基であつた。共同の祖先から出た家は集つて一つの氏を作り、氏上が之を支配し、其の守護神たる氏神を祀り、其の崇拜によつて血族的團體の結束を強め業務に勵んだ。職業は代々世襲であつた。これが爲に職業に熟練し文化の發展に効果が多かつた。氏の外に血族に關係ない團體に伴又は部がある。これは職業によつて成り立つた團體で、捕虜や歸化人等から出來たものである。中臣部は神と人の中を取次ぐ團體を意味し、忌部は穢を忌み神に仕へる團體であり、物部は武器即ち軍事を司り、玉作部・髣作部・弓削部・矢作部・服部・土師部等はそれぞれ玉・髣・弓・矢・織物・土器の類を司つたのである。

當時の家庭生活を見るに、結婚すると妻屋を建てて、多くはそこに妻だけ居らせて夫は餘所から通つた。これは母系制度の名残と見て差支ない。生れた子は母の許で成長する。そして普通親といふと母親を指して言つてゐたのである。この爲に子に對する母親の力と、子の母親に對する親みは父親の

それよりも強かつた。のみならず一般女性の素養に於ても社會的地位に於ても、決して男子に劣らなかつたやうである。天照大神が女神とせられてあるのみならず、神功皇后の如く軍事上まで女性活動の物語を傳へられるのはこの爲である。

第二節 太古の思想

儒學傳來以前の太古の文化は、所謂古神道又は純神道の時代であつた。古神道又は純神道とは、後世の佛敎神道、儒敎神道等の俗神道に對しての名稱であつて、之を思想史乃至文化史の方面より言へば、自然的素朴主義であり現實的樂天主義である。自然的素朴主義とは、宗教、道德、文學、法律、政治等の一切の文化が未だ分化せず混一の状態にあり、國民の意識と行爲とが分かれず、個人としても全體としても國民意識が素朴自然の域にあつた階段をいふ。しかもその間に一般原始文化共通の現象として、自ら宗教意識が中心となり、他を支配し或は包含してをつたと言ひ得るところから、宗教學的な古神道、純神道の名稱が用ひられるのである。(岩波講座卷四村岡教授の日本思潮參照)而してこの自然的素朴主義は、文化の發達低き時代の一般的現象である。我國古代にのみ存した特有現象でなく、未開の状態に於ては何れの民族何れの社會を問はず常に斯かる過程を踏むものである。次に現實的樂天主義とは、自然を愛し自然を崇拜し、此の現世を理想的のものと見て、出來得る限

り現世享樂に生きようとする人生の見方であつて、言ふところの自然とは、吾々の住んでをる自然界及び吾々が生れながらに享受してゐる根本的な性質を意味する事は言ふまでもない。斯かる人生の見方は、死後の世界をあこがれ、現世を厭ふべきものと考へる來世的な厭世觀に反對するものである。

この現實的樂天主義は、希臘古代のそれと餘程共通性を有するものではあるが、各民族の一般的な共通現象ではなくて、地理的環境及び民族の特性に基づく特殊のものである。我が國が瑞穂國の名の如く天然に恵まれてゐて、而かも島國で他民族との争鬭に脅されることがなかつたことは、生活を安易平和ならしめ、且美しい自然に接してゐた爲に、自然的樂天的な溫和淡泊な性情を有するに至つたものである。この現實的樂天主義は次の現人神崇拜と吉凶相生觀によく現はれてゐる。

第一現人神崇拜とは天皇の現身そのまゝを神として崇拜する信仰をいふのである。太古の人は自然をも偉人と同じ様に崇拜した。その結果自然界に於ける最も偉大な太陽と、人間界に於ける最大の偉人であられる皇祖天照大神とを同一視したのである。これは現實主義の最高潮に達した思想なのである。

第二吉凶相生觀とは、本居宣長が古事記傳説の解釋のうちに見だした素朴主義の哲學である。古神道には儒敎の天命とか、佛敎の因果應報とかの抽象的理論はなく、ただ産靈の力の永遠の發現を信じたのみである。人生に凶があつて産靈の力を阻害することもあるが、結局は吉に歸するものである

と信じたのである。死といふのろふべき事實に對しても、神として生れるのだと解して、これを祭るのである。古神道には悲觀的厭世的思想は毫もなかつた。これ樂天主義の名によつてよばれる所以である。

以上は太古の思想を極めて概括的に考察したのであるから、その自然的素朴主義、現實的樂天主義の具體的内容は明にし得なかつた。依つて次には太古の思想を世界觀、人生觀の二方面に分けてその具體的内容を明にしよう。

第一 太古の世界觀 日本古代人の世界觀は幼稚であり單純であつた。地理的世界としては伊弉諾、伊弉冉二神の創造したと信じてゐた大八洲が主なる眼界であつた。次に超地理的世界としては、高天原、常世、黄泉の三界の存在を信じた。高天原は天上界で神々の國であつて、此の世を理想化したよりよい國と考へられた。常世はじめは遠い國の意であつたが、後には五穀豐饒な國といふ觀念内容も加つて、此の現世に近づいた意味をもつて來た。黄泉は生の國の反對で死の國であつて、伊弉冉尊が主宰者である。しかし後の佛教思想の如く、死の國を道德的善惡行爲應報の場所といふやうに、現世以上に大なる價值をもつ國とは考へなかつた。その點にも樂天主義思想があらはれてゐるからおもしろい。

こんな世界觀は太古の日本人の創造になるものであるか、或は外部から來た思想の影響を受けたも

のであるかは、學者によつて異論がある。「大和民族は矢張蒙古や、トルコや、ツングース等と同じ亞細亞大陸北方民族であるウラル・アルタイ族であつて、その分化の著しくない中に、早く渡來したものであらう。」(栗田教授著綜合日本史概説五頁)といふ斷定が正しいと見るならば、太古の斯かる世界觀は滿蒙シベリヤ方面に於けるシャAMAN教 Shamanism の影響を受けたものであらう。人類學考古學の大家島井龍藏博士の如きも「日本の我々祖先が信じて居つた宗教はシャAMAN教であつたであらう。少くともシャAMAN教の一種であつたらう。」と推定してゐる。

シャAMAN教の哲學は此の宇宙を三段に分けてゐる。第一は天上の世界 Upper world で、ここには最上の神がましますのである。我が高天原に相當する。第二は中津國 Middle world で人間鳥獸草木の生きてゐる國で我が常世に相當する。第三は下界 Lower world の國で、惡魔の國で人間に似た生活を營んでゐる。これは我が黄泉の國に相當するのである。シャAMAN教の世界觀と、日本太古の世界觀が相似してゐるのみならず、シャAMAN教が古神道の審神者に當る女巫を使つて、神人の交通をすることや、善惡二種の精靈を認める事などよほど太古の思想と相通するものがある。

第二 太古の人生觀 太古の人生觀を構成した要素的觀念には色々あるが、その主なるものは、神觀、靈魂觀、生死觀、善惡吉凶觀、罪惡觀等である。今これ等の諸觀念を簡單に考察する。

一、神觀 神の意義に就いても色々な説があるが、本居宣長や新井白石の如く、神は上の義だと言ふ

説が最も穩當である。太古の人々は人、自然物、自然現象何れにも關らず、偉大であり強力であり珍奇であり不思議であるものは皆神と見たのである。一般的に言へば神は理想化した人間の最高タイプである。神話に出る國土經營の神々はそれである。こんな人格神は普通の人間より偉大であると同時にどこまでも人間的に喜び悲しみ現世を享樂せられてゐるのである。武勇絶倫の素戔嗚尊が男泣になくといふ物語が古事記に傳へられてゐる。ここに我太古の人々の思想が、自然的現世的素朴的であるといふ一面が現れてゐる。又我國の神々は他國の神話に現れる神々に見るやうな、殘虐醜惡な點が少しもない。ここにも平和な樂天的な太古の思想の面影が偲ばれるのである。

二、靈魂觀 太古人は神や人や其の他の事物に、靈妙な活きをする半精神的・半物質的の靈魂の存在を信じた。人間に於てはふだんは身體の中府に靈魂が宿つてゐるが、そこを出て遊離すると、身心の平衡を害して病氣になる。こんなときには之を鎮めてもとにもどさねばならぬ。これを鎮魂といふ。この靈魂には荒魂アラミタマ、和魂ニギミタマ又は奇魂クシミタマ、幸魂サキミタマ等の種類がある。死ぬると靈魂は黄泉國に行つたり、死體に残つたりする。

斯く靈魂の不滅を信ずる結果、祖先の靈を崇拜し其幸福を祈り、また子孫の繁榮を願ふことになつて祖先崇拜の思想が生じたのである。後になつて此の祖先崇拜は、現人神崇拜皇室崇拜と一致して、我國民道德及び國民教育の中心たる忠孝一致の思想となるのである。

三、生死觀 太古の人は靈魂の不滅を信じたから無から有が出たり、有が無になつたりするとは考へない。生れたといふのは、生殖作用によつて見えなかつたものが見えるやうになつたことである。死んだといふのは見えてゐたものが見えなくなつたのである。死んだのは隠れたのであつて、必ずしも消え失せたのではないと考へた。その隠れたのを再びよみがへらしめようといふのが葬祭の一つの意義であつた。死といふものを極めて素朴的に、また一面から言へば樂觀的に達觀してゐた。ここにも太古の思想の素朴的、自然的、樂天的な様子が窺はれるのである。

四、善惡吉凶觀 善惡吉凶觀については既に一部分を述べたから略しようと思ふが、要するに生成が善であり吉である。之を阻害するものが惡であり凶である。けれども結局は産靈の神の力によつて、善吉換言すれば生成が勝を占めると確信する。この點にも太古の思想がよく現れてゐる。

五、罪惡觀 古代人は感情上不快であることを惡と見た。古事記や大拔詞などに記されてあるものによれば、(一)畔放すなはち田の畔を取り放つて農作に害を與へること。(二)田に水を引く爲の溝を埋めて耕作を妨ぐること。(三)尿戸すなはち清淨なるべき場所へ不淨物を捨てること。(四)生物をいぢめること。(五)親子相通すること。(六)畜犯。(七)他人に害を與へること。(八)見苦しい皮膚病等は罪惡と考へられた。しかしこれ等の罪惡も戒によつて邪をきよむれば罪はのぞかれると考へるのである。

第三節 太古の教育

第一、序説 教育史に於て教育の起原を如何なる見地によつて決定すべきであらうか。ウィルマンは文字の行はれる時代を以て始むべきであると唱へた。文字の使用を以て教育の起原とするならば、日本の教育は儒教傳來以後に始まると考へなければならぬ。尤も神代文字、阿比留文字、出雲文字、等が儒教傳來以前に存在してをつたと落合直澄氏は「日本古代文字考」の中に述べてゐるが、若し左様な事實が存在してゐたとしても一部分的な現象で、教育の起原を決定する程のものでない事は明かである。(神代文字については吉田博士本邦教育史概説附録を見よ)

又或者は學校の起原を以て教育の起原を定むる様に主張するものもある。日本に於ける學校の起原として、明治十年刊行の文部省『日本教育史略』五十八頁に「始メテ學校ヲ建ツ」として

天智帝二年大學ヲ設ケ博士學生ヲ置ク是學校ノ始ナリ天武帝四年ニ占星臺ヲ建テ天文曆數ヲ候ハシム文武帝
大寶元年大ニ制度ヲ改メ大學ヲ京都ニ置キ國學ヲ諸國ニ置グ大宰府ニ至リテハ西海ノ重鎮ナルヲ以テ特ニ學
校ヲ建ツ其他典藥陰陽ノ二寮ヲ京師ニ置キテ諸國ヲ統フ大學博士音博士醫博士女醫博士曆博士天文博
士ヲ置キ學生業ヲ分チテ講習ス外ニ雅樂寮ヲ設ケ樂師アリ古樂蕃樂ヲ教授スルコトヲ掌ル

の文章があるが、吉田博士は種々考證の結果「我國に於ける學校の起原は、既に天智天皇以前にあつ

たものと言ふことが出来る。」と本邦教育史概説九頁に斷定されてゐる。中島半次郎教授は、儒教傳來の當初皇子菟道の稚郎子が阿直岐について學ばれたのが、一種の宮庭學校であつたと、東洋教育史二四頁に明に斷定してゐる。何れにしても學校の起原を教育の起原とすれば日本教育史は儒教傳來以前にさかのぼることは出来なくなる。

然しながら學校なきが故に日本の太古に教育なしと考へたり、日本教育史が太古にさかのぼり得ずとする思想は甚しく難見たるをまぬかれない。元來教育には狹義の教育と廣義の教育の二様の意義がある。學校教育は狹義の教育であつて、教育にはそれ以外に一般文化の傳達を意味する廣い意義もあるのである。今教育を廣義に解するとき、我國太古に教育なしとする思想は何等の根據も持たなくなる。太古には我國特有の文化傳達様式があり、従つて教育事實も存したのである。勿論太古の教育が極めて幼稚で、且無自覺的であつた事は言ふまでもない。自覺し始めたのはおそらく傳説の整理されはじめた頃、即ち記紀の編纂されはじめた頃であらう。

第二、太古の教育理想 記紀の物語に於ける神話傳説の中心は、神代に於ては皇祖天照大神であらせられ、人代に於ては神武天皇であらせられた。従つて御二方の御精神、御意志を奉體する事が、大和民族一般の生活理想であり、教育理想であつた事は察するに難くない。

天照大神の御意志は神勅に最もよく現れてゐる。大神は瓊々杵尊に、八咫鏡、叢雲劍、及び八咫瓊

勾玉の三種の神器を授け、

豊葦原千五百秋之瑞穂國、是吾子孫可_レ王之地、宜爾皇孫就_レ而治焉、行矣、實祚之隆、當與_二天壤_一無窮矣。(書紀)

の詔勅を下し給はつた。詔勅は王道主義・徳治主義を中心とされる日本皇室の繁榮と、實祚無窮・萬世一系の國體たるべきを明白に豫言されたものである。三種の神器を授けられたことについても色々な説がある。北畠親房は神皇正統紀に「鏡の如く分明なるをもちて天下に照臨し給へ、八坂瓊のひろがれるが如く曲妙をもちて天下をしろしめせ、神劍をひきさげて順はざるものをたひらげ給へと教ましましけるとぞ」と述べてをる。一條兼良が儒教の三徳を配して以來、儒者は一般に神器は知仁勇の三徳を表すものと解してをる。若し之等の説が、知情意或は知仁勇の徳を示さんが爲に、大神が多くのもの中から鏡玉劍を選ばれた、と解するならばそれは附會の説である。太古にはまだ知仁勇といふ様な抽象的道德思想は自覺的に存在しなかつたと見なければならぬ。大神が知仁勇の三徳を示さんが爲に三種の神器を選ばれたのではなくて、選ばれた三種の神器が、發達した後世の徳目を不思議にもシンボライズしてゐたと解すべきであらう。知識概念によらなかつたにもかかはらず、知識概念によつたと同じ結果を得られたところに、我天祖の偉大さがある。

神武天皇は天祖の詔勅に含まれた建國の精神を裏書きされた方である。その御意志は日本書記に出

てゐる天皇の勅語によくあらはれてゐる。

是の時に運は鴻荒に屬ひ、時は草昧に歸れりき。故、蒙_レうして以て正を養ひ、此の西の偏を治らしめき。皇祖皇考、神にしてまた、聖にましまし、慶を積み、暉を重ねて、多に年序を歴たり、天つ祖の降りまししより、以て速今に一百七十九萬二千四百七十餘歳なり。

上は乾靈國を授けたまふの徳に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め、然る後、六合を兼れて都を開き、八紘を掩うて字と爲さむ亦可からずや。

以上のうちに養正、積慶、重暉の三綱が建國精神として發見されるであらう。養正とは至正至公の道を實行して行くことであり、積慶とは慈愛の心を以て眞善美の國家を建設することであり、重暉とは叡知を以て公道を照らす意味である。天皇の建國精神は至正至公主義であり、叡知主義であり、平和的眞善美建設主義であつた。

以上述べた皇祖天照大神並に神武天皇御二方の建國精神を要約すれば、萬世一系の天津日嗣を擁護し、皇統を無窮に傳へ、理想的國家を建設し、皇威國威を中外に宣揚することである。この建國精神は、斯かる精神を體現されたる神々を尊敬し(敬神)、この精神を奉じた祖先の意志を繼ぎ(祖先崇拜)、大君並に親に誠を盡し(忠孝)、國家や皇室に禍ひをなすやからを征服するに足る力(武勇)、を有することによつてのみ實現されるわけである。故に建國精神を理想とする太古の教育は、敬神、祖先

崇拜、忠孝、武勇等を理想としたのである。

一、敬神崇祖 太古の人に取つては神を敬ふことはとりもなほさず祖先を崇拜する事であつた。これは神は祖先の方々であつたからである。神武天皇も即位四年の二月鳥見山に皇祖天神を祭られて、建國の次第を御報告になられた。そのときの詔に

我皇祖の靈天より降臨りて朕を光し助け給へり。今諸の虜ども已に平ぎ、海内無事なり。以て天神を郊祀りて大孝を中べ給ふべし。

とある。又代々の天皇は三種の神器を宮中に祀り、就中鏡は天照大神の御神體としてとりわけ崇敬されたのである。後になつて崇神天皇は鏡劍を大和の笠縫邑に奉遷し、皇女豊鍬入姫命をして奉仕せしめ給ふた。次代の垂仁天皇は之を更に伊勢の五十鈴川上に遷し祀られた。かくして伊勢神宮は皇室並に人民の崇拜の中心となつたのである。

臣下に於ても諸の氏は祖神を祭つて、その祖神たちが天津日嗣の大宗家に盡した意志を繼承する事につとめた。これが氏神崇拜である。中臣氏が遠祖天兒屋根命を河内の枚岡神社にまつり、奈良朝になつて奈良の春日神社に祀つたことなどはその一例である。

神を祭るといふことは神々の意志を繼げ承ぐ事であつたから、政令、刑賞など悉く神慮に基いて行はれた。その爲めに太占フタウミ（鹿の肩骨を焼いて卜ふ）、石占イシウラヒ（石が軽く擧るか否かで吉凶を占ふ）、盟神探

湯ユ（熱湯中に手をつけて物を探りて占ふ）、禊祓スガヒ（水をそぐ意で海や川で身の汚れを滌ぐこと）、祈禳イノリ（災禍を除かれん事を願ふ）、祈禱イノリ（吉凶福禍其他何事によらず神にいのる）、等が行はれた。

二、忠孝 太古に於ては今日の文化人に見るやうな進んだ忠義孝行の倫理的意識はなかつたであらう。それがないところに、自然的素朴主義があるのであるが、忠孝といふ倫理的意識がないといふことは、必ずしも親を思ひ、君を思ふ事實がなかつたといふ理由にはならない。敬神崇祖といふことがそのまま忠孝の事實を表してゐるからである。

當時は「おや」といふ語は母親を意味すると同時に、祖先全體を意味し、何れも祖の字を當てた。そして子といふ場合には、子孫全體を意味した。故におやに事へる事を孝と名づくるならば、孝は生みの親を思ふと同時に、祖先全體を祀ることである。従つて崇祖と孝とは同一となるのである。だから太古に孝といふ事實があつた事が明瞭になる。

又祖神及び祖先を崇めるといふ事は、祖先の意志に従ふ事であるから、つまるところ皇祖天照大神をあがめ奉ることになる。天照大神をあがめる事は、大神の神敎の意を體することに外ならぬ。神敎は寶祚の無窮と國家の繁榮とを期せられたものだから、神敎の意を體するときは、自ら氏の主人即ち上皇ミカドを崇め奉ることになる。つづめて言へば、天照大神を崇め奉る心持は、君を崇め奉る心持そのものでなければならぬ。故に敬神はそのまゝ忠となるのである。敬神といふ事實が太古に忠なる事實

の存した證明である。萬葉集卷十八に大伴家持が次の様にうたつてゐる。

大伴の遠つ神祖カミヤシのその名をば大來自主とおひ持ちて仕へし官海行ツツヤかば美都く屍山行かば草むす屍大皇オホミカミの邊にこそ死なめ顧みはせじと異立てて丈夫オホツツの清きその名を古よ今の現ツツに流さへる祖の子供ぞこれは家持の發明でもなければ、家持が殊に此の精神が厚かつたといふのでもない。大伴氏祖神より言ひ傳へ來つた精神思想である。これを家持が言葉巧に言ひ顯はしたに過ぎぬのである。

さて既に述べた如く當時は職業を代々世襲したのであるが、この職業に勵んで絶やすことなく大君に仕へ奉ることが日本古代人の理想であつた。萬葉集の大伴家持の歌に

人の子は 祖先の名絶たず、

大君に 仕らふものと、

言ひつける 言の官ぞ云々

とあるのはこのことを傳へたものである。この事は祖先に對しては孝となり、大君に對し奉つては忠となる。即ち忠孝は一であつた。これが太古に於ける生活理想の一であり、また教育理想の一である。三、武勇 武勇にすぐれるといふ事が太古の生活理想、従つて教育理想の一であつた。未開時代は食物を獲る主方法として山に狩する點から見ても、氏の勢力を維持してゆく上からも、部落相互の争ひからも、大和朝廷と地方との戦の多かつた時代だから、武勇を重んじたのは當然のことである。

神話傳説の中でも武勇に關する物語は非常に多い。伊弉諾、伊弉冉の二神が天瓊矛アマノムササギを執つて國土を經營された物語の如き、又劔を以て三種の神器の一となせる説話の如き、また天孫降臨に際して天押日命ヒノミコト、天久米命アマノクニミコトが其の部族を帥ひ弓矢を以て供奉せる如き、或は神武天皇の御子神八井耳命カミヤスミミコトが武男なきを羞ぢて、皇位を御弟神淳名川耳命カミヘメミコトに譲られた事、及び日本武尊が武勇並びなかつたため、書紀には皇子の御薨去を崩と言ひ、御墓を陵と言つてある事實の如きは、如何に當時武勇を重んじたかを推察するに足るものと思ふ。

以上略説した如く太古の生活理想、従つて教育理想は主要點が、敬神崇祖、忠孝、武勇にあつたのであるが、斯かる生活理想、教育理想は太古の自然的素朴主義、現實的樂天主義の世界觀、人世觀より必然的に導びき出されるものである。

第三、太古の教育方法 太古の教育方法は後世の學校教育のやうに、有意的・具案的のものでなく、偶發的であり行き當りばつたりといつたやうな低級な方法であつた。前に太古の教育の理想を述べたが、そんな理想を一々自覺して、意識的に教育したのではない。自然的な教育の中に漠然とそれ等の理想が働いてゐたと言ふまでである。斯様な文化の傳達様式は儒教傳來後まで行はれたやうである。私學が大學國學等の組織的教育機關よりも却つて成んであつたのはこの爲である。

太古の教育の行はれてをたつた場所は、家庭と一般社會とである。當時は代々職業を世襲してゐたか

ら子供は家庭に於て、大人の職業を見倣つて職業に關する知識技能を取得したのである。又氏族は其の氏神を祭つてゐたから、子供は自然に祖先崇拜、祭祀の典例、親子兄弟夫婦間の道等の宗教的、道德的生活を無意識的に味ふことが出来た。つまり家庭が知育の場所であり、徳育の場所であつた。

次に社會に於て大なる教育力就中徳育力を有つてをつたのは、語部によつて語り傳へられる神話傳説である。語部は皇室の御世系や歴代天皇の御事蹟や偉人の功業や其他諸種の神話傳説を、代々口から口へと語り傳へて、朝廷の儀式には召されて節をつけて朗讀したものである。この語られた神話傳説は太古の人々の精神的糧であつて、敬神、崇祖、忠孝、武勇等の道德的陶冶に頗る大なる役目を演じたであらう事は、吾人の容易に想像し得ることである。

女子教育については特別の理想を發見し難いが、史上傳へられる女流の偉人が皆男子の如く武勇にすぐれてゐる點から見ると、恐らく男子教育と大差なかつたであらう。

第三章 上古の教育

第一節 時代の概観

上古の教育で研究すべき範圍は、儒教の傳來した應神天皇の御代から、平安に桓武天皇が都を遷さ

れるまでの約五百年に亘る期間である。此の期は大陸文化即ち儒教佛教の移入された爲に、我國の文化が異常な發展を遂げた時代である。自然的素朴主義、現世的樂天主義の我國古來の思想は、一面長所もあるが、深刻味を缺いてゐるから、自己の内部からにじみ出た思想的文化を創造することに缺けてゐた。國學者に言はせると、儒教などは治り難い國を治めようとして故意につくつた道であるが、我國はよく神ながらの道が行はれてゐたから、左様な理窟は必要でなかつた。と、或はそうかも知れないが、藤田東湖が弘道館述義に『質餘りありて文或は足らず、實既に完くして名或は闕ぐるあり。』と言つた如く、實質は體驗に持ちながら、その實質を現すべき思想に乏しかつたと言ふ事は、否定することの出来ない日本固有文化の特質であつた。

斯様に思想的に貧弱なところに、思想的に程度の高い大陸思想が、潮の如く澎湃として押寄せて來たのであるから、自然の勢として諸種の社會的變動を引き起さすにはおかなかつた。物部氏と蘇我氏の争ひの動火線もここにあつたのである。一般的に言へば、最初は非常な眩惑と熱狂的な模倣を示したのであるが、大和民族が民族的に大なる同化力を持つてゐたと同様に、思想的にも大なる同化力を有してゐるが爲に、大陸思想を我日本精神に漸次同化して、遂に華やかな文化が咲き出でたのである。聖徳太子の教化事業、大化の政治的革新、律令の制定、佛教の興隆及びこれに伴ふ美術工藝の發達等は即ちこれである。

第二節 儒教の傳來と教育

第一、儒教傳來の概況 日本書記によると、應神天皇の即位十五年（紀元九四四）百濟王が阿直岐を遣して良馬を奉つた。阿直岐は學問に長じてゐたので、天皇は皇子菟道稚郎子の師とした。天皇は或時阿直岐に向つて『汝の國に汝に勝る博士があるか。』とお尋ねになつた。阿直岐は『王仁といふ者が一國の秀でございます。』と答へた。よつて天皇は上毛野氏の祖荒田別、巫別を百濟に遣して王仁を召された。王仁は早速來朝して論語十卷、千字文一卷を献じた。皇子稚郎子は王仁について典籍を學ばれた。これが文字の傳つた始、儒教傳來の次第であると言はれてゐる。

しかし漢字そのものはそれよりも既に早く傳つたと思はれる。文部省日本教育史略五十五頁に及び七十四頁に次の様に述べてある。

吾國上古ハ文字ナシ外國ニ交通シテ始メテ文字ヲ用フルコトヲ知ル開化崇神兩帝ノ時ニ任那ノ人來ル文字ノ傳
ハル此ノ時ニ始マルトイフ。書籍ハ仲哀帝ノ九年神功皇后舟師ヲ率非テ三韓ヲ征伐ス因リテ其文書ヲ携ヘテ還
リシヨリ始マル履中帝ノ時ニ大藏ノ官ヲ置キ其出入ヲ記セシメ又史官ヲ諸國ニ置キテ言事ヲ錄セシム
吾邦上世文字ナシ其前言行存シテ亡ビザルモノハ世人ノ口々ニ相傳ヘタルヲ以テナリ既ニシテ漸文字アルハ
蓋コレヲ海外ノ邦ヨリ傳ヘ得タル所ニシテ開化帝ノ時ニ大加羅ノ人來リ始メテ文學ヲ傳フトイフ其後崇神帝ノ

時ニモ同國ノ人歸化ス是ヨリ文字ヲ用ヒタリト云ヘリ當時同帝ノ六十五年其國王始メテ使ヲシテ入貢セシム
（中畧）是外國朝貢ノ始ニシテ是ヲ文字ノ傳來セル起因トス然レドモ史書ニ其明徴ヲ見ズ但肥人書五卷アリテ後
ニ存ス其傳フル所一兩字ニ過ギス肥人ハ或ハ曰ク高麗人ナリト其說皆未精確ヲ得ス仲哀帝ニ至リ熊襲ヲ征シ
テ軍中ニ崩ス神功皇后乃三韓ヲ伐チテコレヲ降ス（中畧）皇后新羅ノ都城ニ至リ其府庫ヲ封シ圖籍文書ヲ收メテ
還リ内官家ヲ任那ニ置キ三韓ヲ鎮撫セシム誠シテ日本府トイフ是ヨリ諸國ノ朝貢常ニ絶エス文字書籍ノ用漸盛
ナリ

この日本教育史略は、大槻修二氏那珂通高兩氏の手によつて成つた文部省刊行の信すべき日本教育史の文献ではあるが、考證の點に於て缺ぐる點があるから、どこまでが眞實であるかの判定に苦しむ。しかしとにかく應神天皇以前に漢字が傳つたといふ事は史家の一般的に認めてゐる事である。小島半次郎氏著東洋教育史十六頁にも『漢籍の渡來以前に既に漢字の傳はりしは疑ふべからざる事なるも、其史蹟の今徴すべきものなし。』と見えてゐる。

要するに文字の傳來は應神天皇以前であらう。しかし漢字を學習し、經書を解するまでに漢字の普及したのは、歸化人が盛んに渡來する様になつてから後の事であらうから、大體に於て學問の傳來を應神天皇の御代とする書紀の見方は正しいと思つてよからう。

阿直岐、王仁の渡來後同じく應神天皇の御代に、後漢靈帝の孫阿知使主は其子都加使主と共に十七

縣の民を率ひて渡來し、秦の始皇帝の後たる弓月君は百二十縣の民を率ひて歸化した。王仁の子孫は河内に居つたから西文氏といひ、阿知使主の子孫は大和に居つたから東文氏といひ、この兩氏族を東西史部と言つた。これ等の史部は代々文筆のことを掌つてをたつたものであるが、やはり漢字を世襲して傳へてをたつたから、太古風習がこの時代まで傳つてゐた事を知るのである。而して當時の教育が極めて幼稚であつたのと、職を代々傳へてをると才能の足らぬものも出て來たといふ關係から、學力が次第に表へて來たやうである。敏達天皇の朝高麗の奉つた賀表を東西史部の人々の中で王辰爾が只一人讀めたに過ぎなかつた如きは、此般の事情をよく物語つてゐる。

なほ雄略天皇の御代には織工、鞍工、畫工等が多數渡來して、我文化の發達に貢献するところが多かつた。また繼體天皇の御代には、百濟から五經博士段揚爾を獻じた。五經とは詩經、書經、易經、禮經、春秋のことである。その後欽明天皇の御代には、醫博士、易博士、曆博士等を貢し交代させてゐた。

斯くて學術の傳來と共に我國人の求知心は漸次高潮に達し、三韓を経て紹介されるものみに満足せず、支那と修交始まるや直接多數の留學生を派遣するに至つた。實に我國思想史上特筆大書すべき出來事である。

第二、支那古代の教説

儒教は孔子の大成した教であるが、孔子は自らも言つてをるやうに「述

べて作らず信じて古を好む」なのであるから、孔子の思想を知る爲には、支那古代状態を考察する必要がある。

支那文化は、エジプト文化、バビロン・アッシリヤの文化、印度文化と共に世界文化の原流をなし、約五千年の昔に流れを發する。傳ふるところに依れば、當時漢族は異人種を驅逐して黄河左右の地に卜居して萬邦をなし、一君長を戴いたといふ。これが所謂三皇五帝である。五帝の終りの二人が、帝堯、帝舜である。五帝の最初の黄帝は文字を作り、易の八卦を作つたと傳へられるが明でない。堯舜時代に至つて史實が稍明になつて來る。帝堯は頗る教化に意を用ひた。堯典に「克明俊德。以親九族。九族既睦。平章百姓。百姓昭明。協和萬邦。黎民於變時雍。」とある。以て堯の意を知るべきである。不肖の子丹朱をおいて位を賢臣舜に讓る。

帝舜も亦教育に心を用ひ、司徒の官をおきて教育のことを掌らしめた。世界教育史上教育の爲に官を置くの始である。舜の子商均また不肖、よつて賢臣禹に帝位を讓る。

禹は君主世襲の例を開いたが、桀王に至つて商の湯王に滅された。湯王の子孫も暴虐無道な紂王に至つて周に滅された。

周は英傑周公且によつて禮樂・諸制度等定められ、文物制度燦然として起り、教育も非常な進歩を遂げたのである。當時の學制を見るに國都には、大學・小學がある。卿（一萬二千五百家）には卿學が

あり、黨（五百家）には序があり、閔（二十五家）には閔塾があつた。大學には天子の皇子、諸侯、卿、大夫等の嫡子及庶民の子弟の俊秀なものを入學せしめ、詩・書・禮・樂の奥義を教へる。修業年限は九ヶ年である。地方の學校は六藝の初歩を教へ、孝悌の徳を養ふことをつとめた。この學制と共に教育の内容もよほど充實してゐるやうであるが、教育の主目的は官吏養成にあつた。

周代には學制が整ひ、禮樂が大いに興つたのであるが、遂には繁文縟禮となり、虛禮に流れ、獨立不羈の思想を失ひ、晩年には政綱が弛んで自由思想を抱くやうになり、諸家が勃然として起つた。

老子は當時周末亂世の時弊に鑑み、名利の念を捨て世をのがれて、禮樂其の他一切の人爲を捨て、清靜恬淡、無爲自然なるところに眞の道が存すると説いた。莊子は老子の思想を一步進めて、人間は相對的有限の世界を出でて、絶對無限の世界に逍遙しなければならぬ。そこには生死はない。死は現世の夢が醒めることである。斯かる境地に達するには、悪知を捨て無爲自然によるべきであると主張した。楊子は宿命説を奉じ厭世觀を唱へ、其の結果一本の髮の毛を抜く事が天下の爲にならうともそれはせぬ、といふ程の徹底的個人主義を主張した。これを楊子の爲我説といふ。墨子は他人の父を我父同様愛さなければならぬとして、徹底した博愛主義を唱いた。墨子の兼愛説とはこれである。又申不害、韓非子は道徳を輕んじて法治主義を説いたのである。

斯かる異説紛々として人々其とるべき道を迷ふとき、奮然として立つて、古來の思想を集大成し、

眞の道は先王の道以外になきことを闡明したのは大聖孔子その人である。

第三 孔子の思想と其教育

一、小傳 孔子は周の靈王の二十一年十月二十一日（皇紀一一〇、西紀BC五五一）魯の昌平郷の陬邑に生れた。父を叔梁紇母を顔徵在といひ、三歳のときに父を亡つて其後は母に育てられた。生地が周の後であつたから、禮が残つてゐたから、幼時から禮に倣ひ、嬉戲常に俎豆を陳ね禮容を設けたといふ。家が貧しかつたので、會計や牛羊を掌る小役人になつたが、忠實に其の役目を果した。三十五歳の頃魯の亂を避けて齊に行つたが、景公に用ひられなかつたので魯に歸つた。魯の定公に用ひられて大司寇といふ裁判官の位に進み、定公をたすけて齊侯を夾谷に屈服させ、取つてゐた土地を悉く返させた。後相の事を攝して少正卯を誅しなどして治蹟があつたが、魯公に誠意なき爲遂に官をやめ、諸國を周遊して道を説いた。流遇十三年六十八歳で魯に歸り、禮を修め樂を正し、春秋を筆削して王道を明にした。晩年は韋編三絶切れるまで易を喜んで讀んだ。門人實に三千人、六藝に通ずる者七十二人を數ふるに至つた。周の敬王四十一年七十三歳で没した。墓は魯の城北泗川の上にある。釋迦、基督、ソクラテスと共に世界の四聖とよばれてゐる。

二、根本思想 孔子の教説は論語によつて知る事が出来る。論語を一貫する根本思想は、つまり仁の一字に歸するのである。孔子が曾子に「參乎吾が道は一以て之を貫く。」と言つた一貫の道は仁に外

ならぬ。それで仁の何物かを知れば孔子の中心思想は明になる。然し仁は餘程體驗性、全體性、根本性を有するもので、孔子自身も明快な説明をなし難かつたやうで、弟子にも容易に許さなかつた程のものである。それで仁の本質についての説にも異説が多い。

朱子は『心の徳愛の理』であるといひ、徂徠は『民を安んじ人を長ずるの徳』と解し、仁齋は『遠近内外充實通徹至らざる所なき慈愛の徳』と解し、太田錦城は『善なる行ひを統一した名稱』と解してゐる。しかし何れも一面的な仁の見方である。

第一仁は仁齋の言ふやうに慈愛の徳を含んでゐる。いつくしみは人間の至情であつて、親子の愛に最もよく現れてゐる。親子の愛は何等報ひを求めぬ純な愛である。この純な愛が心の徳となると凡ゆる人類なほ禽獸、草木にも及んで来る。しかしそこには親疎の差が自然にある。仁は墨子の兼愛の如きものでなくて親疎の別ある慈愛である。

第二仁は忠恕である。忠は己の慾する所を人に施すことで、恕は己の慾せざる所を人に施さざることである。つまり思ひ遣りである。論語に『其れ恕か、己の欲せざる所を人に施す勿れ。』といひ、『夫れ仁者は己立たんと慾して人を立て、己達せんと欲して人を達す。』とあるのはこの事である。

第三仁は恩澤となつて現れる。慈愛の徳、忠恕の徳を具へた仁者が、君となれば民に恩澤が加はり、社會に立てば社會が恩澤を受ける。管仲を其の仁に加かんやと孔子がほめたのも、管仲が民に恩澤を

與へた點に稱讃を與へたのである。徂徠が仁を長く安民の徳と解したことも意味のある事である。

第四仁は勇氣となつてあらはれる。一體私利私慾を制する事は非常に難いことである。仁者は私利私慾がないのである。顔淵が仁を尋ねたとき『己に克ちて禮に復るを仁と爲す、一日己に克ちて禮に復れば天下仁に歸す、仁を爲すには己に由る。人に由らん。』やと答へられた。又『仁者は必ず勇あり、勇者必ずしも仁ならず。』と言つてあるのはこの爲である。

第五仁は悦樂を伴ふ。仁者の胸中には一點の私慾もないから公明正大で何等の心配もない。従つて常に悦樂を感じるのである。それで『知者は惑はず、仁者は憂へず。』といひまた『仁者は壽し』イノチナガと言つて居る。

要するに仁は慈愛、忠恕、恩澤、勇氣、悦樂の内容一切を包含する最上至高の徳で、七十年の修養の結果孔子が體得した倫理道德の精粹である。而してこの仁を外面より見れば禮である。孔子に於ては仁と禮は一同物の表裏關係を有する。そして仁に到達するには、博く文を學び之を約するに禮を以てするにある。

三、教育の理想 孔子は特別に教育説を主張してはゐないが、論語に於ける其の教説、大成せる人格、其の子弟教養法等を綜合して見るに、教育の目的は『仁を體得した人物の養成』にあつたやうである。『仁は人なり』と言つてゐるところから考へると、理想的人物は仁を體得した人であると思つて

わたに違ひない。斯かる仁を得得した人は、正しく自己の身を修めるは勿論のこと、家を齊へ、國を治め、天下を平にすることが出来るのである。それで教育の理想を、修身、治國、平天下に置いたと言つても差支ない。孔子が口を開けば道德を論じ、政治を語つたのはこの爲である。又孔子の流れを汲める後の人が、大學を著して教育の理想は、修身、齊家、治國、平天下にある旨を説いたのも、孔子の思想を祖述したものだと思はれる。

四、教育の方法

1 教育の可能及限界 教育の可能については論語陽貨篇に「性相近きなり、習相遠きなり。」と言つてをる。即ち生れたまは誰れもあまり大差はないが、教育修養によつて大なる相違が出来てくるとの意味である。又教育が萬能なものでなくて、或種の限界を有するものであることを、論語の同じところに述べてをる。「唯上知と下愚とは移らず。」と言ふのがそれで、天才は教育せずとも伸び、白痴の如きはいくら教育しても効果がなまいとの意味である。

2 人格教育 論語爲政篇に「吾十有五にして學に志す、三十にして立つ、四十にして惑はず、五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ。七十にして心の慾する所に從へども矩を踰えず。」とあるやうに獨立獨行途に圓滿なる人格を大成した。子貢が温良恭謙讓と批評したのはよく當つてゐる。孔子は斯かる理想的人格を有し、身を以て厭かず倦まず慙慙に子弟を導びいた。子弟を見る事に實に吾が子に於ける如くである。伯牛が癩病で危篤に瀕したと其の手をとり、「斯の人にして斯の病あるや」と歎

かれ、顔回の早世を哭して「天子を喪せり。」と歎じた如き、切々の至情言外に溢れるものがある。孔子の教育は人格を以て人格を導びいた教育であつた。

3 個性教育 孔子は子弟の個性に則し、其の特性に應じて教育したのである。同じく仁を問ふたのに、顔淵には「己に克ちて禮に歸るを仁となす。」と答へ、仲弓には「門を出でては大賓を見るが如くし、民を使ふには大祭を承くるが如くす。己の慾する所は人に施すなかれ。」と教へ、樊遲には「人を愛す。」と簡単に示し、子張には「恭寛信敏惠の五者を行ふものを仁となす。」と答られた。各個人の性質に應じて説くから仁が生きて來るのである。

又或時子路が聞くがままに行つてよいかと尋ねたとき、孔子は「父母があるから聞いてから行へ。」と教へ、同じことを冉有が尋ねたとき「聞くがままに行へ」と教へられた。子路は勇敢すぎ、冉有は引込思案の人であつたからである。斯く各人の個性を重じたから門下生は皆一かどの人物となつた。德行に於ける顔淵、閔子騫、冉伯牛、言語に於ける宰我、子貢、政事に於ける冉有、季路、文學に於ける子游、子夏と論語にあるのでも推察せられるであらう。

4 啓發教育 孔子の教育のしかたは注入的でなくて全く啓發的であつた。啓發といふ言葉は孔子が初めて使はれたものである。子弟が奮發して自ら學ばうといふ考へがないと、教へても甲斐がない、物の一隅を示した際に他の三隅を思ひ出すといふ様になれば教へてもつまらないと、言はれた。論語

述而篇にこの意を次の様に述べてをる。「憤せざれば啓せず、悱せざれば發せず、一隅を擧げて而して之に示し、三隅を以て反せざれば、則ち復せざるなり。」即ち孔子の教育法は開發主義であり、自發活動、自己活動を重んずる教育法であつたのである。

五、要約 孔子は實に支那第一の思想家、教育家であるのみならず、世界思想史、教育史を飾るべき屈指の大家である。今日から見れば、道德的陶冶に偏し、實學的・藝術的陶冶に缺くる點がないではないけれども、其の大成せる人格と、其の卓越した教育方法と相俟つて實に偉大な教育的功績を擧げたのである。又其の教説は儒教として後世に傳り、佛教と共に東洋文化の精髓をなすのである。儒教の發達に關しては後に述べようと思ふから、ここでは略しておく事にする。

第四、儒教の影響

一、國民道德思想への影響 儒教に於ける「徳あるものは王たり。」といふ所謂禪讓放伐の思想は、我國體と合致しないものであるが、一般的に考察して儒教は頗る道德的・實踐的であるところから、思想的に幼稚であつた我國國民道德に理論的根底を與へ、之を體系化したのである。例へば我國國民道德の精髓を象徴する三種の神器たる鏡・玉・劔に、知・仁・勇の三徳を配し、或は太古の靈魂觀にあらはれた奇魂・幸魂・荒魂に、夫々知仁勇を配して説明した如きはその一例である。聖徳太子は後に述べるやうに佛教中心の方ではあるが、其制定された十七條の憲法即ち國民道德の規範とも言ふべきものの中には、

日本化された儒教の思想が多分に含まれてをるのである。其の第三條には「詔を承けては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載せ、四時順行し、萬氣通するを得云々。」とある。

二、道德的感化影響 儒教は其大成者孔子が大道徳家であつたことでも知られる如く、徹底した道德教であつた。それで幾多の道德的感化を齎したのであるが、當時に於ける注目すべき出来事は、稚郎子と大鸕鷀尊との皇位の推讓、及び仁徳天皇の御仁政に現れた儒教的精神である。

應神天皇は皇子稚郎子を太子とし皇位を繼承せしめんとすの御考へであつたが、天皇の崩後、稚郎子は菟道に退いて、太子の位を兄君大鸕鷀尊に讓り給はんとした。けれども大鸕鷀尊は父君應神天皇の御意志に従つて、稚郎子に皇位を繼がせなければならぬとお考へから、どうしても太子の位に登られなかつた。互に相讓ること三年、稚郎子は兄君大鸕鷀尊の意志の動かすべからざる事を知り、遂に自殺されたのである。大鸕鷀尊は大に驚き、馳せて菟道に至り、慟哭爲す所を知らなかつた。そして喪を發し菟道山に葬り、始めて帝位につかれた。之が仁徳天皇である。天皇は民を非常に愛されて、御仁政を施かれた事は何人も知つてをる事實である。この皇位の推讓問題の裏面には、外戚の勢力争があつたやうであるけれども、儒教の君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の道を説く五倫の思想が影響したのもと思はれる。

三、一般思想への影響 儒教は一種の世界觀及び人生觀をもつてゐる。天命説の根據をなしてゐる天

の思想や、中庸の誠の思想は原始儒教の世界観であり、仁義禮知信の五常、君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の五倫、大學の三綱領たる明明徳・親民・止至善の思想などは原始儒教に於ける人生観である。宋明の時代になると太極とか理とか性とか言ふことがやかましくなつて、世界観・人生観がよほど哲學的になつて来る。是等の思想はずつと後世になつてからではあるが、我國一般思想界に大なる影響を與へたのである。この點は徳川時代の教育を考察する場合に明になるであらう。

四、文字と文化の傳達 教育とは文化を傳達擴充する事であるとは乙竹教授の常に言ふところ、この文化の傳達は文字のない時代には容易でなかつたのである。然るに儒教の傳來によつて文字が傳つて來たといふ事は、我國の教育に於ける文化の傳達上、一大革命的な出來事であつた。狹義の教育は儒教の傳來によつて始めて起つたのである。應神天皇の御代皇子稚郎子が、阿直岐及王仁について漢籍を學べたのが我國に於ける狹義の教育のはじめである。後に至つても儒教は我國教育の極めて重要な内容をなしてをるのである。即ち諸種の教育制度は明治維新に至るまでは殆ど支那教育制度の模倣であり、教科書は四書五經といふやうな儒教の典籍が主であつたのである。

〔注意〕

孔子の教育思想及び儒教の影響は注意しておらねばならぬ。

〔問題〕 修身

- 一、孔子の所謂仁とは何ぞや(明二五年)
- 二、論語一貫の義如何(明二七年)
- 三、論語一貫の義を詳説せよ、(明二八年)
- 四、孔子の所謂仁を倫理學上より論ぜよ(明三五本試)
- 五、論語に所謂一貫の道の意義を説明せよ、(明三六本試)
- 六、孔子の所謂仁とは何ぞや(大七豫備)
- 七、孔子の道と老子の道との異同如何(大二四豫)
- 八、國民道徳に於ける儒佛二教の影響を論ぜよ(大三本)
- 九、儒教の我日本に於ける道徳的効果如何(大七豫)
- 一〇、儒教の我國文化に及ぼせる影響を論ぜよ(大十一本)

第三節 佛教の傳來と教育

第一、佛教傳來の概況 佛教は印度の釋迦によつて起された宗教であつて、阿育王及び迦膩色迦等の保護によつて四方に弘通せられ、後漢の頃には支那に傳はり、東晋の頃朝鮮半島に傳はつた。當時半島との交通の開けてゐた關係上、程なく日本にも傳はつたらしい。繼體天皇の十六年に南梁から

歸化した司馬達等は、大和の國高市郡坂田の原に佛像をまつつて、佛法を説いたとも傳へられてゐるから、欽明天皇以前に傳つて來た事は事實であらう。しかし公然と傳へられたのは欽明天皇の十三年皇紀一二二二年のことである。

この時百濟の聖明王は、金銅釋迦佛像・幡蓋・經典を獻じ表を上つて『是の法は諸法中最も殊勝なもので解き難く入り難い。周公や孔子も尙知ることが出来なかつた。この法はよく無量無邊の福徳果報を生ずる。たとへば人隨意に實を懐にするが如きである云々。』の功徳を述べたのである。天皇はまだ見聞したこともない微妙な法と、端嚴な佛像を大いに歡ばせられたが、朝廷では今まで天神地祇を祈つてゐたので、群臣に禮拜するの可否を諮問された。このとき大臣蘇我稻目は『西蕃の諸國は一に皆之を禮す。豊秋日本豈獨り背んや。』と奏上した。蘇我氏は家柄も新らしく、貢物を取扱ひ、歸化人を支配し、外國の文物を理解することが出来たから進歩的であつたのである。ところが物部氏は武將で舊貴族として保守的であつたから蘇我氏に反對して、物部尾輿は『我國家の天下に王たる者は恒に天地社稷百八十の神を以て春夏秋冬祭拜し事をなす。方に今改めて蕃神を拜せば國神の怒を致さん事を恐る。』と奏上した。つまり蘇我氏は世界大勢への順應を主張し、物部氏は國粹保存を主張したのである。

天皇は兩派の議を折衷して、佛を朝廷にまつらす、蘇我氏に授けて試に禮拜せしめた。然るに偶々

疫病が流行したので、これは異國の佛をまつた國神のたたりであるとなし、天皇の崩後排佛派は佛像を堀に投じ、或は寺を焼くなどの横暴を極めた。然るに敏達帝崩後皇位繼承問題に伴ふ蘇我、物部の勢力争ひは遂に物部氏の勢力失墜となり、排佛派・保守派・武斷派が亡んで、崇佛派・革進派・文治派が勝利を占めたのである。これは時勢が舊套の墨守を許さなかつた風潮のあらはれである。斯くて佛教は弘く流布したのである。殊に聖徳太子によつて佛教は日本化されて、道德の規範となり、或は教化施設となつて現れたのである。我國が眞に文化といひ得るものを有するに至つたのは、實に太子の努力によるのであつて、其の中心が佛教であつたことは言ふまでもないことである。

第二、印度古代の思想 今から凡そ四千年の昔、アーリヤ人種の一族が中央アジア方面から南下して印度のパンジヤブ地方に侵入し、先住民族のドラビダ種族を南に逐ふて北印度を占領した。その後土人との雜婚が行はれた結果、四種の階級を生じた。第一は婆羅門といふ僧侶の階級である。第二は刹帝利といふ政治・軍事を司る階級である。第三は毘舍といふ實業に従事する階級である。第四は首陀羅といふ征服された土人の階級で、屠殺等の賤業に従事する。この四種族は嚴格な階級制度のもとに職業を世襲した。婆羅門は神の代表者と稱して最高の社會的位置を占め、他の三種族に厭制を加へた。理由なき厭制は必ず人生に對する疑問・懷疑を招來する。人生に對する深酷なる思索は哲學を生み、現世よりも寧ろ未來に生きんとする宗教を生むに至るは必然的な現象である。

なほ印度に哲學宗教が發達したることについては、印度の自然を考察せねばならぬ。印度は熱帯で雨多く、ガンジス、インダス、ブラマプトラの三大河が氾濫して肥沃な土地を作り、印度に年三度の收穫を與へた。又印度は寶石の國であり、黄金の國であり、象牙の國であり、香料の國である。斯かる恵まれた國民は比較的生活苦に追はれることがなかつたので、自然ものを考へる餘裕をもつた。宇宙の本原は何であるか、人生の真相は如何と突きつめて考へるといふ傾向が生じたのである。

斯くの如き階級制度の社會状態と、自然に恵まれた地理的環境の影響によつて、古代印度には偉大な宗教・哲學が發生したのである。印度教、ウパニシャットの哲學、印度六派の哲學、佛教等はそれである。

印度教は世界の本體をブラハマン Brahman とする一元的世界觀の宗教である。ブラハマンは絶対的存在であり又精神である。吾々の感覺器關の作用を統一する意識である。又ブラハマンは歡喜である。若しブラハマンを體認するならば、生死、老病、飢餓、迷妄、憂苦等一切を超越するのみならず、人間社會の差別・善惡を脱して、至上の安樂境に住する事が出来る。斯かる境地に達する爲には、山林に入り空寂の境に住んで身に淨行を行ひ、心に信仰を養はねばならぬ。つまり默想禪定に依つて絶対たるブラハマンに接しやうとするのである。従つて印度教には苦行といふことが必ず伴つてくるのである。

ウパニシャット Upanisad は印度古代に於て秘密對座の間に傳へられた宗教教義である。従つて秘密教といふ別名もある。ウパニシャット哲學の中心概念はブラハマ Brahma 即ち梵天と、アートルマン Atman 即ち我との二つである。ブラハマとは宇宙を創造し、之を主宰し、之を破壊する神である。アートルマンとは私の肉體や感官を除き去つても、尙跡に存在すと考へられる實性即ち靈魂を意味するものである。ブラハマは大我であり普遍我であり、アートルマンは小我であり個人我である。ウパニシャット哲學ではこのブラハマ即アートルマン、言ひ換へると梵即我を宇宙の本體とし、一切萬有は悉く我||梵の發顯であると見る。我即世界であり、世界即我である。世界に於ける一物と雖も我以外のものはない。一々の事物は皆我であると見る具體的一元論がウパニシャットの哲學である。

斯くの如く一切の實有を悉く我と見るのは、認識論的に觀察すれば、私の認識によつて一切の萬有が存在することを説くものであるから、認識論的唯心論に外ならない。又我||梵が唯一の實在であるから、一切の出來事は現象に外ならぬとするから、所謂現象論 Phenomenalism である。二千年以前に斯くの如き勝れた哲學を有した印度思想は實に驚歎に値する。

次に印度六派の哲學はウパニシャットの唯心理哲學を發展させた教學であつて、數論、瑜伽論、勝論、正理論、ミーマンサー、ヴェダンターの六派あつたから六派哲學といふ。

數論はウパニシャットの一元論を二元論に改めたものである。即ウパニシャット哲學では、我||梵

は明と無明をその中に含んでゐたのであるが、こんな矛盾せるものを一に歸するは思惟に困難を感じる。勝論は神我と自性との二元理で宇宙を説明するのである。瑜伽論は數論の理論に基いて解脱に至る所以の實踐的方面を説くのである。勝論は宇宙を靜止的に觀察して其の本體を知らうとするのである。その分析の結果、地・水・火・風の物質的分子の存在を主張するに至り、唯心論は全く唯物論に一變したこれは希臘の自然哲學に相當する。正理論は推論の原理・形式を説き、謬論の生ずる所以を明にし、印度論理學の祖をなすのである。斯く諸種の異説が出てウパニシャッド哲學の唯心論を無視せんとするものも生じたので、再びウパニシャッド哲學に復歸しようとするものを生じた。これがミーマンサーである。ヴェダンターは同じく復古學派ではあるが吠陀教に歸らんとするものである。

斯く幾多の卓越した思想が出てをるけれども、其教理が深遠であつて、後世に及ぼした影響の偉大なる點に於ては、釋迦の大成した佛教に如くものはないのである。實に佛教は印度思想の精髓であり東洋文化の華である。

第三 釋迦の思想と其教化

一、小傳 ヒマラヤ山麓のネパールの南境のタライ高地は、殺帝利階級の釋迦種族の領土である。その支配者迦毘羅城主淨飯王と王妃摩耶夫人との間に一子が生れた。姓を喬答摩、を名悉達多と呼ん

だ。これが後年世界人類の救世主と仰がる釋迦その人である。摩耶夫人は誕生七日にして死なれたので、妹摩訶波闍波提が慈ぶかい釋迦の養母となつた。七歳のときから師匠について、學問を學んだが、勝れた智慧と力は常に師を驚したといふ。十九歳のとき才色兼備の耶輸阿羅姫と結婚した。釋迦は少時から憂鬱に沈んで、厭世的傾向があつたから、父王は寒暑雨の三時殿を營んだり、宮媛を侍らせたり、娛樂を與へたりして、慰めたけれども少しも樂しまなかつた。釋迦は耕作の祭に臨んで、農夫の犁に傷いた虫を鳥が啄み食ふのを見て深い思ひに沈まれた。或時は東門を出て體の衰へた老人を見た。南門を出て末期の息をあえいでゐる病人を見た。北門を出て屍を乗せて行く葬列を見た。老病死の人生の最後を見せつけられて、人生の無常をつくづくと感じた。又或時は宮女達の見苦しい假睡に身慄いたこともあつた。

二十九歳のとき妻や愛子羅候羅や一切の地位名譽を捨てて、愛馬に鞭うつて人知れず王宮を抜け出した。時は阿沙佉月の満月の夜陽曆七月一日であつた。釋迦は先吠舍離國の跋伽婆仙人を訪れ、次から次へと學者を訪ねたが満足する事が出来なかつた。王舎城の頻婆娑羅王は、國を讓つて出家を思ひ止らしめやうとしたが、釋迦耳を貸さうとしなかつた。斯くて優留毘羅の林の中に入つて、父王からの心盡しの友五人と苦行を續くる事六ヶ年、而かも得るところがなかつたので、苦行を思ひ止まり、精神上より悟りを開かん事を思ひ立つた。ニールンジャナの河水は積年の汚と疲れを洗ひ、須闍陀と

いふ娘の捧けた乳糜に力を得て菩提樹下に端座し、悟を開かずば此の座を立たずと決心して、悪魔(心の慾望)と戦ひながら思ひを凝らした。斯くて遂に宇宙人生の真相を悟り得て佛陀となつたのである。時に釋迦三十五歳、四月二十四日の曉、夜明の明星のきらめく頃であつた。

しかし釋迦は獨り自ら悟れるに満足せず、普く世人に同様の歡喜を傳へんとの大慈悲心を起し、先づ摩揭田國で優留毘羅迦葉、那提迦葉、伽耶迦葉の三人を教化したのを手始めに、爾來四十五年間印度各地を巡錫して布教に全力を盡した。其の間には戰遮といふ美人が釋迦の子を妊んだといふ外道の謀計や、提婆達多の如く釋迦を殺せんとつきまとふ者等の迫害が絶えなかつた。しかし佛陀としての偉大な人格は、如何なる者をも其の教化に浴せしめずにはおこなかつたのである。西曆紀元前四八四年、皇紀一七五五年八十歳で拘尸那揭羅の沙羅雙樹の下で入滅した。「我れ入滅すると雖も、正法永く絶ゆべしと思ふ勿れ。我諸比叵の爲に戒を定め法を説けり。此等の戒・法は是れ汝等の大師にして、戒・法あるは我の在世に異ならず。」とは釋迦の最後の訓誡であつた。佛教の行はるところに釋迦は永遠に生きてゐる。

二、教説 佛教は現在數ふるに煩しき程の多數の宗派をもつてゐる。しかも何れもが釋迦の教へを傳へてゐるのであるから、如何に釋迦の思想が偉大であつたかを察するに難くない。故に其の教説を簡単に叙述しようとする事は、大海の水を小桶で汲み乾さうとするにも等しいことかも知れない。し

かし小桶に汲まれた一はいの水も、其本質に於て大海の水を表現するかも知れないと考へ、肯えてこの冒險を企てる。釋迦一代の教説は、四諦、八正道、十二因縁、無我の説に約することが出来る。

1、四諦 四諦とは四つの真相・眞理のことである。第一、此の現實世界を観察して見るに、凡て苦みならざるはない。生も老も病も死も苦しみである。怨あるものと會はねばならぬのも、愛するものと別れねばならぬのも、求めて得ざるも苦しみである。斯く現實世界に人として存在すること凡てが苦であると観するを苦諦といふ。第二、此の苦の因つて來るところの原因を探ぐつて見るに、それは渴愛即ち煩惱から皆出て來るのである。斯く苦の因つて來るところを窮むるを集諦といふ。第三に苦の因つて來る渴愛・煩惱を取り去つてしまふと、涅槃に入ることが出来る。この苦の原因を取り去ることを滅諦といふ。第四は滅諦に至る爲に八正道を行ふことで、これを道諦と名づける。

苦諦と集諦は現世の實相であつて、滅諦と道諦は修業の理想である。斯く四項に別つのは印度の醫術から來たもので、苦諦は病症の診斷、集諦は病因の確定、滅諦は病の消滅、道諦は治療方法に相當するのである。總じてこの四諦の見方は、佛教の世界觀、觀察法を代表するものであると姉崎博士は言ふてゐる。

2、八正道 道諦を開けば、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八になる。これを八正道或は八聖道といふ。正見とは四諦の道理に明かな智見を有すること。正思とは慾を遠ざかり、

瞋なく怨害なき正しき思ひのことであり、正語とは妄の言葉、中を裂く言葉、無用の言葉を離れて、正しいまことの言葉を用ゆることである。正業とは殺生をやめ、盜を止め、姪な行を離れた正しい所作をなすことであり、正命とは出家としてあるまじき生活の仕方をやめて、正しい生活をなすこと、正精進とは未だ生じない悪を生ぜしめないよう、既に生じた悪を捨てるやう、未だ生じない善を生ぜしめるよう、既に生じた善を大きく圓かにせしめるやう、勉め勵み心を堅めることである。正念とは熱心に思正しく心直く、この身體と感覺と心と法とを觀察して、食欲とそれから起る惱とを滅すことである。正定とは欲を離れ、悪を離れて三昧の境に住することである。

又道諦は戒・定・慧の三學に別つことがある。戒とは諸種の戒律を守ることである。釋迦は嘗つて、殺生、偷盜、姪行、妄語、飲酒、間食、歌舞音曲見世物、化粧、飾つた床に臥すこと、金銀を受くることの沙彌の十戒を授けられたことがある。又後には十重戒、四十八輕戒を定められて是等の戒を守ることに、八正道について言へば、正語、正命、正業を行ふことである。定とは心を一切に注ぐこと、つまり八正道の正念、正定を行ふことで、慧とは知見を開き一切の無常を悟ること、つまり八正道の正見、正思、正精進をおさめることである。

要するに八正道を修め、或は三學を修めて、勇往邁進倦まず弛まず勉めたならば、終に煩惱から生ずる業を斷絶して、何人も佛性を發揮し涅槃に入る事が出来ると説くのである。

3、十二因縁 十二因縁は四諦のうちの集諦と滅諦を詳説したものである。集諦を開けば無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二となる。釋迦は悟をひらいて七日の間座を動かす悟の樂を味つたのであるが、その七日の終りの日の初夜にこの十二因縁を順逆に思惟された。

人生に於て老病死其他の愁、悲、苦、憂、惱は何故に出る事が出来ないものであらうか、それは生れたからである。なぜ生といふ事があるのであらうか、それは三界に實有するからである。なぜ有といふ事があるのであらうか、それは愛するものを取り、惡むものを取去るといふことがあるからである。なぜ取といふことがあるのであらうか、それは愛着があるからである。なぜ愛があるのであらうか、それは外界を感受するからである。なぜ受といふことがあるのであらうか、それは身體や精神に觸れるからである。なぜ觸といふ事があるのであらうか、それは目耳鼻口皮膚及び意志といふ六處があるからである。なぜ六處が働くのであらうか、それは精神と物質言ひ換えると名色があるからである。なぜ名色があるのであらうか、それは自覺意識簡單に言へば識があるからである。なぜ識があるのであらうか、それは精神の中で心をはたらかせる或る力即ち行があるからである。なぜ行がはたらくのであらうか、それは眞の智慧がないからである。これを無明といふ。つまり無明が一切人間苦の根源であるわけである。斯く老死より順次十二の因果關係を尋ねて無明に至るを十二因縁の順觀といふ。

無明は人間苦の根元であるから、眞智を得て煩惱の根無明をかれれば行がなくなる。行が無くなれば識が滅する。識が滅すれば名色がなくなる。名色が滅すれば六處がなくなる。六處がなくなれば觸がなくなる。觸がなくなれば受がなくなる。受がなくなれば愛がなくなる。愛がなくなれば取が滅する。取が滅すれば有がなくなる。有がなくなれば生がなくなる。生がなくなれば老病死其他一切の人間苦はなくなる。これが十二因縁の逆観である。

4、無我の説 釋迦は無我の説或は空の説をといてをる。無我とは我に執着しないことである。空とは無しといふことではない、物の有りのまゝの姿を言葉であらわし得ないことをいふのである。釋迦によれば眞の智慧は般若波羅密である。この眞智は物の眞相即ちありのままの姿を確めて執着することがない、寧ろ執着するやうな心から遠ざかつて行く。従つてこの般若波羅密といふ智慧の眼で物を觀察すれば、すべてのものは常住でもなく無常でもなく、樂とも定まらず苦とも定まらず、我でもなく無我でもなく空とも定まらず不空とも定まらず、これといつて固つたところがないものであると知られる即ちあらゆるものが絶對である。これが正しい物の見方である。一切の我の執着を捨てて空・無相・無作・無我となつたところに眞實がある。人若しまことにこの境地に住して善事をおさめ、般若波羅密を行するならば、解脱の域に達することが出来るといふのである。(新譯佛敎聖典五〇一—五二四頁)

三、教育法 1 人格教育 釋迦は沈思的で、豊富な想像力を具へた、牢固たる意志の人であつた。斯かる資質を以て宇宙人生の最も深奥な問題に直面し、之を解決せんが爲に、内外幾多の誘惑や苦悶と戦ひ、遂に宇宙人生の眞相を悟り得て、山の如く海の如き雄大深遠な人格を形成したのである。釋迦一代の敎説はこの人格に體驗された普遍の眞理の溢れ出たものである。それで如何なる反對者、如何なる惡逆無道の者でも、其の人格に觸れ敎説に遭ふときは、自己の前非を悔ひ佛門に歸せざるを得なかつたのである。

凶賊指鬘外道の如きも、慈悲忍辱の敎へを聞いて佛門に入り、父を殺した阿闍世王の如きも、罪を懺悔して佛に歸依したのである。釋迦の高弟三迦葉や舍利弗や目犍連の如きも異敎徒であつたが、釋迦の人格に接し敎説をきき直ちに弟子となつたのであつた。要するに釋迦の教育法は人格を以て導びいたと言ふことが出来る。釋迦が竹林精舎からベナレスの鹿野苑に向ふ途中次の様に物語られてをる。

「比丘等よ。この事を私が知りもせず、悟りもせず經驗もしないで説いたならば、それは適當なことではあるまい。しかし私は自ら知り自ら悟り、自ら經驗したことであるから、こゝにいふ樂の感覺は捨てよ、又は受けよ、こゝにいふ苦、不苦不樂の感覺は捨てよ、又は受けよと命ずるのである。」と如何に其の敎説が人格的體驗から出たものであるかを知る事が出来るであらう。

2 個性教育 釋迦は十重戒、四十八輕戒の教團の規則を作つて弟子たちに守らせたのであるが、決して劃一的に適用しようといふのではないのであつて、之については次の様に述べてゐる。「比丘等よ私は總ての比丘に對つて、放逸ならぬように行へとは言はぬ。何せならば、既に成すべきことを成し終り、重荷を下し、目的を果して解脱した阿羅漢は、なすべきことを成し終つたので、放逸に陥る事はないからである。然るに無上の安穩を望みつゝ、進み行く比丘は、法に適うた座臥を用ひて、善知識に近づき、官能を制へ、心を修むれば、この現在に、出家の目的を果すことが出来るであらうから、私はこれ等の比丘に對つて放逸ならぬように行えよとゆうのである。」

又こゝにいふ事が傳へられてゐる。釋迦の弟子で離婆多といふ智者の弟に周利槃特といふ愚者があつた。釋迦は數多の弟子達に。(一)三業に惡を作らず。(二)有情をいためず。(三)正念に空を觀すれば無益の苦みはまぬかるべし。といふ三箇條の宿題を與へて、分に應じて研究せしめた。研究發表をなすべき次の集會が來たが、周利槃特はこれを暗記することさへ出來なかつた。兄の離婆多は大いに恥ぢて弟を叱責した。周利槃特はつくづく自分の愚を悟つた。釋迦は非常に氣の毒に思つて、「塵を残さず垢を残さず」といふ事を教へて、佛寺の掃除を命じた。彼は明けても暮れても教へられた事を口ずさんで掃除した。そのうちに塵や垢といふのは心の煩惱の事だと氣がついた。そして心を清淨にすることを務めて遂に悟りを開いたといふ。釋迦が個人個人の資質に應じて如何に教へを徹底させたかをよく物語つてゐる。

8、自發教育 釋迦は華嚴經で善財童子の求道の物語りを述べてゐる。善財童子は實在の人ではなくて釋迦の想像した人物である。つまり善財童子の求道は釋迦自身の求道の姿なのである。善財童子は可樂國の功德雲比丘を始とし、比丘や長者や仙人や婆羅門や菩薩などの先覺者に、菩薩の行を尋ね、道を求めて苦しい旅を續けて行くのである。始終謙虛な態度で、凡ゆる専門家からその道の奥義を聞いて、遂に普賢菩薩と同じ智慧を得て、やがて佛と等しい正覺と自在とを得るであらうといふ物語である。釋迦は此の物語によつて、己を空しくして道を求める事の大切なことを説き、求道心があれば人生經驗の凡て、山川草木悉く心の師となり得る理を明にしたのである。従つて其の教育方法に於ても自分から教を受けようとする自發的態度を重んじた。其の教團には波羅提木叉といふ教團の法律が定められてあつた。そして其法律を適用するに當つても、出来るだけ自發的に反省させ懺悔させた。其の方法として毎月十五日と三十日の兩日に波羅提木叉を讀んで、去つた半月の罪を清め來る、半月の生活を慎しむ材料にした。當日が來ると、座長格の比丘が教團の法律を讀む。そして最後に「此等の罪について私は大衆に尋ねる。大衆はこの點について清淨であるか、再び問う、大衆は此點について清淨であるか。三度問う、大衆は此點について清淨であるか。」と叫ぶのである。そうするとその法律を犯した比丘があると、自發的に進み出て罪を告白して懺悔する。法律を犯した者がないうきには一

同は黙してをる。すると座長が「大衆は總て實にこの點について清淨である。それであるから大衆は私の問ひに對して黙つてゐる。私はこの様に了解する。」といつて會を閉ぢる。以て釋迦が如何に自發的教育、自己活動の教育を重んじたかが知られるであらう。(新譯佛教聖典參照)

第四 佛教の影響 釋迦の教は其入滅後約二百年間は婆羅門教を壓してゐたが、阿瑜迦王の歿後南北二教に分れた。南方佛教を小乗教といひ、北方佛教を大乘教といふ。欽明帝のとき我國に傳つたのは大乘教であつたけれども、主に小乘的な因果應報、福壽無量を説くに過ぎなかつた。けれども容易に國民思想に同化しなかつた。それは、(一)從來神を信じてゐた國民的感情が之を受け入れ難かつたこと、(二)日本古來の思想は自然的・現實的であるのに、佛教は超自然的・來世的であつたこと、(三)我國思想は活動的・進取的であつたのに、佛教は靜寂的・非進取的であつた等の原因によるのである。しかしながら聖德太子の如き、偉大な佛教の大家が出るに及んで、漸次國民思想と同化し實に大なる影響を與へたのである。

一、國民思想と佛教 我國古來の國民思想は自然的・現實的・樂天的であつた。従つて單純素朴で愛すべき點は持つてゐるが、幼稚であり淺薄であるといふ點は否定することが出来なかつた。然るに佛教の深遠なる教理は國民思想に思索的要素を加へ、之に深い理論的根底を與へた。これは聖德太子の十七條の憲法によく現れてゐる。また本地垂跡神道、山王神道、兩部神道等の佛教思想に基く神道の現

れたのも之を物語つてをる。

二、國民生活と佛教 佛教が國民生活に與へた影響には實に大なるものがある。動もすれば現實享樂に墮せんとする傾向ある國民に、來世あるを知らしめ、慾を防ぎ、争鬭を禁じ、怨恨畏怖の念を除き、慈悲忍辱の精神を與へたのである。戰に臨んで死を恐れず、弱きものに對しては武士の情を發揮した武士生活には、禪宗の宗教的感化のあつた事を忘れてはならない。

三、國民教化と佛教 佛教の弘通に伴つて宗教界の天才が輩出し、國民化する佛教を建設した。最澄の天臺宗、空海の眞言宗、日蓮の日蓮宗、法然の淨土宗、親鸞の淨土眞宗等はその主なるものである。是等の日本化する宗教は、國民教化上非常なる貢獻をしたのである。殊に國家的方面を高調する日蓮宗と、平民教化の淨土眞宗の國民教化の活動には目醒しきものがある。

また光明皇后が施藥院、悲田院を設けて貧者病者を救助された如き、僧行基が全國を巡歴し道を開き橋を架し、池を掘り温泉を開くなどした如き、佛教信仰家によつてなされた慈善事業、社會事業が國民教化に盡したことも忘れてはならない。なほ後世戰亂争奪の世にあつて文教の命脈を維持し、典籍の保存に力をつくしたのも佛教家の力であつた。

四、學校教育と佛教 佛教と學校教育とは頗る密接の關係がある。聖德太子は法隆寺學問所を設け、僧侶を講内に寄宿せしめ、學資を與へて勉學せしめた。これは我國に於ける學校教育の起原をなすも

のである。後空海によつて綜善種智院が京都に設けられたが、これは我國に於ける、平民教育、普通教育の始めである。又鎌倉時代僧侶によつて、寺小屋教育が始められた。五、藝術の發達と佛教 佛教の發展は美術工藝の發達を促した。堂塔寺院の建築、佛具等の細工、佛像等の彫刻、壁畫等は宗教美術として世界有数の發達をとげたのである。

〔注意〕

佛教思想の概要と其影響は大切であるから注意を要する。

〔問題〕

一、耶穌教の歐洲中古に及ぼしたる影響を論じ、之を本邦教育上に於ける佛教の影響と比較せよ。(明三五環)

(62)

第四節 聖德太子の教化事業

第一、時代の弊風 崇峻天皇に次で推古天皇が即位された。天皇は我國最初の女帝であらせられたから、用明天皇の皇子厩戸皇子が攝政となられて、天皇の事を行はせられた。これが聖德太子である。太子は當時の弊風を改革して、新日本を建設し、國民思想の樹立を圖り、國家意識の覺醒につとめ、自主觀念の發達を促さんとし、着々革新を斷行されたのである。然らば當時の弊風とは如何なる事を意味するのであらうか。曰く氏族の兼併、氏族の黨争、文化の停滞がそれである。

先づ氏族の兼併から明にしよう。古代の我國は氏族制度であつた。この氏族制度は皇室を中心として、多くの氏族がそれぞれ職業を世襲し、各自それに屬する土地人民を私有するのである。ところが太子の時代に至つては、大なる氏族は小なる氏族を兼併し、多くの土地人民を私有し豪族の勢は益々増長し、ついに皇室を凌がんとするに至つて、氏族制度の根本精神たる皇室中心主義が正に破壊されようとするの傾向を示した。此處に於てこの弊風を打破して、土地人民を皇室に直屬せしめ、皇室中心主義を確立するために、社會組織を改造するの必要に迫られたのである。

第二の弊風は氏族相互の黨争である。當時外交上任那問題を中心として、大伴物部の二大氏族が争つた。その爲に外交は失敗に歸し、任那は新羅に亡された。代々の天皇は任那回復を企てられたが成功しなかつた。ところへ武内宿禰の後裔蘇我氏は、欽明天皇が皇后を納れられてより外戚の權を以て物部氏の上に居るやうになつた。偶々佛教の傳來を機として蘇我物部兩氏の黨争の幕は切つて落された。兩氏の軋轢が漸く甚しくなつて來たところへ、皇位繼承の問題が起つたのである。そしてこの黨争の渦中に皇室もまき込まれ、甚だしき果を受けた事は恐れ多い極みである。即ち馬子が崇峻天皇を弑し奉つた如きもそれである。この馬子の惡逆に對して、聖德太子が何等なすところがなかつたことに對して、學者が色々説をなしてゐるが、太子も當時の事情として止むを得なかつたといふことをのみを述べ、詳しい論證は國史の研究に譲つておく。

(63)

第三の弊風は文化の停滞である。これは氏族の職業が世襲であるために、材能の適不適を問はず父祖傳來の職業を繼ぐから、勢ひ文化は形式に流れたのである。殊に大臣又は大連の如き國政にあづかるものが、其の位を世襲するに至つては甚だしく國家の文化を停滞せしめたのである。丁度平安時代の家學が次第に墮落して行つた様なものである。

第二、聖德太子の教化事業 以上の如き時代の弊風を革新し、新日本を建設し、日本思想を獨立せしめることが聖德太子の使命であり、理想であつた。憲法の制定も、冠位の設定も、佛教の奨励も、國史の編修も皆此の精神の發露ならざるはない。

一、冠位の制定 冠位は德・仁・禮・信・義・智に各大小がある。即ち大德・小德・大仁・小仁といふやうに十二階ある。そしてこれを紫・青・赤・黄・白・黒の色で區別し、服も同様の色を用ひしめた。此の冠位の制定は、氏族制度に大鐵槌を下したもので、實に大化の改新の先驅をなすものである。即ちこの冠位の制度は、從來の特定氏族のみが世襲によつて、朝廷で高位を占むるの舊弊を破り、人材を登用し適材を適所に置き文化の停滞を疏通し、社會の氣運を新にせんとする英邁なる太子の處置であつたのである。

二、憲法の制定 歴代の天皇の御意志であらせられた任那を回復し、新羅及び支那の壓迫に對抗するには、どうしても國力の充實をはかり、支那と對等の地位まで向上しなければならぬ、その爲に

は時代の弊風たる氏族の兼併や黨争や文化の停滞を一掃し、皇室中心の強固なる統一的國家たらしめ外國文化を移入して文化の程度を高むる必要があつた。この大精神が憲法制定となつて現れたのである。

この憲法は我國に於ける法律制度の起源をなすものである。勿論今日の憲法とは全く性質を異にし倫理的道德的な訓戒が主となつて居るのである。試に其の要點のみをあげる。

- 一、和を以て貴となし忤ふことなきを宗とす。 一、篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧なり。
- 二、詔を承けては必ず謹め。 四、群卿百寮禮を以て本と爲よ。 五、養を絶ち欲を棄て明に訴訟を辨へよ。 六、惡を懲し善を勸むるは古の良典なり。 七、人各任し掌ことあり宜しく溢れざるべし。 八、群卿百寮早く朝り晏く退てよ。 九、信は是れ義の本なり事毎に信あれ。 十、忿を絶ち瞋を棄て人の遠ふことを怒らざれ。 十一、功と過を明察にして賞と罰必ず當てよ。 十二、國司國造百姓に飲ことなかれ。 十三、諸の任官せる者、同じく職掌を知れ。 十四、群臣百寮嫉妬むことなかれ。 十五、私を背きて公に伺ふは臣の道なり。 十六、民を使ふに時を以てするは古の良典なり。 十七、夫れ事は獨り斷むべからず必ず衆と與に論ふべし。

此の十七條の憲法を見て氣のつくことは第一争ひを戒められてある事である。これは當時の弊風である氏族の黨争軋轢が外交問題を失敗に陥れ、文化を停滞せしめ、外國の輕侮を招いたからである。

一、十、十四、十五にその旨が示されてゐる。第二は皇室中心主義がよく現れてゐることである。三、七、八、十二、十三、十五等はそれである。第三は佛教の奨励である。これは外國文化移植の爲に必要と考へられたからである。

三、學問の奨励 太子が學問を奨励されたのも、我國の文化を向上せしめて、國際的に支那に劣らぬだけの國家たらしめんとの念願であつた。太子は自ら高麗の惠慈について佛學を修められた。そして勝鬘經や法華經を天皇に講じ、又勝鬘、法經、維摩三經の疏を著された。その解釋に於て日本思想獨特の閃きを見せ支那崇拜に陥る事がなかつた。

又國史修撰の事業を始められた。神武天皇即位の年を決定して國史年代の根本を定め、或は天皇記國記等を記録を作られた。これは國家を統一する上からも支那に對する政策上からも必要であつた。日本書記に約六百年の延長があるといはれてゐるが、斯く國を古く見せようとしたのは、或は聖德太子の政策からではあるまいかと辻博士はいはれる。

なほ太子が文物の輸入を目的として、小野妹子を支那に遣はした事は、文化史上特筆大書すべき出來事である。これを機會として高向玄理、南淵請安、等の留學生が彼の地に渡り學問を研究することになつた。學術の研究が國際的になつたわけである。

四、佛教の奨励 太子が自ら佛典を講じ、或は經典の疏を著された事は既に述べた。其他飛鳥の法

興寺、難波の四天王寺、大和の法隆寺等の造營に力を注がれた。これ等は外國人に我國の文化を示す國家的事業であつた。法隆寺完成の年に遣隋使を發せられたのを見ても察しられる。この佛教の奨励によつて建築、彫刻、繪畫等の藝術が長足の進歩を遂げ、漢文學の研究が一層盛んになつて來た。そして我國に慈善事業なるものが始めて起るに至つた。

五、學校教育 法隆寺學問所を起して我國學校教育の起原をなすことは前節に述べたから略する。以上要するに太子は、政治的には氏族制度の弊を去つて皇室中心主義を發揮し、思想的には日本思想によつて儒佛二教を調和統一し國民思想の據るべき所を明にし、教育的には我國文化の基礎を定め斯くて皇威國威を中外に宣揚し、新日本を建設せる大哲人・大政治家・大教育家である。惜しむべき哉四十九歳の壯年を以て薨せらる。長老は愛兒を失ふたる如く、少幼氣は慈父母を失ふたる如く、全國民哭泣なすところを知らなかつたと傳へられる。

第五節 大化の改新及大寶令と教育

一、大化改新の思想的意義 聖德太子の施政の中心は氏族制度に伴ふ弊風を一掃せんとするにあつたが、其の方法は漸進的に平和の間に行はれたのである。しかし中道で薨せられたので、功を竣へることが出来なかつた。けれども其の氣運は二十餘年後、中大兄皇子と中臣の鎌足によつて成され

た大化の改新として實を結んだのである。

しかし當時の社會状態は、最早平和的漸進的手段によるにはあまりに事態が急迫してゐたので、やむなく非常手段に訴へたのである。先づ血祭にあげられたのが、氏族中の大頭目蘇我入鹿であつた。蘇我氏討滅の勢を以て我國前古未曾有の革新は着々と進んだ。其の主なる改革事項は、氏族の私有した土地人民を公地公民となし、封建的氏族制度を全く破壊して、中央集權の確立を見た事である。其他地方制度の確立、戶籍の調査、班田收授法、租庸調の税制等の改革が行はれたのである。

以上要するに大化の改新は、聖德太子の遺業を繼承したものであつて、氏族制度を破壊し、一般民衆を解放し、皇室中心主義を實現したところに、思想的意義があるのである。その内容は支那思想によつてゐることは言ふまでもない。

二、天智天武二天皇の教育事業 天智天皇は孝德・齊明天皇の皇太子として、大化の大革新を成就された中興の英主であらせられる。太子の時録足と共に南淵請安に就いて周公・孔子の道を學び篤く支那の學を好み給ふた。即位の後大學を設け、百濟の歸化僧詠を大學頭とし、同じく百濟人鬼室集斯を學職頭とし、博士學生を置いて學業を教授せしめた。これが我國に於ける一般教育の爲に學校を建てた始めである。しかし文部大臣格の大學頭も、大學總長格の學職頭も、皆外國人であつたところから見ると、當時日本人の學問的素養はあまり深くなかつた事が想像されるのである。

天武天皇も教育に力を盡された。天皇は大化の新政の實をあぐべく、新政の律令を修正して、京都に大學、諸國に國學を置いた。大學には音博士書博士を置いて各生徒を擇びて業に就かしめた。又御心を天文曆數に注ぎ給ひ、自ら占星臺を建て、天文博士天文生を置かれた。

三、大寶令と教育 大化改新によつて氏族制度が廢せられると、支那の律令格式によつて政治をすることを取り入れることになつた。律は刑法、令は其の他の法、格は律令の部分的改正された法令、式は施行細則である。大寶令は文武天皇の大寶元年、忍壁親王、藤原不比等によつて制定され、翌年から施行せられたものである。大寶令の學制によれば、京都に大學、典藥寮、陰陽寮、雅樂寮、があり諸國には國學がある。太宰府は西海の重鎮であるから府學を置く、これを學業院と名づけた。

1、大學 大學は式部省に屬して、頭カミ・助スケ・九シヨウ・屬ウケの四部の事務官と、明經博士、明經助教、音博士、書博士、算博士の四道の教育がある。學生は定員四百人、十三歳以上十六歳以下の聰明なもので、五位以上の者の子孫と、東西史部の子と八位以上の請願者に限つて入學せしめる。

教育の目的は官吏養成にあつた様である。しかし高橋俊乘氏は日本教育史六七頁に『大學は官吏養成の爲の學校ではなかつた。大學を官吏養成の學校のやうに言ふ人もあるが、大學は登龍門の一たるに過ぎない。』といつて反對してゐられる。學科は明經道、紀傳道、明法道、算道、書學の五に分れてゐたが書學は餘り振はなかつた。明經學は經學及び政治學專修の科で、紀傳道は歴史文章の科で後に

文章道と改まつたが多く秀才が集まつた。明法道は法律の科である。算道は數學を研究する科である。

教授法を見るに、漢文を主としてゐたから、先づ音博士から支那音を學んで、それが終つてから經義を學んだ。教官は講義を始めると終まですまされば中途ではやめない。學生はそれを聞いてゐて暗記するのである。一つの書のまだ終らないうちは決して他の書を見ることは出来なかつた。どこまでも自由な學習は許さないのである。

試験は素讀及び講義について毎月一回、講義のみについて年末に一回が普通である。素讀の月試はその月習つた千字のうち三字を覆ふて暗誦せしめる。讀めぬ者は答で打つた。講義の月試は六千字の中から大義三條を試み、二條に通ずるを合格とした。年試は大義八條を問ひ、六條以上通ずるものを上第とし、四條五條を中第とし、三條以下を落第とする。

訓練は頗る嚴格である。琴を彈き弓を射る以外は一切の作業、雜戯を禁じ、禮を非常に重んじた。師道は嚴重にした。律に師を殺したものは八虐罪の一に數え、師を殴つたものを常人に刑に二等を加ふると規定してある。

大學は授業料は徴しないが、學資は自辨である。尤も平安朝の始めの頃寄宿舎に入つたものには給食したらしい。それから入學の束脩の儀式を行つた。

2、國學及府學 各國に國學を置いた。國學は國司の支配に屬する。教官を國博士といふ。當時地方には學者が少なかつたので、數箇の國學に一人位の割合に配當された。學生は主として郡司の子弟で時に庶民の子ども入れた。定員は國の大きさによつて異なつた。大國四十人、上國四十人、中國三十人下國二十人といふ定めであつた。年齢は大學と同様である。

太宰府の府學は、筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後の六ヶ國の國學を兼ねてゐた。大平勝實六年吉備眞備が大宰大貳となつて、銳意學政につくして非常に盛んになつた。

3、典藥・陰陽・雅樂諸寮 典藥寮は今の醫學專門學校に當る。學生は醫學科、針科、案摩科、咒禁科、藥園科の何れかを専門に研究するのである。又別に産科女醫の司るところである。陰陽寮には占を研究する陰陽道、天文を研究する天文道、曆學を研究する曆道の三分科がある。漏刻を掌つた。雅樂寮には文樂、武樂、雜樂がある。學生が三百數十人あつたといふから當時如何に音樂を尊重したかがわかるのである。尤もこれは平安時代の時代思潮である感情主義の現れたものとも見得るであらう。

4、要約 大寶令の學制は、それが實際に適當であつたか否か、又實際に行はれたものであるか否かは別問題として、斯かる完備せる學制が規定された事は實に空前の偉觀であつた、世界教育史上に誇るべき事實たるを失はない。而かもその實際適用した教育に於て、師道の極めて嚴正なりしこと、それにも關らず師弟の情誼の親密なりし點等、幾多稱揚するに足るものがあるのである。只支那制度の

模倣に過ぎた點、主として官吏養成の爲なりし故、一般庶民の教育に及ばざりし點、暗記を過重し體罰を課した點等は缺點とせねばならぬ。しかし當時としてはやむを得なかつた事であらう。

第六節 家庭教育及び社會教育

一、家庭教育 上代は夫婦別居であつたが次第に同居するやうになつて來た。しかしまだ子供の名は乳母の名を負せる風習があつて、父の名を負ふには至らなかつた。そしておやといふ場合は多くは母のみを意味した。まだ母權中心の思想が残つてゐた様である。この時代はまだ家庭教育が、意識的、自覺的に行はれてゐなかつたらしい。それは子供を賣買する風習があつた事實から想像の出来る事である。

しかし貴族等の上流家庭では、家庭教育が意識的自覺的に行はれた。天皇には侍讀、皇太子には學士、親王には文學といふ教官があつたが、其他の大家には家庭教師に相當する人があつたらしい。空海の如きは十二の時阿刀大足といふ人について漢籍を學んでゐる。

當時の貴族の家庭教育の内容は、漢學や詩文や書道や音楽が主なものであつた。そして其の結果相當の成績をあげたものと思はれる。萬葉集の如きは、貴族の人々が主な作者であつた事などによつても察しられる。尤も萬葉集には庶民の歌があるが、それは貴族がそれ等の庶民の氣持ちになつて歌つ

たものが多いと言ふことである。

二、社會教育 儒教・佛教の傳來と、社會制度の改新とは、自然に社會教育の發達を促した。其の主なるものは、新制度の國民に與へた影響、佛教の慈善事業及び教化事業、國史編修事業、公開圖書館の新設等である。

先づ社會教化の重大事項として聖德太子の憲法を挙げなければならぬ。太子の憲法は既に述べた如く、國民道德の規範であつて上古に於ける國民教化の經典であつた。次に大化の新政の皇室中心主義は、國民に君臣の分を明瞭に觀念せしめたる點に大なる教化的價值があつたのである。

次に佛教の慈善事業は、下層階級の教化に盡すところが多かつた。聖德太子及光明皇后は、悲田院施藥院を建て、捨子や孤獨の病者を救濟されたのである。又聖武天皇は諸國に國分寺を置き、國師を置いて教育の任に當らしめた。國學が上流社會の教育に没頭せるとき、國分寺は社會全部に亘つて教化に務めたのであるから、一般的影響が國學にまさつてをることは言ふまでもない。

國史の編輯が、我國體の尊嚴を明かにし、社會教化の上に重大な影響をもたらした。古事記は元明天皇の和銅五年に出來た書物である。これは太朝臣安萬侶が稗田阿禮が誦む所の帝紀舊辭を撰録したものである。日本書紀は舍人親王が總裁となつて、安萬侶、紀清人、三宅麻鷹等が撰集したものである。何れも我が皇室の本源を説明し、建國の由來を明徹にし、列聖の安謨を述べたもので、當時は勿

論のこと後世に至るまで實に大なる社會教化資料であつた。(徳川時代の國學派を見よ)

最後に當時の社會教育上一偉彩を放つてゐるのは、石上宅嗣の芸亭である。宅嗣は奈良朝末期に於ける文學者の第一人者であるが、その舊宅をすてて阿闍寺とし、寺内の一隅に特に儒書の文庫をおきこれを芸亭と名づけ、好學の徒に公開した。印刷術の幼稚であつた當時は、書籍は非常に得難かつたのである。大宰府の府學は六國を管する學校であつたけれども、孝謙天皇の頃まで、五經のみしかなかつたといふ。如何に集書に困難であつたかをよく物語つてゐる。斯かる時代に宅嗣が多くの書を蓄へて、諸人に閱覽せしめたといふ事は推獎に値する。これは我國に於ける公開圖書館の始めである。その遺跡は不明だが奈良にあつた事は事實である。

第四章 中古の教育

第一節 時代の概観

此に中古の教育と言ふは、所謂平安時代の教育の事である。桓武天皇の平安遷都から平氏滅亡に至るまでの、約四百年間に亘る時代の考察である。この時代は、文學、美術、宗教等の文化の上に、日本精神の獨立の曙光がほの見えはじめた時代である。思想的に見ると感情本位の唯美思想、眞淵の

所謂たをやめぶりの時代で、反而柔弱に傾き、質實剛健の氣風に乏しく、遂に武士なる階級の勃興によつて、この感傷的主情主義は没落するに至るのである。

平安奠都は前代の佛教政治の餘弊を去り、當時の人心を一新した。新都は風光優雅で交通の便利もよく、雅かな四季とりどりの生活に申分なかつた。この恵まれた地、太平な世に郷土色豊かな日本文化が生れたことは故のないことではない。この文化は實に藤原氏一門の貴族階級に生れたものである。

藤原氏は鎌足の後である。奈良朝時代にも名族として朝廷の上に勢力があつたが、平安朝に入り一層勢力を高め、殊に文徳、清和二天皇以後は外戚として政權を掌握した。時平の時代には、術策を以て菅原道實を陥れ、獨專的に政權を支配し、道長に至つて全盛を極めた。八代凡そ一百餘年間は藤原氏專横の限りをつくしたが、後三條天皇に至つて漸く勢力を抑へられるに至つた。彼等の建設した文化は所謂ブルジョア文化であつて、全く民衆的色彩を缺き、質實剛健の致趣を備へてゐないけれども優雅、哀婉、清楚な他國に見得ぬ國民性を表現した文化である點は、買つてやらなければならぬ。

此の時代の教育的特色とも言ふべきは、(一)前期は漢文學が非常な隆盛を極めたこと、小野篁、都良香、菅原道真等はその代表的人物である。(二)私學が非常な勢で勃興したこと。(三)天台、眞言等の日本的宗教が起つたこと。(四)國文學が未曾有の發達を遂げたこと。殊に國文學者としての才媛が

輩出したこと。(五)末期には家學が起つて學問の普及を妨げたこと。等である。然るに藤原氏の勢力の失墜に伴つて武士の興起となり、源平政權の争奪戦によつて平安時代の幕は閉ぢることになる。

第二節 私學の教育

一、私學勃興の理由 私學勃興の原因の一つは、漢文學の隆盛になつた事である。平安朝初期は朝廷の綱紀も張り、唐の學風を受けて漢文學が非常に盛んになつた。此の時代は儒教の精神を取つて人倫を正すといふよりも詩文に巧みなることを理想とした。西洋の文藝復興時代の人文主義の如く、唐の言語文章を模倣する事を喜んだのである。そして競ふて大學に學んだので大學も隆盛であつたが、大學だけでは不足を感じてここに私學が起つたのである。又これを他面から觀察すると、氏族制度の名残とも見られる。元來大寶令の學制は郡縣制度を背景としてゐるから、職業世襲の長い習慣を有する氏族制度本位の家庭には適合しない點があつた。そこで氏族制度本位の私學が起つたと見ることも出来るのである。蓋し何れも名門王族が各々其の子弟を教育し、以て其の勢力を張らんとしたものである。

二、主なる私學 1 弘文院 和氣廣世が父清麻呂の遺志を紹ぎ、和氣氏一族の爲に設けた學校である。其の建設の年代は詳かでないけれども、清麻呂歿後の事であるから延暦十八年以後のことである。我

國最古の私學たる事は明かである。校舍は大學の南なる廣世の私宅であつて、内外の典籍數千卷を蔵し、且壘田(自ら開拓した田で私田である)四十町を附し教學の用に供し、一時頗る盛んであつた。

廣世は大學別當であつた時も壘田二十町を寄附して、勸學料とした程の教育熱心家であつた。

2 勸學院 左大臣藤原冬嗣が嵯峨天皇の弘仁十二年に、自己の食封を割き、藤原氏一族中の窮乏の者等の爲に立てたものである。其の別當は藤原氏にして辨官たるものを以て任じた。藤原氏の盛んなる時に當つてをつたので、私學とは言ひながら生徒は殊に多く、其の勢は大學以上であつた。當時の諺に「勸學院の雀は蒙求(支那李膺の著)を轉る。」とあるは、その盛況を物語るものである。學校の位置は三條北壬生の西であつた。

3 獎學院 陽成天皇の元慶五年在原行平が、三條通西壬生の西に立てた學校である。行平は嵯峨天皇の皇孫であつたから、始は嵯峨源氏の人のみを別當に補してゐたが、崇徳天皇の保延六年、村上源氏なる中院右大臣雅定が別當となつて以來、代々中院家が別當に補せられた。そして淳和院の別當をも兼ねた。淳和院は淳和上皇の離宮であつたが、後に寺となつて別當を置かれたので學問所ではないといふ説もある(高橋氏日本教育史一〇四頁)が、世には獎學院と共に王氏學問所と言つてゐる。王子とは皇子の三世四世に至つてもまだ姓を賜はらないものをいふ。

4 學館院 嵯峨天皇の皇后、其の弟右大臣橘氏公と議して嘉祥三年に建てたもので、橘氏一族の子弟

を教ふるところである。經史の教授が主であつた。橘氏が衰ふるに及んで藤原氏が之を管理した。
5 綜藝種智院 淳和天皇の天長五年僧空海が、左京九條堀川通東方二町の藤原三守の宅地を得て建てたものである。其の目的は宗教を弘めるといふこともあつたが、俗人に普通教育を授けんとするにあつた。當時支那には閩塾があつたが、我國の京都には一の大學のみあつて、閩塾に相當するものがなかつたので、新に設けたものである。教師には僧侶と俗人を併せ用ひ、圖書は佛書の外多くの經書をも備へた。生徒は僧侶たると俗人たるを問はず何人も自由に學ぶことを得しめた。綜藝とは佛書の兼綜衆藝といふ文句から出たもので、衆藝を兼綜する義である。この綜藝種智院は、我國の庶民教育、平民教育の起原をなすもので、實に皇紀一四八七年、西曆八二七年、のことである。しかしこの意義ある學校も、空海の歿後其の志を繼ぐものがなかつた爲に、久しからずして荒廢に歸し、仁明天皇の承和十二年には、其の土地は東寺の領となつてゐるところを見ると、其の活動期間は三十年に達しなかつたものと思はれる。

第三節 家學の教育

一、家學勳興の理由 家學とは専門の學術を代々世襲して、之を他の家に於て傳ふることを許さぬものと言ふのである。これは族制政治の學術界に及ぼせる影響である。氏族制度は大化の大革新に

よつて一度びは破壊されたものであるが、長い習慣は容易に根底から取り去る事は出来なかつたものと見え、平安朝に入つて藤原氏といふ豪族が現れて、代々官職を世襲して族制政治を始めたのである。この朝官の世襲となると、同じく朝官たる道々の博士達も學術世襲をする事になつた。

丁度こうした傾向の時分、平安朝初期にはさしにも全盛を極めた大學や私學が、全く衰微してしまつた。これは村上天皇の天曆四年の大火、一條天皇の永遠年間の震災、高倉天皇の治承元年の大火等の打ち續く天災の爲に、大學や私學が殆ど破壊焼失したことにもよるのであるが、藤原氏以外のものはいくら大學を出ても、その割に出世が出来なかつたからでもある。斯様に大學私學の教育が廢頽したものであるから、専門の學問を修めたいと思ふものは、家學による外はなかつたのである。こんな事情から家學が社會に權威をもつ様になつたのである。その結果學術普及の範圍を縮少し、學術研究心を減殺し、學術の發展を阻害するに至つたけれども、専門的智識を後世に持續した功績は認めなければならぬ。

二、主なる家學 1 有式學 有式學とは朝廷に於ける恒例の儀式を研究する學問である。當時朝廷に出仕するものは、有職、故實、典例を覚えてゐて、複雑な形式的生活に過失のないやうに努める必要があつたので、自然こんな學問が生れたのである。而して其必要上搢紳公家、又は太政官外記の家に限られてゐた。つまり常に朝廷に出入する門閥の家柄に傳へられた専門の學である。

2 明經道 明經道の經學は清原家及び中原家兩家の専門に屬するもので、この兩家は外記の家柄として、朝廷では昌んな勢力を有し、社會の尊崇も亦淺からず、經學を修めんと欲するものは、必ず此の兩家の一を選びて就學したものである。

3 紀傳道 紀傳道の史學及び文章學は、菅原家及び大江家の専門とするところである。當時は人々競つて詩文に巧になる事を勵めてゐた時代である上に、紀傳道を修めたものは出世も早かつたので、菅原大江兩家は多くの家學中最も賑つた。そして教育上に於ける効驗も他に勝つてゐる。

4 明法道 明法道の法律學は中原家、坂上家の専門に屬するものである。兩家は單に法學の研究及び教授に従事せるのみならず、實際裁判官として、訴訟の裁斷に關係したものである。

5 算道及び其他 算道は三善家及び小槻家の専門とするところで、三善家では清行チヨウキョウが其の術に精通してゐた。醫道は和氣及丹波兩氏の専門にして、陰陽道は賀茂及安倍家の専門であつた。

第四節 菅原道眞と其教育的感化

一、小傳 參議是善の三男として仁明天皇の承和十二年西曆七四五年京都に生れた。幼時より聰慧にして十一歳のとき詩を賦したといふ。島田忠臣に師事したが門下生に並ぶものがなかつた。長じて都良香に學んだが、良香も其の才を見て師たるを恥じたといふ。勉學怠らず遂に文章博士となり、讚

岐ノ守に補せられた。三年後任滿ちて歸京し、昇殿を許され藏人頭に補せられ、宇多天皇の侍讀を勤めた。間もなく參議に任ぜられ、遣唐大使を命ぜらる。然るに唐には戦亂によつて凋弊し文化の見るべきものなきを以て、遣唐使の廢止を奏上したので、其の舉は此處に絶えたのである。宇多天皇は皇位を醍醐天皇に譲り、道眞を重用すべく遺詔を與へ給ふた。これによつて醍醐天皇は道眞を右大臣に任じ、藤原時平と共に政を執らしめ給ふた。天皇は上皇と密に議し、道眞を關白に任じようとなされたのであるが道眞は固く辭退した。ところが時平がこれを聞いて非常に憤り、讒を構へて、遂に道眞を陥れたのである。延喜元年の春住みなれた都をあとに太宰府に旅立つた。「こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ。」とは庭前の梅花を見て讀まれた、袂別の歌である。「今年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。捧持毎日拜餘香。」の詩に思ひをやり、配所にある事僅かに二年延喜三年二月二十五日淨妙院に薨じた。傳記を讀む者誰れか有爲轉變の世相を想はざる。

二、事績 道眞の一生は至誠の二字に終始する。誠心誠意を披瀝して宇多醍醐の兩朝に仕へ奉り、更に配所に貶謫さるるも皇恩を忘れず、人を怨まず、只自己の不運を嘆するに過ぎなかつた崇高なる人格は、正に文人の典型であり、國民の龜鑑である。この意味に於て永遠の教育者である。井上博士は「我邦の教育家の祖先なり」と言つてゐる。文の神天滿天神として國民の信仰厚きも故のある事である。主なる事績は、(一)宇多天皇の侍讀となつて御指導申し上げたこと。(二)醍醐天皇に仕へ奉

り國政を專奏せしこと。(三)遺唐使の廢止を建議したこと。(四)類聚國史及び新撰萬葉集を撰したること。(五)紅梅殿なる書庫を設け秀才進士を出したること等である。

三、感化影響 道眞の崇高な人格は、遂に神化されて全國到る所に天滿天神として祠られてをる。宗教的感化の偉大なる事は、多く其の比を見ざるところである。

次に菅公の著と稱せられる菅公遺誠なるものがあつて、思想的に大なる影響を與へてをるのである。徳川時代の塙保己一を始とし、伊藤仁齋、新井白石、室鳩巢、中井竹山、頼山陽、梁川星巖等にも少なからず感化を與へてをる。又明治初年の明治天皇の御師傅であつた副島種臣及び元田永孚、水戸彰考館總裁栗田寛博士等も菅公崇拜者であつた。

菅公遺誠は三十三章からなる政治・文學等の諸方面に亘る訓誡であつて、俗に菅公の書き残したものであるとして傳へられてをる。けれども黒川眞頼博士等の如く、遺誠全部が後世の偽作であると主張する人もあるのである。遺誠全部が偽作であるとの斷定は、今日の研究では考證されるに至つてゐないからやはり菅公相傳のものとしておくより外に仕方がないが、其の中の第廿一章と第廿二章とは、明に後世の竄入であることが文學士加藤仁平氏によつて考證されてをる。(培風館發行同氏著和魂漢才說參照)

この二章は遺誠の中で古來特に重要視されたものである。第二十一章には「凡そ神國一世無窮の玄

妙なる者は、敢て窺ひ知るべからず。漢土三代周孔の聖經を學ぶと雖も、革命の國風深く思慮を加ふべきなりとあり、廿二章には「凡そ國學の要とする所、論古今に涉り天人を究めんと慾すと雖も、其の和魂漢才に非るよりは其の闕典を闕ふこと能はず」とある。就中後者の和魂漢才なる思想は、菅公相傳の思想として、平田篤胤一派の國學者によつて大なる發展を見た。學習院の學則にまで影響を與へてをるといふ事である。

和魂漢才の熟語は後世人が作つたものであり、兩章が後世人の竄入したものであるとしても、菅公の思想の中に日本中心主義、和魂漢才的思想が存在した事は否定する事が出来ないと思ふ。多くの人が竄入物であるにかかはらず、菅公の遺誠たることを信じたのは、菅公の思想の中に和魂漢才的な思想の存在を確認したからであらうと思ふ。従つて竄入物の後世に與へた影響は、やはり菅公の感化影響と見られないことはあるまい。

第五節 最澄空海の日本的佛教

一、最澄の天台宗 最澄の祖先は漢の孝獻帝の裔登萬貴王で、日本に歸化して近江に住んでゐたのである。七才の時人生の無常を感じて佛教に志したと傳へられる。十九才のとき叡山に登つて靜止をはじめた。天台大師の著書を読むに及んで、入唐の志を起した。延暦二十三年勅命を蒙つて、遺唐大

使藤原葛野麿に従つて入唐し、天台に天台大師七世の孫智顛を尋ね、天台の奥義を極め、翌年歸朝した。桓武天皇は深く最澄に期待せられ、殿上に召され、またその奉獻した經文を朝廷の圖書寮に贈寫せしめて、奈良の七大寺に賜り名僧に寫經せしめた。そして百年の歴史を有する諸宗と同一地位のものとして天台北華宗は公認せられたのである。

最澄の天台宗は日本的な佛教であつた。彼れの『顯戒論』は他宗の攻撃を辨解したものであるが、その中には、國體・國性によつて弘通せらるべき佛教の性質・内容にも相違がなければならぬことを論じ、國家中心の思想を示してゐるし、佛教は總じて國家鎮護を旨とし、國の爲に祈る意味があることを主張してゐる點も日本的である。なほ最澄が日本的佛教を主張したと言はれる點は、本地垂迹説の立場から山王一實神道の端を開いた事である。山王は支那天台山の山王を、最澄が叡山に護神として移したもので、國常立尊、八幡大神、伊弉諾尊等と同一體に見たのである。

二、**空海の眞言宗** 空海は讃岐の人で、寶龜五年の六月屏風浦に生れた。俗姓を佐伯直といふ。佐伯氏は大伴氏と並ぶ武將の家柄である。十五才のとき京都に遊學して、儒佛道の三教を研究し、其の最もすぐれたと考へた佛教を研究すべく佛門に入つた。最澄と同時に唐に渡り、青龍寺の慧果和尚について、胎藏・金剛兩部の密教を學び、留學三年、平城天皇の大同元年に歸朝し、東寺にありて眞言宗を傳へた。後高野山に金剛峯寺を建て眞言宗の大本山とした。

空海は最澄の如く主角がなく、圓滿で敵を作る事がなかつた。そして貴族社會のみならず、一般民衆にも自己の宗旨を擴めた。しかしその神秘的幽深な思想は容易に理解されなかつたらしい。只現世的利益を主とした加持祈禱のみが傳へられた。空海の宗教思想も、最澄のその様に頗る日本的なところがあつた。空海によつて兩部習合神道が開かれたことはその證明である。兩部神道は眞言宗の金胎二界の教理によつて、神道を説明したものである。即ち胎藏界（理）宇宙の本体）に天照大神を配し、金剛界（智）人間の眞我）に豐受大神を配し、この兩部を二にして一、一にして二なりと説き、兩部を一貫するものが大日如來であると言ふのである。

此の兩部神道は、神佛調和の中心潮流と見らるべきものであつて、以後一千有餘年の間我思想界を支配したものである。従つて鎌倉時代より徳川時代に至るまでその感化を被り、神道固有の性質を曲解するに至らしめた批難は免れないけれども、我思想界を豊富にし純神道復興の機運をつくつた等の効果は認めなければならぬ。

空海が綜藝神智院の設立によつて、我普通教育の發達に貢献した事は本章第二節に述べた通りである。

一、家庭生活の状態 平安時代になると多くは夫婦同居になつた。従つて父と母とは同じ位に見られるやうになつた。此の時代になると子供の教育を稍意識的に行つたらしい。それは産式を重んじたり、子供の心を観察したり、元服の式を重んじたりした事によつて想像されるのである。

上流では女が妊娠して愈々臨月になると、産屋を建てて僧に不斷經を讀ませる。産氣づくど加持・祈禱をして物の怪をはらう。産湯をつかふときは弓の弦を鳴らして悪魔をさける。男の子が生れると文章博士を招いて孝經などを讀ませる。産後は三日五日七日といふやうにきまつた祝をする。五才になるまでは年の始毎に小兒の頭に餅戴かせて、其の子のすこやかな生長を祝ふ。七才頃から讀書を始めるのである。

平安朝の後半の物語や日記などには子供をよく観察した文章がある。清少納言の枕の草紙などには細かい子供の觀察振りが現れてゐる。十歳になると元服の式を行ふ。この式は一族中で優れた人に世話を依頼する。以上は上流家庭に就いてである。下階級に於てはまだまだ意識的な子供の取扱は少なかつたであらう。

二、知的陶冶 平安時代は漢文學が最も重んじられてゐた。學問といへば漢學を意味する程であつたので、上流家庭の知的陶冶としては、漢學が重んじられた。德行よりも漢才が重んじられたのである。七歳頃から習字と共に漢學を學習せしめたものである。數學其他の日常生活に必要な知識を學ば

したやうな形跡はない。

三、道德的陶冶 道德では孝行を最も重んじた。奈良時代には家毎に孝經を一本宛備へさせ、朝廷は孝子、順孫、義夫、節婦等を表彰した。そのうちで孝子の表彰されるものが最も多かつた。それはあながち孝子が多かつたといふわけではなく、却つて事實は反對である。即ち夫婦は別居してゐた様な變能的な家庭組織であつたから、孝子や義夫などか少なかつたので、これを奨励したとも見ることが出来るのである。然るに平安時代になつて來ると表彰されるもの殆ど總ては節婦であつた。これは男女關係が亂れてゐたから、節婦が特に珍らしがられたにすぎない。家庭道德ではやはり孝行が最も重んぜられた。これは儒教の感化が預つて力があるのである。奈良朝以前は孝行とは母又は祖先に仕へることを意味し、父を大切にすることは少なかつたが、この平安時代になると寧ろ母よりも父を大切にするやうになつて來た。これは夫婦が同居するやうになつて子供が父に接觸する機会が多くなつたことと、支那思想の影響によるのである。

次に家庭道德では中正溫厚といふ事が尙ばれた。しとやかで謹しみ深く周章せず騒てず、和厚雅順にして動作が禮にかなふのを貴んだ。雅びやかな貴族文化を理想とした當時としては尤なことであつた。

なほ敬神といふ事が家庭道德の中で重なるものであつた。皇室に於ては天武天皇のとき、神寶を伊勢

大神宮に奉り、皇女大來媛を齋宮となし、廿年毎に改造遷宮の式を行ふことに定められた。上が模範を示されるのだから、家庭で敬神を重く見たといふ事は當然のことである。

四、藝術的陶冶 感傷的主情主義の時代思潮が影響したものと見えて、當時家庭教育で最も力を入れたの藝術的方面の陶冶であつた。男子は漢學に次いで音楽、和歌、詩、習字等を重要な藝能とし女子は習字、彈琴、和歌、裁縫等を重んじた。

音楽には器樂と聲樂があつて、それがまた色々に分れてをった。そして何人も必ず一曲には通じてゐなければ恥だと考へられてゐた。學者の大江匡衡の若い頃、宮中の女房たちから和琴を弾けと責められて歌を詠じて耻を免れた事があつたといふ。この音楽に關聯して舞踊も重んぜられ、十歳以下の童子でも大人を驚すに足る程の上達振りを示してゐる。

音楽に次ぐものは和歌である。當時の和歌は、自分の感情を吟詠することを主目的とせず、寧ろ彼我の音信を通ずるに用ひられた。就中男女間の戀情を媒介する爲に用ひられた。それで歌を作るには掛詞や縁語などを自由に使用し、古歌も相當心得てをらねばならなかつた。作歌の練習は普通六七歳頃からやつてゐたやうである。

和歌の外に繪畫の練習も可なり廣く行はれた。女子には織物、染物、洗濯なども相當重きを置かれた。裁縫の如きは貴族の婦人さへ必修してゐたのである。

五、身體的陶冶 體育的なものは、射藝、騎馬、鷹狩位のものであつた。女性的な文化を喜んだ時代だから、身體的陶冶はあまり顧みなかつたのである。(教育學術界五一卷一號高橋氏平安時代の家庭教育参照)

第七節 社會教育

平安朝時代は文化が殊に都會に集中した時代であるから、目醒しい社會教育が行はれる筈はなかつた。しかし佛教の社會的活動や學問の進歩に伴ふて、書庫の經營とか、國史の編輯とか、慈善事業とか言ふ様な社會教化の活動が行はれたのである。

一、書庫の經營 先づ書庫として第一に擧げねばならぬのは、菅原道眞の紅梅殿である。これは道眞が左京五條の邸宅に設けたもので、三層の閣板を四面に懸け、書卷は皆小函に納めてその上に配列したとあるから、極めてよく管理が行き届いてゐたものと思はれる。寛平五年の道眞自記の文によると、秀才進士の此の房より出でた者が百人に近く、よつて世の學者が此の房を龍の門と名づけたやうである。如何に社會に大なる感化影響を與へてゐるかを想見するに足るのである。

此の外多くの藏書を有し教育上に影響を與へたものは、弘文院の書庫、大江匡房の書庫、藤原頼長の書庫等である。そのうち頼長の書庫は紅梅殿に次で整備せる者で、庫内東西に棚架を設け、陽棚陰

棚と名づけて、其の書を經史・雜記・本朝の四類に分てりと言ふ。匡房の書庫は京の二條高倉に造つたもので、人が火災があつたら危険であらうと言つたけれども、日本國のある間は此の書も存在する朝家が失すべき期たらこの書も失するであらう、火災は怖るるに足らぬと答へたさうである。

二、國史の編輯 1 續日本紀 光仁天皇が、石川名足、淡海三船、當麻永嗣に敕して日本紀の續篇を編せしめたのであるが、桓武天皇に至つて新に、菅野真道、秋篠安人、中科巨都雄に修史を命ぜられた。彼等は前代の日本紀續篇を書き改め、更に天平寶字二年から延暦十年までの記事を加へ、前後四十卷を奉つた。これを續日本記といふ。六ヶ年の歳月を費して撰修したものである。

2 日本後紀 嵯峨天皇は藤原冬嗣、緒嗣、眞嗣及び良岑安世に敕して國史撰修の事を監せしめたが、緒嗣以外のものは皆亡くなつたので、淳和天皇は、清原夏野、藤原吉野、小野岑守に命じて續行せしめた。しかし皆官職を持つてゐたのではかどらず、仁明天皇は右大臣源常、藤原良房、朝野鹿取に詔して之を助しめて成つたものである。延暦十一年から天長五年、桓武・平城・嵯峨・淳名四世四十二年間の歴史で四十卷、但し現今存するものは八卷のみである。

3 續日本後紀 仁明天皇一代の歴史で、主として藤原良房が春澄善繩と力を戮せて撰修したもので、前後十五年を費して成つた二十卷のものである。

4 文德實錄 清和天皇の命により、藤原基經、南淵年名、大江晉人、島田良臣等が撰し始めたものを

陽成 皇の命によつて菅原是善、都良香が助けて完成した文德天皇一代の歴史である。

三代實錄 は清和・陽成・光孝三朝三十年間の實錄である。宇多天皇の命により、源有能、藤原時平、菅原道眞、大藏善行、三統理平等が撰したものである。

以上の五部に日本紀を加へてこれを六國史といふのである。この繼續的な國史の撰修は、社會教化の點より、重大な意義を持つ當代の大事業であつた。歌舞音曲に太平の夢を結んでばかり居たとしか見えない藤原氏の中にも、修史に穩れたる力を盡した者もあつたのである。

三、慈善事業 淳和天皇の皇后正子内親王は、極めて仁恵に富ませられ、忠恕の御心に厚かつたので、屢々士民に賑恤を行はせ給ふた。殊に濟治院を建て、僧尼の病を施療せしめられ、或は又嵯峨の舊宮を精舎となされた等の御事蹟が傳へられてゐる。又小野岑守は太宰府に續命院を立てて、行旅中病に罹つたものの寄宿を許し、療養せしめた。

第八節 女子教育

一、假名の發明と女子教育 我國の上代に於ては、婦人も男子と同じ様に取扱はれた。時によると家庭などでは婦人の方が勢力を持つてゐた場合すらないではなかつた。それが儒教や佛教の影響によつて、女子の社會的地位が男子に及ばないやうになつたのであるが、平安朝の初期頃まででは、女

子は男子と對當な地位を保つてゐた。上流階級に於ては女子も男子と同じやうに教育を受けたらしい。即ち漢文や漢詩を學んだものと思はれる。嵯峨天皇の皇女有智子内親王が漢文漢詩に堪能であつた事や、經國集に婦人の詩が多く載せられてゐる事などはこれを物語るものと思ふ。然るに假名の發明と普及によつて、女子は之を學び、漢籍を読み漢字を書く事を忌むやうになつて來たのである。

片假名は吉備眞備の發明するところ、平假名は僧空海の作と傳へるけれども、それは傳説であつて確實なところは不明である。しかしとにかく假名は漢字に比して女性的であり、可憐で謙遜の感じを與へ、而かも平易で便利であるところから、女性の文字として喜ばれたのであらう。この假名の使用によつて、思想の表現が容易になり、自由になつて來た爲に、國文學が長足の進歩を遂げたのである。殊にこの時代は女流作家の輩出によつて、優美纖麗な絢爛たる文化の華が咲き出でたのは、實に我文化史上の偉觀である。

二、女流作家の輩出 賀茂眞淵が、大和は丈夫の國、山城は婦人の國と言つたが、その婦人の國の文化を代表するものは數多の女流作家によつて織りなされた國文學のそれである。斯く女性作家を多數輩出せしむるに至つたのは、當時の文化の一般性質が女性的であつた事にもよるが、一つは貴族社會に於ける女性の地位が向上した結果でもある。令制の弛緩廢類は男女關係の弛緩廢類と並行し、朝臣は政治兵馬を捨てて詩歌管絃の技や粉黛彩衣を以て女性の歡心を買はん事をつとめたので、宮廷

婦人の間に於ても男子に對當たり得るとの自信を生じ、婦人相互間に於て競争するに至つたのである。一條天皇のときに皇后となつた定子と、藤壺の女御となつた彰子の二人は帝寵を競ふ心から、文藝の道を女官達に奨励したので、其の結果、定子のもとには清少納言、伊勢大輔が出、彰子のもとには紫式部、小式部、和泉式部などの才媛が出たのである。猶當時の結婚は、男から和歌を女子が受取つて、性格氣質などを判斷して承諾した場合に成立するのであつたから、女性が自然強味を持つて來たものと思はれる。また藤原氏が外戚となつて政權を得ん爲に、競つて女を宮中に入れ、才女を選んで侍女とした事なども影響したに適ひない。

それ等の女流文學者中の代表者は紫式部と清少納言の二人である。紫式部は源氏物語五十四帖を著した。桐壺帝の子、天成の美貌の持光源氏の君が、理想の女性紫の上を初め多くの女性との間に醸される戀愛葛藤、及び後の宇治十帖では源氏の子光大将の戀の一生を描いたものである。この間に朝廷に於ける儀式、四時の風物の推移、須磨明石の配流、生別死別の哀情、雨夜の品定、繪合等の興に至るまで、當時の貴族の生活の表裏を如實に描いてゐる。讀む者をして往時の花の都の生活を眼前に髣髴せしめずにはおかない。實に古今に亘る大文字であり、名文である。我國文學界の至寶である。現時の國文學者をして嘖然たらしめる程の傑作である。そして後代の物語・小説の典型として大なる影響を與へてゐる。

清少納言には隨筆枕の草紙がある。己の見聞した事實と、折々の感興とを書き集めたものである。源氏物語のやうに苦心の大作ではないが、豊かな趣味、鋭い觀察が輕妙な筆致によく表現されてゐて隨筆としては他の追従を許さない。才氣煥發、才藝のない男子を卑下し、侮蔑し、貴族的傾向の著しいところに、當時の女流文學者の氣概を見ることが出来る。

三、一般家庭に於ける教養 當時は女子の學校の設備がなかつたので、女子は家庭で教育された。主なる教育者は祖母や母であつたから、子女に對する母の勢力が最も強かつた。時には音楽や和歌などを學ぶものがあつたが、主なるものは家事に關することであつた。中でも裁縫が一番重んぜられた。當時婦人が夫に盡す用事のことを「うしろみ」と言つたが、其の後見の第一は衣服の世話であつた。裁縫に次いで機織、染色洗濯などが重んぜられた。中流以下の女子がこれ等の所謂婦功に熟達する必要は今も昔も變らない。平安時代は上流に於ても、これ等の藝能が必要と考へられ、裁縫は貴族の婦人さへ學んだものである。

當時は男女關係も亂れ勝ちであつたし、一夫多妻の行はれた時代であつたから、嫉妬を慎むこと、貞操を守ることが最も大切なしつけとした。

〔問題〕

一、平安時代と江戸幕府時代とに於て教育上理想とする所に相違ありしとせば何等の點なりしか(明三〇章)

二、左の人々に就きて知れる事を記せ。(明三一章)

南浦訪安(他は關係なき故畧す)

三、奈良平安時代に於ける教育上の状況を述べよ(大七本)

第五章 中世の教育

第一節 時代の概観

中世とは所謂鎌倉室町時代のこと、頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、徳川家康が江戸に幕府を開くまでの凡そ四百年間の事である。この時代は武家が政權の爭奪に日もこれ足らなかつた時代であるから、勢ひ學問は衰頽せざるを得なかつたのである。しかし學問の衰頽は文化全體の墮落を意味するものではなく、俗に暗黒時代とよばれる此の時代にも、却つて平安文化に見ることの出来ない男性的な、國粹的な實行的主義の道德文化が咲き匂ふてゐた。これが即ち武士道である。

藤原氏が劍を捨て武を忘れ、軟弱な女性的文化と陶醉の夢を結んでをる間に、地方には武士なる階級が興起した。桓武天皇に出づる平民と、清和天皇に出づる源氏とが其の最も主なものである。源氏は頼義に至つて前九年の役を平げ、義家に至つては後三年の役を平げ、武勳赫々として東國に勢力を

植えつけた。けれども義家以後名將に乏しく、猶藤原氏に接近せる爲、院政時代には藤原氏と共に抑壓せられた。此の間に平氏は朝廷に接し、保元・平治の亂によつて朝廷に於ける勢力を獨占してしまつた。そして久しく渴望してゐた軟弱な藤原氏の文化に接し、遂にその虜となり、弓矢執る身に管絃を遊び、三軍を叱咤する口に朗詠を吟じ、腰の大刀や長押の槍の錆びるのも忘れて、墮落の道をひたすらに滅亡へと急いだ。

頼朝は伊豆に起つて、累代恩威を施した腹心の臣東國武士の助を得て平氏を亡ぼし、鎌倉に幕府を開き、天下に政治を號令した。彼が藤原文化の根源地たる京都を避けて鎌倉に居り、質朴な生活を維持して武士本來の面目を發揮せしめた事は、文弱に亡んだ平民の末路を深く考へるところがあつたからである。斯くて鎌倉武士の間に、中世を代表し、國民道德學者によつて我國民道德の特色とも見られる武士道が發達したのである。

然るに時代が推移して室町幕府の頃になると、武士が利己的になつて、鎌倉時代の麗しい武士道が姿を潜めてしまつた。當時義満や義政が金閣銀閣を築造して、奢侈贅澤を極めた。その風習が武士の間に見習れて、武士は庶民の富を誅求して奢侈贅澤に耽つた。庶民は苦しい生活をしなければならず従つて社會の秩序は亂れて來た。まるで優勝劣敗の世の中、實力競争の世の中になつて來た。主君が暗愚であれば強臣がとつて代るのである。將軍の權威は管領細川氏に奪はれ、細川氏は家臣三好氏に

權を取られ、三好氏は部將松永氏に勢力を取られる。こんな現象は數へるに珍らしくない。之を時の用語によつて下剋上といふ。つまり當時は下剋上コソコソの時代である。かうした争奪に最後の幸運を引きあてたのが徳川家康である。

以上要するに此の時代の最大特色は武士道の興起であつた。しかし思想史的には、日蓮宗、淨土宗眞宗等の國家的、民衆的宗教が起つて教化に骨を折つたこと。我國民道德の精華たる勤王思想が發達したこと。寺小屋教育が起つた事。金澤文庫、足利學校等の起つた事等見落してならぬものがある。

第二節 武士道教育

一、武士道の意義及び起源 武士道の意義を述べようとする、どうしても其の起源が問題になつて來る。この武士道の意義・起源には色々の説があるが、大體に於て三の意見に分類することが出来る。第一は武士道は上古より存在し、源平以後益々發達したと見る井上哲次郎博士や深作安文博士の説である。國民道德概論に現れた井上博士の説によれば、我國の武士道の發達は、物部・大伴の武臣が朝廷に仕へた第一期、鎌倉時代の君臣關係から主従關係に移つた變態的な第二期、徳川時代の思想的に組織された第三期、王政復古後の第四の發達をとげたといふのである。即ち武士道は上古より今日に至るまで國民道德の中軸として一貫して發達したと見るのである。

第二は武士道は、武士階級の出来てから生じた道德で、武士階級の亡びるとともに亡んだと見る文學士高橋俊乘氏の説がある。氏は哲學研究第一號から第五號に亘つて其の研究を發表してゐる。氏の説によれば、武士道は君國に對する臣民の道でなくて、武士がその直接の主人に對する道である。従つて武士道は國民道德の精華ではなくて、其の主徳たる忠義は國民道德と一致せず、むしろ反する事が多かつたと言ふのである。つまり武士道は上古にも現在にも存在しない。只武士といふ階級があつたときの狭い範圍の道德に過ぎぬと言ふのである。

第三は其の中間に位し、折衷的のものとも見得る。即ち武士道の精神、萌芽或は淵源は上古から存在し、それが武士階級の發生によつて發達をとげたと見るのである。耳理章三郎教授の國民道德序論中に説かれてゐる思想はこれである。つまり武士道を國民道德の精粹として維持しようとするもので第一の説をいくらか讓歩した形である。

これ等の主張は何れも一面の眞理を含んでゐるから、何れを是何れを非と早計に斷定するわけにはいかない。けれども吾人の見るところによれば、第一の説はあまり武士道を形式的に見てゐると思ふ。單に身命を捧げて主君の恩に報ひると見るならば、鎌倉時代の所謂武士道も上代の武臣の道も結局本質的に同じものと考へられるであらう。斯く考へてか、所謂武士道が太古から存してゐたと主張するのであらうか、これはいくらか首肯し兼ねる。

この點は第二の説に聞くべき多くのものが存する。第二の説に従つて武士道を内容的方面から考察すれば、所謂武士道が太古から存してゐたとは考へられないのである。しかしこの見方は餘りに内容に重きを置き過ぎてゐるやうに思はれる。武士道を内容的に見れば、恩顧を受けた氏族の頭領に身命を投げ捨て、盡すことであるから、封建制度の行はれてゐない太古や現今に、武士道があらう筈はないわけである。けれども武士道が起るには、それ等の武士の精神の中に、恩を感じ主に報ひるに至るだけの民族的特有精神が流れてゐたと考へなければならぬ。此の意味で形式的に武士道の中の一要素が太古にあつたと考へることは差支ないであらう。又第二の説によれば武士道は武士階級の亡んだと同時に亡んだといふが、一度發生した思想は辨證的に後の思想の中に生き残るものであり、又過去の道德や思想の優れてゐる事が自覺された時には、自然にそれが後にとりこまれてくるものである。従つて武士道か武士階級と共に亡んだといふ説には賛成する事が出来ない。

以上の論述で吾人の立場が第三の立場に近い事は推察されるであらうが、吾人は第三の説の如く武士道が始めから國民道德の精粹であるとは考へないのである。第二の説の如く鎌倉時代の武士道は、後に述べるやうに經濟的利得から發生した單に武士階級のみ道德であつたのである。然るに其の偉大な價值と効果を發見し、其の形式的、本質的部分を取り入れ、以てこの實行を獎勵しこれを組織するに至つて、此處に武士道が國民道德の精粹と目せらるるに至つたと解するのである。つまり形式

的に見た武士道の一要素の起原を上代に認め、所謂武士道の起原を武士階級の發生に認め、更に後國民道徳の精神として取り入れられ、以て今日に傳つてをると見るのである。長谷川乙彦氏も武士道とは封建時代に於て、主として武士階級の人々が修養鍛錬し、從て此の階級のものが中心となつて之を實行し傳播した道徳で、武士階級が撤廢せられ、國民皆兵の世となつては、武士道は國民一般に普通なるべき臣道であり、國民道であらねばならぬと言つてをる。

二、武士道の發達 文化はその國民性の背景の上に生れる。武士道文化もやはり我國民性と離れて考へることは出来ない。即ち武士道を形づくるに必要な形式的要素が、古來の國民性の中にあつたと考へなければならぬ。これ國民道徳學者が武士道の起原を太古に求むる所以である。しかし所謂武士道は武士の社會的出現によつて形づくられたのである。即ち武士の頭領は家の子郎黨を養ひ、なほその家族をも養つた。其の上殊勝なものには恩賞を施した。從つて家の子郎黨は其の恩誼に感じて忠節を盡すことになつた。これが幾代も幾代も重なる、祖先崇拜の思想も加はつて来る。自己も祖先や親に劣らず代々の主恩に報いなければならぬと感じ、身命を捨てても悔いなきやうになる。それで代々名君の出るところに武士道は最もよく發達するである。源氏の家臣の間に武士道が發達したのもつまりこの爲である。

源氏は代々東北地方に居つて關東武士を懐柔し、恩威並び行はれたので、彼等家の子郎黨は源氏に

對して其の恩誼に報んことを期した。頼朝の擧兵を聞くや我先にと馳せ參じて活動したのである。頼朝は鎌倉に幕府を開いて後、平家の文弱に滅んだ點に鑑みて、次の七則を定めて卒を戒めた。

- 一、武術を練習すべきこと。
- 二、粗忽尾籠の所行あるまじきこと。
- 三、卑怯未練の所業あるまじきこと。
- 四、質素儉約を重んずべきこと。
- 五、主従互に恩義を重んずべきこと。
- 六、然諾を守るべきこと。
- 七、死生相結托すべきこと。

この頼朝の指導と相俟つて禪宗の直截簡明な宗教が、武士の安心立命に偉大な力を與へたのである。

此處に於て武士道は未だ會つて見ざる發達を遂げた。武士は何れも武勇を勵み、武技を練り、家名を重んじて卑怯未練をいやしみ、義の爲には身命を鴻毛の輕きに捧げ、祖先の名を顯し、弱き者に對しては武士のなさを忘れなかつた。北條泰時・時頼も頼朝の遺志を繼いで武士を勵ましたから、武士は殆ど完成の状態にまで發展した。すは鎌倉殿の一大事と聞かば、瘦せたりとも我が馬に跨り、千切れたりとも床に飾れる甲冑に身を堅め、錆びたりとも長刀を小脇にかいこんで馳せ參じ、第一功名手柄をたてんとは、單に佐野源左衛門常世のみの覺悟ではなかつた。

斯くの如く純粹な武士道は永くは續かなかつた。室町時代になつて來ると、武士道も墮落して功利的となつた。もともと武士道は發達した頂點から見れば、美しい功利を超越した道徳ではあつたが、

發達の始めは經濟的利得を出發點としたものであつた。即ち手柄を立てて知行を増加して貰ふと、その恩愛に報ひよらとして忠節を盡したものであつた。室町時代は單に恩賞をあてにするやうなものが増えて來た。しかし戰國時代になると又幾分回復されて來た。そして徳川時代に至つても、各大名に仕へる武士の中に武士道の精神は傳はつた。赤穂義士の義舉の如きはこの武士道の現れである。而して徳川時代に入るとこの武士道が組織され、理想化されて國民道德の中樞とせらるるに至つた。

三、武士の教育 此の時代は女子が夫の家へ嫁して行くことになり、一夫一婦の風が一般に廣まつた。それで父親の力が母親の力よりも家庭では強く、從て子供に及ぼす影響も強かつたと思はれる。婦人が妊娠して臨月になると産屋へ移る。愈々出産すると、臍帯を竹刀で切るまねをする。そのあとは小刀で切る。産湯が終つてから後に湯初の式をする。又産湯の前に白縁の墨をおき、これを的にして碁目を射る。女の子は二箭だが男の子には三箭を射る。それから着衣の祝をする。七夜頃命名し、五十日又は百日を過ぎて母子共に産土神に參拜する。

三歳になると吉日を選んで髮置の祝をする。其の後に袴着の祝がある。適當の年齢になると甲冑始、弓始、乗馬始、讀書始、手習始などを行ふ。八九歳乃至十四五歳で元服するのであるが、其加冠は一族の長者又は主將に依頼する。これを烏帽子親といふ。名前は父祖の一字を割いて命名する事が流行してをった。

稀には僧侶について學問を學ぶものもあつたが、多くは家庭で教養された。當時の武士の教育は智育が主體でなく、身體の鍛錬とか、道德の實踐とかの、所謂情意的陶冶に重きを置いたのである。先づ第一に信仰心の養成に重きを置いた。貞永式目の第一條第二條に神佛を崇敬すべき事が示されてゐるが、家庭でもこれに習つた。從つて武士は戰場に臨んでも、日頃信する弓矢八幡の加護を信じて勇敢に働らいたのである。第二は人間最上の義務として、君の爲に身命を捧ぐる事を心底に打込んだ。武士が戰場に臨んで卑怯未練の行爲なく、家の名弓矢の手前を隣時も忘れず、君の爲に身を捧げたのは、家庭教育に於て幼時から染みこんだ信念の影響と見得るのである。第三は意志の鍛錬を重んじた。理窟よりも實行を重んじたのである。第四は感情の教育にも意を用ひた。これは童話及び和歌によつたのである當時は童話が非常に發達してゐて、少年の感情教育に大に役立つた。又武家では經學と習字と共に和歌を重んじた。源實朝が大歌人であつた如き、或は頼朝奥州征伐の折白河の關を過ぎ、梶原景季に今は初秋だが能因の古風を思ひ出すかと尋ねたとき『秋風に草木の露をはらはせて君が越ゆれば關守もなし』と一首を詠じた如きは、武士が家庭にて感情教育を受けてゐたことを物語るものである。其他勤儉寡慾、秩序的觀念、自力の鍛錬等にも心を用ひた。

斯の如き家庭教育を受けて一人前の武士となり、主君のもとに侍するやうになるのである。當時の武士の家庭に於ける教育は今日から見れば、缺點もあるであらうが、一面今日の家庭教育に見る事の

出来ぬ特色を有し、或程度成功したものであると認めなければならぬ。尤も眞に武士道の精神を體得したものは、君側に侍して幾多の戦場を往來した後であつたに違ひないが、この基礎的教養は家庭教育の力であつたと見なければならぬ。

四、武士教育と騎士教育 我國の武士教育は西洋中世の騎士の教育と頗る似通つた點がある。その比較を拙著系統的日東西洋教育史から轉載しておく。

同點

1 社會狀態 我國の武士も歐洲の騎士も、時を同じうして起り、何れも封建制度の産物である。此の點に於て社會狀態が相似てゐる。

2 人生觀 武士と騎士とは其の根據としてゐる人生觀に相似のものがあつた。即ち我國の武士は我國固有の自然主義の人生觀に基いて居り、歐洲中世の騎士は北歐固有の自然主義の人生觀を奉ずるのである。

3 宗教的感化 我國の武士は神宗の教義に感化された點が多く、騎士は基督教の感化を受けてゐる。身命を投げ出すを本義とする彼等には單なる淺薄な自然主義には安心立命が見出だされなかつたものと見える。

4 教育の根本精神 我武士教育の目的は、主君の爲に自己一身を獻けて、恩誼に報ゆるだけの人物養成にあつた。

騎士教育の目的も君主の爲に血を流すを辭せざる底の人物の養成にあつた。これにも共通點がある。

4 意志の教育 何れも知的陶冶を第二として、専ら意志の鍛錬に力を注いだ。従つて武術の練習に重きを置き、身體の陶冶に努力した。つまり何れも實行的主義の文化を建設したのであつた。

6 感情教育 我が武士教育に於ては感情陶冶に重きを置き、殺伐に流れるのを戒めた。武士の情・風雅の道といふことは常に氣をつけて教養したのである。騎士に於ても、婦人に對する愛の練習とか、戀歌をつくるとかの感情教育を忘れなかつた。

異點

1 道德的基礎 本邦の武士には儒教の精神が浸み込んでゐた爲に、道德的根柢に於て騎士よりも遙に深いと吉田熊次博士はいはれてゐる。

2 武道精神 騎士の武術は競技に流れ、武道の精神に缺くる所があつた。然るに我武士の武道は、極めて眞剣で武道の精神に燃えてゐた。

3 婦人に對して 騎士は之を尊敬し、或は愛の練習をしたりして、女々しい態度をとることが多かつたが、我武士には斯様な點はなく、どこまでも秋霜烈日の嚴肅さがあつた。

- 一、本邦武士道の教育上に及ぼしたる影響を述べよ。(明二六年)
 - 二、本邦と歐洲と各封建時代に於ける武士の氣風及其の教育法につきて異同を比較せよ。(明三一本)
 - 三、本邦封建時代に於ける武士の氣風及其教育法の特質を述べ現今教育上取捨すべき要點を擧げ且其理由を明にせよ。(明三八本)
 - 四、鎌倉時代に於ける武士教育と歐洲中世の騎士教育とを比較せよ。(大八本)
- 〔問題〕 修身
- 一、武士道の變遷及び發展を叙述せよ。(明四三本)
 - 二、武士道は我國の德育に如何なる影響を及ぼししか。(明三三本)
 - 三、武士道と人道との關係を論ぜよ。(大十三本)

第三節 新興佛教と其教化

鎌倉時代は政治界に於て、新たに勃興した武士階級が、公家に代つて政權を掌握したやうに、宗教界に於ても日本的な民衆的な新興佛教が、翻譯的な貴族的な舊佛教に代つて時代を支配するに至つた。當時の舊佛教は實に腐敗の極に達してゐた。寺院は多くの領地を擁し、皇族及び攝家を座主・門跡に迎えて貴族的傾向を發揮し、僧兵を養ふて名利の爲に干戈を弄し、甚しきは未曾有の大國難たる元

寇に際してさへ、非國家的暴舉を敢てするに至つた。又名僧知識といはるるものまでが、自ら進んで未梢的な加持祈禱に全心を傾け、世間的榮譽や利福を得ようとおせつた。僧侶にして女犯の如き破戒も普通となり、後白河法皇も「隠すは上人、せぬは佛」と仰せられた位である。斯かる惡傾向は、天台・眞言の如き舊佛教を改革せんとして立つた宗派にさえ見ることが出来るのである。要するに貴族階級の皮相的な信心につけ込んで、僧侶の享樂的射利的惡風が極端になつて來たのである。

貴族階級が皮相的な信仰に走つたのもそこには深い理由があつた。當時貴族階級は、不規則・不健康極まる生活を續けた。淫蕩な性慾の享樂に耽溺した生活、唯官能の刺戟のみに生きた生活、權勢慾の爲に常にいらいらした氣持の生活等の爲に、彼等の神経はいやが上にも過敏になつた。僅かの事に喜ぶ代りに、又少しの事にも悲しみ驚くのであつた。彼等のセンチメンタルな心情は、彼等自身の理性で統御する事が出来なかつた爲、悲しきときの神頼みで、信仰の何者かを體驗することもなく、唯皮相的な加持祈禱の力を頼みとしたのである。しかし安心立命はおろか、一時的な不安すら全く取り出す事は出来なかつた。

さうした感傷性は平安末期から鎌倉初期にかけては一層深刻化された。さしにも榮華を極めた藤原氏一門にも衰運の哀愁が漂ひ始め、更に保元・平治の争亂には骨肉相食む修羅の巷を見せつけられ、なほ権化一朝の平氏の末路を見るに及んでは、誰れしも有爲轉變、無常迅速の世態をはかなまずには

られなかつた。斯くて厭世悲觀に陥り、現世を逃避せんとしたのも決して少くなかつた。

斯かる世相を救済すべく奮起したのが、鎌倉時代の新興諸佛教であつて、其の重なるものは武士階級に影響の多い禪宗、平民宗教としての浄土宗及び眞宗、國家的な日蓮宗等である。

第一 禪宗と武士教化 一、禪宗の教義 禪宗は佛陀が靈山會上で、摩訶迦葉に無言にて以心傳心的に示された微妙至極の法門である。教を傳へるにも經論によらず、心と心と觸れる事によつて眞理を傳へる點から、「教外別傳、不立文字、直指人心、見性成佛」の標語を掲げ、禪を以て唯一の修行法とする。禪は佛教の修行法として各宗の間に行はれてをるけれども、それは戒(戒律)、定(禪)、慧(經論)の三學中の禪である。然るに禪宗は禪を佛教の全部と解するのである。

禪にも色々の階段があるが、第一義諦の禪は、現象界に於ける此の人間そのまゝが、本體界の佛性を具へてをることを體驗するにある。即ち諸法實相、現象即實在の境地を體驗するにあるのである。此の爲に心的悟道境を『臨濟の四料簡』とか『洞山の五位』とかによつて教示するのである。凡てを説明する餘裕はないから臨濟の四料簡だけを説明して見る。第一に「人を奪つて境を奪はず」といふ事がある。人とは主觀であり精神である。境とは客觀であり物質である。主觀・精神をぬきにして見ると、宇宙は悉く客觀的物質的に見えるといふ意味で唯物論の見方である。第二に「境を奪つて人を奪はず」とあるが、これは客觀界物質を離れて精神的・主觀的に見ると、宇宙悉く心的存在に見える

といふ意味で唯心論の見方である。第三に「人境ともに奪ふ」とある。これは主觀及び客觀、精神界及び物質界を超越すれば、宇宙の眞理たる絶對の世界があることを意味する。第四に「人境ともに奪はず」とある。これは絶對の世界がこの相對の世界以外にあるのではなく、主觀といひ客觀といひ人といひそのあるがままに、現象即實在、諸法實相たることが味はれるといふ意味である。

つまり禪は宇宙を物と見たり心と見たりする概念的・知的の見方を棄てて、神秘的な直覺によつて、有無生死や一切の煩惱を超越した永劫の生命、眞の實在を體驗せんとするものである。

二、禪宗と武士 禪宗が日本に傳つたのはずつと以前であるが、それが社會に流布するやうになつたのは、臨濟宗の開祖となつた榮西の頃からである。榮西は始め九州地方に弘めて自信を得たので京都に入つて布教したが、他宗に壓迫され達磨宗の禁止にあつた。それで鎌倉に入つて禪を鼓吹するに及び、頼朝の夫人政子・將軍頼家・實朝等の歸依者を得て政子の爲に壽福寺を建て、頼家の爲に建仁寺を建てて其の開祖となつた。後道隆が來朝すると、執權北條時頼は鎌倉に招いて建長寺を建てその開祖とした。其他祖元の爲に圓覺寺を建てた。斯くの如く幕府の保護によつて、鎌倉は禪宗の中心地となつた。武士に影響を與へたのも、此の幕府の宗教政策に負ふところが多いのである。

猶また禪宗の僧侶生活が簡素で、質素儉約を旨とする武士生活と一致したことや、禪の修行が知識・概念を第二とし、意志の鍛鍊や實行を主とする點が、武士の修養法に共通するものがあつた事や、禪

の修養が生死の巷に立つたとき自若たる不動の精神を鍊るのに、大いに役立つ事などの種々なる理由から、武士は概ね禪宗に歸依し、禪によつて心膽を鍊つたものである。生は寄なり、死は歸なりといふやうな生死を超越した武士の人生觀は、禪の修養によつて得られたものが多いのである。死を鴻毛の輕きに比する武士道は、禪宗の影響感化が尠くないのである。實に當時の禪宗は武家佛教たる觀があつた。

第二、淨土教と民衆教化 一、法然と淨土宗 現在の日本佛教は一面淨土教によつて代表されるのであるが、この開祖は我國宗教改革の第一人者たる法然その人である。法然は美作の人、幼名を勢至丸といつた。九歳のとき父時國は源定明といふものの爲に殺された。最後のとき勢至丸に「凡て前世の因縁であるから復讐を思ひ止まり出家となりて菩提を弔へ。」といふ意味の遺言をした。勢至丸は父の遺志を奉じて、菩提寺の叔父觀覺を尋ねて出家した。觀覺は其の器量の非凡なるを見て、

「進上大聖文珠の像一軀」の書狀と共に叡山の持法房源光のもとに送つて修業せしめた。これから南北諸宗の學者を問ひ、佛教の研究に没頭し、遂に「智慧第一法然房」と稱され諸宗の學者に驚嘆さるるに至つた。しかし法然の求めたものは學問でなくて、「我が身に堪へたる法やある」との味讀であり、身證であつた。そして一切經を五度繰返して遂に、善道大師觀經疏の中に、安住の地を見出したのである。郷關を出てから前後三十年、始めてここに求めてゐた道を發見したのである。念

佛宗を勤める爲に東山吉水に移つて、新宗の教意を弘めた。腐敗せる舊佛教に革新の巨彈を投じたわけである。これは我國に於ける宗教改革とも見るべくルーテルの宗教改革に先だつこと四百年である。

時恰も民衆が新たな宗教による安心立命を要望してゐる時であつたから、法然の念佛宗は非常な勢で弘まつた。上は皇室を始め、尼將軍政子、關白九條兼實、熊谷直實等の歸依者を生じた。この目醒しい成功は、在來の無自覺的な僧侶の怨嫉の的となつた。當然宗教改革者に付きものの迫害がおしよせて、建永二年、七十五歳の老の身で土佐に遠流さるることになつた。配所にあること五ヶ年で歸洛を許され、八十歳で入滅した。入滅後も迫害の爲遺骸の置き所に苦んだ程である。しかし眞生命あるものは決して亡びない。法然の自由な新宗教は、教權中心の舊佛教を壓倒して、現に據として輝いてゐる。

二、淨土宗の教義 法然は極めて深い自省の人であつた。當時の名僧智識が名利の念に煩はされて、己を省るを忘れてゐたとき「凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし。たとへば猿猴の枝につたふが如し。まことに散亂して動じやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智、なによりてかおこらんや。若無漏の智劍なくば、いかでか惡業煩惱のきづなをたゝんや。惡業煩惱のきづなをたゝすば、なんど生死繫縛の身を解脱することを得んや。かなしきかな、かなしきかな。いかがせん、いかがせ

ん。」と深刻な反省に心を痛めてをる。そして「ここに我等ごときは、すでに戒定慧の三學の器にあらず。この三學のほかは、我心に相應する法門ありや。我身に堪へたる修業やあると。よろづの智者にもとめ、諸の學者にとぶらひしに、をしふるに人もなく、しめすに聲もなし。」と、即ち愚かな己の救はるべき教へを求めて歩いたけれども、求めるものは見出されなかつたのである。ところがそのとき偶然目に觸れたのが源信の著往生要集である。

往生要集は世紀末的な時代相を觀取して、此の末法の世では、天台・眞宗の諸宗のやうなむづかしい教では人を救ふことが出來ない。それで善導の示した念佛の易行道によらねばならぬと考へ、「佛は念佛の衆生を攝取して捨てたまはぬ。我もその攝取の中にあるけれども、煩惱眼だから見る事が出來ない。しかも大悲はものうきことなく、常に我身を照されてゐる。」と阿彌陀佛の大慈大悲を讚嘆し更に現世の地獄相と淨土とをくらべてゐる。淨土宗の發達に忘れてならぬ事である。

法然はこの往生要集の依據してをる善導の思想を研究した。善導の著觀經疏の中に、「一心に専ら彌陀の名號を念じて、行往坐臥に時節の久近を問はず、念々捨てざる者は、是を正定の業と名づく、彼の佛の願に順するが故に。」とある。長い間求めてゐたものを得て、法然はここに淨土宗の立脚地を見したのである。即ち佛陀の四十八願中の第十八願に、「設ひ我佛を得んに、十方の衆生至心に信樂して我國に生れんと欲し、乃至十念せんに、若し生れずば正覺を取らじ、唯五逆と正法を誹謗せんとを

ば除かん。」とあるのを根據として、淨土宗を開いたのである。

つまり法然の淨土宗の教義は、大無量壽經にある佛の第十八願を信じて微盡も疑ふことなく、念佛を唱ふるものは、十人は十人、百人は百人悉く淨土に生れる事が出來るといふにあるのである。其他に別に理窟も仔細もない。勿論むづかしい哲學的解釋を要しないのである。如何にも單純な教義ではあるが、これに到達するには、當代知慧第一の法然をして、なほ三十箇年の長い苦心と體驗とを要したのである。剩さへ住蓮・安樂等の愛弟子の死刑の鮮血と、土佐遠流との犠牲とを拂つて贖ひ得たるものである事を思ふとき、此の單純な教義の中に人類救済の熱烈なる念願を見出すことができるのである。

實に淨土教は法然の豊かな體驗から生れた民衆救済を目的とする平民的宗教である。戰亂攻伐を事とし、教化活動の何等見るべきものない中世に於て、敵味方を別ちなく抱擁し、一般民衆を教化して實に偉大な影響を與へたのである。我々教育史の研究に當つて、斯かる隠れたる、國民教化活動の事實を忘れてはならない。(勅修法然上人傳參照)

第三、眞宗と平民教化 一、親鸞と眞宗 淨土教の開祖法然の遺鉢を継ぎ、之を發展せしめて眞の日本的佛敎、平民教化の宗教たる眞宗を開いたのは、我佛敎界の巨人親鸞その人である。親鸞は高

倉天皇の承安三年四月の出生で、父は時の皇太后宮大進日野有範、母を吉光女といふ。四歳で父を亡ひ、八歳で頼りとする母を亡ひ、深く人生の悲みを味つた。剃髪して範安と稱し、叡山の竹林房靜嚴僧都に就いて佛學を研究した。其の白熱的な精勵努力によつて二十三歳の秋には、天台、眞言の奥義はもとより、法相宗、三論宗、律宗、俱舍宗等各宗の教理、大乘小乗の教觀、顯教密教の要領等の凡ゆる方面に精通した。學力優秀の爲少僧都となり、青光院の門跡に任ぜられた。

理論から理論へ、宗派から宗派へ、哲學的思索から瞑想三昧への生活は、門跡の地位を贏ち得る程の知識は得たが、自省の鋭い親鸞は自己の内奥を沈視して、頼るべき何物も發見することが出来なかつた。そして迷へる自分の淋しい姿を凝視して、悲痛な焦燥を感じざるを得なかつた。のみならず源平争奪に徒らに罪業を重ねて行く社會を見、敗類に傾いた宗教界の前途を思ふては、もうじつとしては居られなくなつた。熱烈な求道精神と社會教化の大勇猛心とは、遂に六角堂百日の參籠祈願となつた。丁度滿願の夜夢のうちに觀世音が現れて、「無明長夜の燈炬、生死大海に於ける船筏は吉水に赴いて求めよ。」と告げられた。當時吉水には淨土宗の法然がゐたから、親鸞は直に叡山を下つて法然の門を尋ねた。質素な法衣を着けた法然の他力易教の法門を説く一句一句が、親鸞の肺肝に徹した。久しい間搜し求めてゐた新生命に觸れた親鸞の信仰生活は、二十九歳を一轉機として變化した。思へば二十九歳は佛陀の入山せられた因縁のある歳であつた。

間もなく親鸞は師法然の獎めによつて、前關白九條兼實の末女玉日姫と結婚し、岡崎の草庵に家庭を作つて、傳統的な僧侶の無妻主義を破壊した。この佛教始まつて以來の一大改革は、眼に南都北嶺を空し、胸に名利の二字を斷つたものでなくてはなし能はぬ所である。承元元年念佛宗の禁止にあつて、法然は土佐に、親鸞は越後に、死一等を減じて流された。この配所の孤獨の生活は、念佛のまことの意味を見出す機縁となり、素朴な民衆を教化するに至る動機となつて、親鸞の生活の第二の轉向であつた。五年の後勅免があつたが京に歸らず、常陸の國稻田に止まつて、教行信證文類を選述して眞宗開宗の軌範とされた。後京都に歸り社會をはなれ、老の身を忘れて經典の研究に勤め、弘長二年に九十歳を以て入寂した。遺骨を大谷に藏め、末女覺信尼が守つてゐたが、龜山天皇から久遠實成阿彌陀本願寺の號を賜つた。これが本願寺の起源である。

二、眞宗の教義 淨土眞宗は開祖親鸞が、印度の龍樹、天親、支那の曇鸞、道綽、善導、日本の源信法然の七高僧の説を論釋し、更に自己の深き體驗を加へて大成した宗派である。而してその依據する經典は、大無量壽經、阿彌陀經の所謂淨土三部經である。

親鸞は佛教各宗を批判的に觀察して、之を聖道門（難行道）と淨土門（易行道）とに大別した。聖道門とは佛陀が悟つた方法と知慧とを示して、衆生をも亦斯くの如く修行せしめて悟らせようとする教門であつて、自力の教である。淨土門とは佛陀の大慈悲心と、其の衆生救濟の權能力を示して、以

て衆生をして自力を捨てさせ、偏に佛の力に依憑せしめる教門で、他力の教である。又淨土門に方便教と眞實教との二種を區別した。方便教とは半他力の教で、眞實教とは絶對他力の教である。眞宗はこの絶對他力の眞實教である。眞宗といふのもこの眞實教の意味である。

親鸞の思想即ち眞宗の教義は、其の著教行信證、及び唯圓の編したと傳へらるる歎異鈔に最もよく表現されてゐる。教行信證の中で最も重要なものは、廻向といふ思想である。一般に廻向と言へば、佛に供養する事であるが、親鸞に於てはまるで反對で、佛から賜つた力を意味するのである。この廻向に往相廻向と還相廻向との二種がある。

往相廻向とは、佛から賜つた淨土に往生する力であつて、これには教行信證の四つがある。教とは大無量壽經のことである。『それ眞實の教を顯さば大無量壽經是なり。此の經の大意は彌陀尊を超發して廣く法藏を開きて凡小を哀んで功德の寶を施すことを致す。』と教の卷に説いてゐる。行とは彌陀の名號即ち南無阿彌陀佛を唱ふることである。信とは佛陀の本願力を毫毫も疑はない事である。佛の救濟を信することである。この事は實に容易でない。この信の獲得には、煩惱の塊であるあさましい自己を顧み、社會に於ける自己の罪業を内觀し、永遠に業苦より離るることの出来ない我に當面しなければならぬ。『悲哉、愚禿親鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入る事によるこぼす、眞證の證にちかづく事をたのしみます。』といふ深い悲痛な反省が、『念佛して地獄に墮ちた

りともさらに後悔すべからず候。』といふ親鸞の金剛不壞の信仰を生むのである。最後に證とは淨土往生を證する意味で、教行信が得らるればその果として當然到達する正定聚の境地即ち生死の因果を超越せる涅槃が得られるのである。

以上は往相廻向に就いて述べたのであるが、還相廻向とは一度佛陀に救濟されたものが、再び此の惱みの現世に立歸つて、今度は他人を教化することである。この利他教化たる還相廻向も、やはり佛陀から賜つた力である。親鸞が個人の救濟のみを説かず、眞宗信仰の半面には、還相廻向としての社會教化を含んでゐる事を説いたのは、佛敎が單なる死後の問題でないことを明にしたものである。

なほ歎異鈔には『親鸞に於ては『ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし』とよき人の仰を被りて信するほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土に生きるたねにてやはんべらん。また地獄に墮つべき業にてやはんべらん。總じても存知せざるなり。たとひ法然上人に賺まされまゐらせて念佛して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候。その故は自餘の行を勵みても佛になるべかりける身が念佛を申して地獄に墮ち候はゞこそ「賺されたてまつりて」といふ後悔も候はぬ、いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし。』と述懐してゐる。

『淨土へいそぎ参りたき心の無くて、いさゝか所勞のこともあれば「死なんするやらん」と心細くおぼゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫より今まで流轉せる苦惱の齋う里は棄て難く、未だ生れざる安養

の淨土は戀しからず候ふこと、まことによく／＼煩惱の興盛に候ふにこそ。名殘惜しく思へども、娑婆の緣盡きて力なくして終るときに彼の土へは參るべきなり。いそぎ參りたき心なき者をことに憫みたまふなり。これにつけてこそいよく大悲大願は頼しく往生は決定と存じ候。」とも述べてをる。

要するに眞宗は先づ己自身を知る事に出發する。己の罪業深く助かるべからざるを自覺し、ことに彌陀の本願の勅命に無條件に信賴するにあるのである。而かも己の罪業を自覺するの佛陀の力と見るのである。徹底的に否定の道を歩み、佛陀の懷に大なる肯定を見出さんとする教である。

三、眞宗と國民教化 親鸞は宗教を説きながら、國家的、國民的の自覺を決して忘れなかつた。我日本主義の佛敎家聖徳太子を、和國の教主と仰いでゐるのも、その理想に共通のものがあつたからであらう。又既に述べたやうに還相廻向を説いて、宗教の使命が一面現世の國家活動・社會教化にある旨を明にした。そして「朝家の御爲國民の爲に念佛申さるるは目出度候といひ、又「王法を以て表とし、内心には他力の信心をふかく著へて世間の仁義を本とすべし。これ當流に定むる所のおきての趣なり。」といひ又「外には王法を本とし、諸神諸佛菩薩を輕しめず、又諸法を謗せず、國とところにあらば守護地頭に向きては疎略なく、限りある年貢所當をつぶさに沙汰をいたし、其他仁義をもて本とし云々。」と述べてをる。

斯くの如く親鸞の宗教は、一面國民教化の宗教であつた。教育の素養のない、殆ど自然人の如く生

活せる地方民に、千辛萬酸の苦をなめて教化すること實に二十有五年間、如何に國民教化に貢献したかは、察するに難くない。(淨土眞宗聖典參照)

第四、國家的宗教日蓮宗 一、日蓮と日蓮宗 渺茫限りない太平洋を前に控へた安房國は、宗教界の英雄日蓮の故郷である。一旦鎌倉に出て修業した日蓮は、故里に歸つて禪定を始めた。それが終ると清澄山上の初夏の黎明に立つて、南無妙法蓮華經を大呼して法戰の途に上つた。目ざすところは當時宗教の中心地鎌倉である。鎌倉に出た日蓮は、諸宗を向ふに廻して、路傍に立つて堂々と所信を述べた。日蓮によれば、佛陀一代の教説は法華經に集められてある。法華經こそ唯一最高の眞理を傳へてをるもの、末法の世に衆生を救ひ得るものは只これのみであると。そして念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊の格言を掲げて激しく他宗を排撃した。時に偶々暴風雨、洪水、大飢饉等が相繼いで起つた。日蓮は是等の世相を佛典によつて批判し、「守護國家論」、「立正安國論」の二書を著し、爲政者の反省を促すべく、北條時頼に献じた。

立正安國論は「今日の災厄禍害は、釋尊の本旨に背いた諸宗が跋扈するからである。凡ての諸宗を排斥して、法華一乘の妙法を信じないと、諸佛諸神に見離されて、必ず國難が來るであらうことは諸經文が正證してをる。」といふ意味の豫言書である。これ等の爲に或は放火され、或は伊豆伊東に流され、或は遊撃される等の迫害が絶えなかつた。龍の口の法難に遭ふても、法華の行者、日本の眼目と

して實に泰然自若たりしは、如何に其の信念の強かつたかを物語つてをる。龍の口では幸ひ双難を免れたが、更に佐渡に流されて苦しめられた。

しかし蒙古の襲來等、日蓮の豫言が適中し、國難が迫つたので、幕府も彼の流罪を赦した。日蓮はなほも根氣よく幕府に警告を試みたが、其の甲斐はなかつた。後に甲斐の身延山の草庵に入つて、六十一歳で入寂した。其の一生は實に迫害に對する奮闘の血潮で彩られてをる。

二、日蓮宗の教義 日蓮は宗教的には、諸宗分派の混亂を廢して、佛陀の正系に復歸しようとしたものであつて、當時の新興諸佛と同じく民衆的色彩を有する。又國家的方面では、常に日本の國體・國性を擁護し、日本をして世界宗教の本山たらしめんとの大理想を抱き、世界の帝王が日本に來て戒を受くべき大乘戒壇を富士山上に作らうとしたのである。蒙古の使の來た頃、彼は富士山に登つて、自筆の法華經を埋めて來たものである。つまり日蓮の宗教は徹底した國家主義の宗教であつた。

日蓮宗の教義は、五知判、三大秘法、一念三千等の説によつて窺ふことが出来る。五知判とは教・機・時・國・序の總稱であつて、哲學的、心理學的、社會學的根據から、教化の次第方法を明にしたものである。教とは大乘小乗權實等の區別である。日蓮は是等の中で法華經のみが、眞實純粹に釋迦の本旨を傳へたものなることを、哲學的に闡明したのである。機とは會衆の機根、換言すれば民

衆の心理狀態の考察である。日蓮は人が皆善根を持つてゐると考へて、其の善根を發現さすべき機に向つて正法を説いたのである。時とは時代の區別である。日蓮は當時を末法濁惡の世と觀じ、之を救ふものは法華經のみだと確信したのである。國とは國土人民の性質のことである。日蓮は日本國には日本國に適當した教法でなければならぬと考へた。増加論に『東方に小國があつて唯大乘の種性のみで滿されてゐる。』とある國が我日本であると見、法華一乘の妙法が當然具通さるべき世界唯一の文化國は我日本であるとした。序とはその國に在來存在した教法の性質に應じて、之に對する覺悟と方策とを定むる事である。

次に三大秘法とは日蓮宗の信仰の中心點を分類したものであつて、本尊・題目・戒壇の三つである。第一の本尊とは信仰の標的たる人格を意味するもので、つまり佛陀の事である。しかし日蓮の本尊とする佛陀は、宇宙最高絶對の眞理にして、此の娑婆世界の教主として出現せる法華經壽量品の佛陀である。第二の題目とは信仰内容たる眞理のことである。これは形より云はば、南無妙法蓮華經の七字である。第三の戒壇とは信仰の團結にして源泉である教會のことである。日本に於て王法と佛法とが相一致冥合したとき、世界の中心として最勝の地に建立せらるべき大本山のことである。

最後に一念三千論を説明しようと思ふが、これは仲々面倒である。要點をつまんで言へば、我々の一息の念慮の中に三千世界が含まれてをるといふ意味である。微細な特殊現象の中にも、宇宙に遍滿

する理法が含まれてゐるといふ。所謂現象即實在論、佛教の言葉に依れば、諸法實相を説明したものである。これを分り易くする爲には、十界互具、十如是、三世間を一通り説明せねばならぬ。

十界互具の思想は華嚴經に出てゐる。即ち宇宙には、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界がある。始めの六は凡、後の四は聖であるから六凡四聖といふ。そして各世界には皆他の九界を含んでゐる。例へば人間には畜生や餓鬼の性質もあれば、菩薩や佛の面影を存する部分もあるやうなものである。それで餓鬼・畜生のやうな迷ふてをるものでも、その中の佛性を顯現するように一念を起すと、遂には解脱して佛となる事が出来る。然るに菩薩でも墮落すれば地獄に落ちるのである。これが十界互具の思想で、十界が各の十界を有するから百界となるわけである。

十如是とは法華經に出てゐる思想であつて、相(すがた)、性(固有の本性)、體(もの自ら)、力(潜在的勢力)、作(作業所謂顯在的勢力)、因(直接原因)、緣(間接原因)、果(結果)、報(本のむくひ)、本末究竟(前九者を貫く原理)の十をいふのである。如是とは、このとほり違はぬといふ意味である。前に述べた百界が各悉くこの十如是をそなえてをるのであるから、つまり千界できるわけである。然るになほ三種の世間があるから、千界掛ける三でここに三千世界が生ずるわけである。

而して萬有森羅萬法其の一を取つても、そは悉く、三千世界を具足してをる。この眞理を體驗するには、自己の心識を觀するが最もよい方法である。日蓮はこの一念三千の哲理を體驗して、日本の宗

教建設の爲に奮闘したのである。日蓮は自己の法華妙法の一念によつて、三千世界を動かさんとしたものである、とも見ることが出来る。其の愛國の至情に至りては、他の宗教家に見る事の出来ない崇高さがある。

(注意) 從來の日本教育史に於ては新興佛教の民衆社會教育の事實が軽く見られてゐたやうに思ふが、これは一考すべきものと思ふ。

第四節 勤王思想の發達

中世の後半は、争亂に次々に争亂、我國未だ會つて見ざる劍戟の修羅場を現出した。かくて思想史上に言はれる暗黒時代とはなつたのである。然るに此の暗黒の間の中から、我國民道德の精粹たる勤王思想が、黎明の微光を放ち始めたのである。鎌倉武士の間に發達した武士道は、我國特有のものであつたにせよ、それは自分の主人に仕へる主従關係の道德であつて、一般臣民の天皇に對し奉る臣道と寧ろ相反する場合がないではなかつた。然るに中世の後半に發達した勤王思想は、純粹無雜の忠道であつて、我國民道德の精粹をなすものである。

一、勤王思想勃興の動因 勤王思想勃興の動因を一言にすれば、國家的自覺にあると思ふ。即ち變態的な武家政治に對する自覺、外國襲來に對する國家的自覺、南北正閏問題に伴ふ國民的自覺等を數ふ

ることが出来るかと思ふ。當時北條氏は一階臣に過ぎず、官は五位の國守より以上には昇らずして、而かも政權・兵權を掌握し、將軍の廢立を意の如くするは勿論、至尊の登極の議にさへ容喙するに至つた。即ち持明院・大覺寺兩堂の交立の如きは彼れの取計であつた。斯くの如き跳梁跋扈は到底許すべからざる事蹟である。

時偶々蒙古の襲來といふ大事件が起り、其の爲幕府は財政の窮乏に瀕し、徳政を敷くに至つた。其の結果太平であつた時代に、社會的な不安の風波が漂ひ始めた。泰時・時頼・時宗の時代はまだよかつたが、無道な高時に至つて天下の人望は離れてしまつた。後醍醐天皇の討幕の事を聞くと、北條氏を討伐すべく勤王の諸將が崛起した。一身一家の私事を顧みず、吉野朝廷擁護の爲に、奮闘力戦したその忠誠は、長く國民に生きた教訓を傳へてゐる。

二、勤王思想の發達(其一) 1 楠公父子の勤王 楠公父子の忠勇の物語り程、人口に膾炙され、國民の腦裏に深く浸潤されてゐるものは、他に多くない。而かも永遠に日本國民への精神的糧である。

正成は後醍醐天皇に「正成未だ生きて在りと聞召され候はば、聖運遂に開かるべし。」と奉答してゐる。天子の運命を一身に負ふたる、其の抱負の偉大さ、百折撓まぬ堅忍不拔の大精神を以て、朝敵に當つたのである。湊川の戦に臨むに際し、戦死を覚悟して「汝幼しと雖も已に十歳を過ぎたり。猶よく吾が言を記せん。今日の役は天下安危の決する所なり。意ふに吾復び汝を見ざらん。汝吾已に戦死すと

聞かば、則ち天下は盡く足利氏に歸する知るべきなり。慎んで禍福を計較し、利に向ひ義を忘れ、以て乃父の忠を廢すること勿れ。苟も我の族諱にして一人の存する者あらしめば、則ち率ゐて以て金剛山の舊址を守り、身を以て國に殉じ、死することありて他なかれ。汝が我に報ずる所以は、此より大なるはなし。」(日本外史)と櫻井の驛で正行を訓誡した。そして湊川に奮戦し七度生れて賊を亡さんと弟正季と言ひ交して戦死したのである。

正行も父の遺訓を奉じて、吉野朝廷を護り、四條畷に戦死した。我國民道德の理想忠孝兩全を正行に見る事が出来る。正成の君に對する自覺といひ、正行に與へた遺訓といひ、正行の忠孝といひ、永遠に我國民に活教訓を與へてゐる。

2 北畠親房の勤王 親房は吉野朝廷建設の第一殊勳者である。東國を經營したり、大規模で京都回復を策したりして、尊氏をして一日も意を安んずることを得ざらしめたのみならず、後村上天皇の御即位の初には、戦陣にありながら神皇正統紀及び職原抄を著して、大義名分を明にし、又政治の改良に資したのである。殊に神皇正統紀は、天下の政治を統べさせられる天皇に對し率つて、帝王學の意義を史論上から闡明し、萬世一系の我國體の尊嚴なることを明にし、更に大義名分を正したもので、親房の肺腑から出た忠誠の叫びである。勤王思想の發達に於て親房の功績を没してはならない。

3 菊地氏の勤王 菊地氏一族の勤王も特筆すべきものがある。南朝の忠臣菊地寂阿入道武時が九州探

題北條英時を攻めて、將に攻め落さうとしたとき、小貳妙慧と大友具簡が前約に背いて、六千騎を將ひ來つて、英時を援けたので、寂阿入道は嫡子武重を召して、次の訓誡を與へて肥後に歸した。

「我少貳・大友に出抜かれて、戦場の死に赴くといへ共、義の當る所を思ふ故に、命を隕トさん事を悔いず。然れば寂阿に於ては、英時が城を枕にして討死すべし。汝は急ぎ我館へ歸つて、城を堅うし兵を起して、我生前の恨を死後に報ぜよ。」とそして和歌一首を故郷に送らせた。「故郷に今夜計りの命とも知らでや人の我を待つらん」(太平記)

この訣別は悲壯凄絶なること楠公櫻井の訣別に髣髴たるものがある。武重は遺訓を奉じて歸り、弟武光と共に懷良親王を奉じて、小貳・大友・島津を下して、父の怨を晴らし、九州を平定した。頼山陽は當時を回想してこう歌つた。「當時國賊鴟張を擅にし、七道風を望んで豺狼を助く、勤王の諸將前後に没し、西陲僅に存す臣武光、遺詔の哀痛猶未だ耳にあり、龍種を擁護して生死を同じうせん、大舉來りて犯す彼何人ぞ、誓つて之を剪滅して天子に報ぜん、河は軍聲を亂して銜枚カシバに代り、刀戟相摩す八千の師、馬傷き冑破れ氣益奮ふ、敵を斬り冑を取り馬を奪ひて騎す、箭を被ること蝟の如く目皆裂く、六萬の賊軍終に挫折す。」

又武光は明使と折衝して、我國家の體面を保つた。これ等菊地一族の精忠無比の精神は、楠氏に比して決して遜色がない。世人が菊地氏一族の功績に、あまり注意しないのは甚だ遺憾なことである。

4 新田・名和氏の勤王 新田義貞は、皇太子恒良親王を奉じて、北國經略に出發の際、日吉の權現に參拜して誓詞を述べてをる。「臣苟も和光の御願を憑んで日を送り、逆縁を結ぶこと日已に久し、願くは征露萬里の未迄も、擁護の御眸を廻らされ、再び大軍を起し、朝敵を亡す力を加へ給へ、我縱不幸にして、命の中に此望を達せずと云ふ共、祈念冥慮に違はずば、子孫の中に必ず大軍を起す者有つて、父祖の尸を清めん事を請ふ。此の二の内一も達すことを得ば、末葉永く當社の檀度と成つて、靈光を耀し奉るべし。」これを見ても義貞の忠誠の程が知られるであらう。

なほ名和氏一族の勤王の精神に厚かつた事も忘れてはならない。

三、勤王思想の發達(其二) 吉野朝廷擁護の任に自ら當つてをつた勤王の諸將は已に没し、世は足利幕府の時代となつた。そして下剋上のあさましい時代が現れて、戦亂攻伐が相繼いだ。また享徳年間には飢饉が續いて、餓死する者も多かつた。而かも室町將軍は奢侈贅澤に日を送つた。上皇室は恐れ多い事ながら、御即位の大禮を行ふことが出来ない程の御衰微であつた。後柏原天皇のときには本願寺から、後奈良天皇のときには大内義隆から、正親町天皇のときは毛利元就から、各費用を献じて御即位の大禮を營なまれたといふ事である。この御衰微を回復し奉らんとした英雄が、織田信長と豊臣秀吉であつた。

1 織田信長の勤王 信長の父信秀は敬神・尊王の念が厚かつた。信長も父の意志を承け、熱田神宮等の

修造を行つて敬神事業に力を入れた。永祿五年には正親町天皇から、皇居修理や御料のことについて密勅を賜つた。彼は上洛して、二條城を修葺し、供御を献じ、御料の兼併の禁止を嚴重に布告した。そこで豪族は信長の力に恐れて、兼併してゐた御料を還し奉るやうになつて、御收入も増加し、朝威が再び輝くやうになつた。信長はなほ皇居の修理、宮中諸節會の復興等に盡すところが多かつた。

2 豊臣秀吉の勤王 秀吉は信長の意志をついで、敬神・尊王の心に厚かつた。兵政の權を握ると、伊勢神宮を御造營申し上げ、禁裡を修營し、仙洞御所を築營申し上げて、諸種の朝儀を復興し、皇室の御禮を始めて古に復する事が出来た。又聚樂第を築造し、天正十六年四月には御陽成天皇の御臨幸を仰ぎ奉り、歡慮を慰め奉つた。なほ金子及び米穀を献じ、朝臣一同へも過分の引出物を贈つた。

以上の信長・秀吉の勤王の裏面には、自己の權勢擴張の心も幾分働いてゐたらしい。徳川時代の儒者で秀吉を誹つてゐるものもある位である。此の點で吉野朝廷時代の勤王家の精神に、及ばぬ事達きも、天下を統一した權力者が、自ら陣頭に立つて、勤王の模範を示した事は、一般に大なる影響を與へたのである。(本多辰次郎博士勤王思想の發達参照)

第五節 學校教育

中世は文教の暗黒時代であつたといはれるものの、其の中に萬葉草中紅一點の觀があるのは、足利學校と金澤文庫とに於ける學校教育である。なほ基督教の傳來に伴つて、外國人の手によつて學校教育が行はれた事も注意すべき事である。

一、足利學校 足利學校の起原については三種の異説がある。第一は小野篁の創立といふ説で、鎌倉草紙や、和漢三才圖繪に見出される。第二は國學の趾であるといふ説で、足利の人川上廣樹氏が共著足利學校事蹟考に述べてゐるところである。文部省の日本教育史略にも國學の遺制たること疑なしとのべてある。第三は足利義兼の創立といふ説で、篠崎維章氏の東海談に言ふところである。其の眞否を決定する資料に乏しいから、何れとも言ひ得ないが、現今では足利義兼の創建といふ説が多く信ぜられてゐる。義兼は頼朝の從弟であつて、父義康はその領有してゐた足利庄を朝廷に献じ、自ら領主とし此の庄を支配した。其の爲に父子共藏人に任せられ屢々京師に上洛した。おそらくその關係で都の文化を取り入れ、自分の屋敷内に學問所を造つて、一族子弟の勉學に供したのであらう。當時の學校は政所にあつたのであるが、應永元年今のところに移した。その遺跡は今も下野國足利町にあつて校地は今の小學校になつて、文庫は今の圖書館となつてゐる。

永享十一年に至つて上杉憲實が關東管領となるや、其の封内にあつて京及鎌倉兩公方始祖の出た地であつたから、學校を改造し、五經を納め、學田を付し、京都建仁寺の僧快元を校主に招き、儒學を

教授せしめた。これから代々僧侶が校主となつた。しかし佛書は講じない定であつた。戦國争亂の時代にも此の學校は甚だ盛んで、海内唯一の學校の觀を呈した。殊に第七代の校主九華和尚の如きは、此の學校にある事前後三十年、其間に教を受けた弟子は三千人に達したといふ。九華は六十一歳から十一年間に、周易の講義一百日の會を起すこと十六回に及んだ。また九代の校主閑室三要是、常に徳川將軍家康の座右に侍して殊遇を受け、學田百石書籍數部活字數萬を賜つてをる。寛政五年廿二代の校主謙堂のとき、幕府は僧侶の教學を解き、新に學規を定め、時習館と改稱した。明治元年舊藩守戸田忠行が政府に建言して求道館と改稱し、支那學を修めしめる事になつたが、明治五年の廢藩と學制頒布に及んで閉校した。

足利學校は戦國争亂の中にあつて、よく文教の命脈を維持し、多くの人々を教化した。足利學校ありて、我中世に學校教育ありと言ひ得るのであつて、我國教育史上を飾る一の偉觀である。なほ今日傳ふるところの三十八部三百五十餘冊の書籍は皆な世に得難き貴重な珍本である。その中には足利學校で印刷したものもある。七經孟子考文補遺の如き印刷本は、支那の乾隆帝に送られて、四庫全書の一部に加へられてをり、論語皇侃の義疏が傳つたのも足利學校が印刷して保存したからである。(文部省日本教育史略参照)

二、金澤文庫 金澤文庫は武藏國久良岐郡金澤の稱名寺境内にあつた。北條氏は代々學問を好んだ。

尼將軍政子は、菅原爲長に貞觀政要を國字に譯せしめ、政務の法則とした。時政の孫泰時は貞永式目を定め民事に心を注ぎ、文士を招いて政務を論じ、子孫に戒めて曰く、「治をなすは文による汝等宜しく意を留むべし。」と、それで一族は學問に興味を持つた。泰時の弟に實泰があり、實泰の子に實時がある。實時は文永元年越訴奉行となつて金澤の地を領した。金澤文庫は其の子顯時が建つところであると言はれてゐるが、其基礎は實時のときに出来てゐたものに違ひない。それを顯時が完成したのである。北條氏の一族及び諸將の子弟が此處で學習した。庫中には和漢の書籍を集め、儒書は黒印を押し、佛書には朱印を押しして區別したといふ。顯時の子貞時も學問を好み、明經の大家清原教隆を京都から招いて、群書治要を講ぜしめ、中原師光を師として左傳を學んだと言ふから、文庫の發達にも力を盡した事が知られる。其の子貞將が、新田義貞と戦つて戦死したのみならず、北條氏も亡ぼされ學校も亦頽敗した。上杉憲實が關東管領となるに及んで、足利學校同様修理し、書籍を納めて、學徒の勉學の場所たらしめた。其の後の興廢については、詳細に知るべき材料がないが、徳川家康が富士見文庫を設立したとき、金澤の文庫から珍籍を移したと傳へられる。富士見文庫の藏本は内閣文庫に入つてをる。しかし金澤文庫本はそれ以外に散佚してをるものが多いのである。(文部省日本教育史略参照)

三、基督教の學校 天文十八年(皇紀二二〇九)西紀一五四九)フランシスコ・ザヴィエル (St. Francisco Xavier 150

8—1552) は鹿兒島に初めて基督教を傳へた。當時の基督教は、イグナチウス・ロヨラ (Ignatius Loyola 1491—1556) の創めたエスイタ教で基督舊教であつた。ザヴィエルは巴里大學で修學しロヨラと相知り、協力してエススの仲間といふ宗教改革に反對の團體を組織し、協力して布教傳導に従事した。これが耶蘇會のはじめである。ザヴィエルは東洋にまで傳導に出かけたのである。日本に案内したのは、日本人ハンシロウである。先づ島津貴久から布教の許しを得て傳導し、平戸山口を経て天文廿年には京都に入つた。そして朝廷幕府の許可を受けようとしたのであるが、その衰頹を見て效なきを知つて、山口に引き返し、豊後の府内(今の大分)に入り、領主大友宗麟の殊遇を受け、支那傳導に渡る途中歿した。其の死後はコスメ・デ・トルレス (Cosme de Torres) や、アレサンドロ・フリニヤ (Alessandro Valignani) 等が熱心に布教傳導に従事し、次第に各地に弘まつた。殊に九州はその中心で、わけても大友宗麟、大村純忠、有馬晴信等は熱烈な信者であつた。斯くて次第に盛んになるにつれて、日本人宣教師の必要を感じ、各所に基督教の學校が建てられるやうになつた。

大友の領地臼杵にはカサ・プロフェッサ (Casa Professa)、府内(大分)にはコレジオ (Collegio) が建てられた。各十六名宛の生徒を收容して、宣教師を養成したのである。この教育が大なる効果を收めたと見えて、臼杵に於ては宗麟配下の武將が三十餘名洗禮を受け、一般平民の洗禮を受くるものに至つては幾何なるかを知らぬ。と日本西教史に見えてをる。惜しい哉大友氏滅亡と共にその基督學校

の遺跡も亡んで今は跡片もない。又肥前の有馬、近江の安土にはセミナリオ (Seminario) といふ基督教の學校が建てられた。各二十五六人の貴族青年を收容して教育したものである。

然るに天正十五年に至つて、秀吉は宣教師に退去命令を發した。その爲に安土のセミナリオは解散となり、有馬のモミナリオは加律佐に移轉する事になつた。なほ秀吉の禁止の手は延んで、有馬、大村、平戸の百三十七の基督教寺院は破壊せられるに至つた。徳川氏の時代に至つて、迫害は漸く厳しく殉教の徒も次第に數を増した。家光に至つて、島原の亂後基督教は宗門の剽滅に遭ひ、基督教は表面跡を絶つに至つた。其の活動期間は六七十年に過ぎなかつたが、内面的には一部の國民に極めて深刻な感化影響を與へたのである。

〔問題〕

一、左について記せ。(大九本)

綱井平洲。イグナチウス・ロヨラ。コンドルセー。ベル・ランカスター。

第六節 寺院の教育

中世が暗黒時代であるとよばれるが、實は其の語は當らない。なぜかなら、一般社會に於ける學問は衰頹したとはいへ、僧侶の間には前代に優るとも劣らぬ學者思想家がゐたからである。これ等の僧

侶は當時に於ける唯一の學者であり教育家であつた。鎌倉時代の僧侶に就ては既に述べたから、ここでは室町時代のそれについて述べる。此の時代の僧侶は佛教と共に儒教を説き、社會を教化すると共に子弟を導びいた。その代表者は僧玄慧と五山の學僧達である。

一、僧玄慧の事績 玄慧は天台の傑出せる學僧である。才學無雙の噂が禁裏に聞へ、後醍醐天皇は召して侍講とせられた。玄慧は程朱の説によつて四書を進講し奉つた。程朱の學を移入したのは、一山一寧國師であるが、之を一般に弘めたのは玄慧である。一般に玄慧を朱子學の祖といふのはこの故である。ここに玄慧の第一の功績がある。第二の功績はその門に、吉野朝廷建設の殊勳者、忠臣准后源親房を出したことである。藍中よりなほ藍より青きものを出すことこそ、師たるものの限りなき名譽である。第三の功績は寺小屋教育の教科書として、庶民教育に大なる影響を與へた『庭訓往來』の著者たることである。玄慧にはなほ『遊學往來』『喫茶往來』の著がある。庭訓往來は春夏秋冬の順を追ひ、年中行事についての往復手紙を集めたもので、各種の常識を養ふと同時に、習字の手本たらしめようとしたものである。

二、五山の文學 鎌倉時代には建長・圓覺・壽福・淨智・淨妙の所謂鎌倉五山が榮て、宗教學術の一大淵藪地を形成してをつた。そして鎌倉武士に偉大な感化を與へたのである。室町時代になると、之に代つて京都五山が宗教學術の中心地となつて、足利將軍の師となつたのである。京都五山とは、建仁寺

東福寺、南禪寺、天龍寺、相國寺をいふ。是等五山の僧侶は、ただ佛教を研究し佛理を説くだけでなく、他方儒教を研究し、佛儒の二教を混じて修身治國の道を説いたのである。足利義滿に四書を講じた南禪寺の義堂は「儒に在りては仁義禮智信、釋に在りては殺さず盜まらず淫せず妄せず酒せず、儒は之を五常と謂ひ、釋は之を五戒と謂ふ、其名異なりて其實同じ。」と言ひ、殆ど儒教佛教を同視してをる。しかし自ら僧侶なるを以て、「佛教は儒教を兼ねるを得、儒教は佛教を兼ねるを得ず。」と言つてをる。後の僧侶は全く儒佛を同視し、盛んに朱子學を研究したのであらう。徳川時代の朱子學者の中には雨森芳州の如く儒佛を同一視するものも出て来るが、當時五山の僧の思想には、これに類するものが多かつた。

五山の僧は斯く儒教殊に宋學を研究したのみならず、漢文漢字に長じた者も多かつた。義堂・絶海等は其の主なるものである。彼等は山内に詩會を催してゐた。此の風が流れて、幕府大名は盛んに詩會を催し、僧侶は必ず出席して指導した。當時は平安時代の唐の白氏風の繊細な體でなく、宋代の遒勁な體を學び、寧ろ平安時代を壓する氣概を示してをる。

また僧にして明に渡つて來たものには、唐以來の畫風を傳へるものがあつた。これが爲雪舟、雪村の如き名手が出て藝術方面の進歩を來した。要するに京都五山の文學は、徳川時代の文學の搖籃期をなすものである。従つて思想上注意すべきものである。

三、寺小屋教育 1 起源 鎌倉・室町時代を通じて學問が僧侶の手にあつた事は前に述べた通りである。従つて學問を習ひ度いものは寺院に行つて、僧侶に教を受けた。太田道灌の如きは、鎌倉五山で學んで五山第一の學者となつた。又織田信長・徳川家康・後の藤原惺窩・林羅山の如きも、何れも僧侶に教を受けたものである。こんな著名な人だけでなく、一般庶民も寺に行つて僧侶に教へを受けた。その起原は室町時代であらうといふ論者もあるが、鎌倉の始めの頃既に存在した事は疑ひない。僧侶にならうとする兒童が、得度する前に普通の教育を受けたり、寺院に召使はれてゐる兒童が、普通教育を受けることは古代からあつた。その後一般家庭から子弟が元服するまで寺院に預け、読み書きや躰を仕込んで貰ふやうになつた。鎌倉時代に入つて、大學・私學・國學などが衰へた關係で、寺院で教育を受けさせる事が盛になつた。室町時代に入るとなほ一層廣く普及した。就學年齢は十歳から三四年間で、多くは寺に寄宿した。入學を登山又は寺入と呼んだ。當時の儒者はこの教育を小學とか、村校とか呼んでゐた。寺小屋といふ名はまだなかつたのである。中世の寺院教育は徳川時代の寺小屋と全然同一のものではないが、両者が深い關係をもつてゐる事は事實である。この點で概念上の不都合はあるが、中世の寺院教育を寺小屋教育と呼んでおく。

2 教科書 教科書としては、伊呂波歌、實語教、童子教、庭訓往來等が重要なもので、稍進んだ程度のものである。朗詠集、貞永式目、和歌集、物語等が用ひられた。主なものを解説しておく。

◎伊呂波歌……僧空海の作と傳ふ。無常迅速の人生を四十八文字に歌いこんだもの。

◎實語教……僧空海の著といふ。山高きが故に貴からず、樹あるを以て貴とす、人肥えたるが故に貴からず、智あるを以て貴とす云々漢文で書いてある。

◎童子教……安然上人の作といふ。夫貴人の前に居りては云々と日常の心得を示し、同時に習字の手本として、運筆など示してある。

◎庭訓往來……テイキンと讀む玄慧の著、漢文で書いてある。前に述べたから説明を省す。

◎遊學往來……玄慧の著といふが疑しい。手紙文で遊學上の心得を述べたものである。

◎異制庭訓往來……著者不明僧虎關ともいふ。庭訓往來にまねたもの。

◎貴嶺問答……中山忠親著、書簡體にて有職故實を教へたもの。

◎釋氏往來……守覺法親王者、手紙で寺院の年中行事を教へたものである。

◎十二月往來……中山忠親の著ともいふが不明である、書簡文例を十二月に配したものである。

◎新十二月往來……前同。

以上は主として鎌倉時代及びそれ以前のもので、以下のものはそれより後のものである。

◎新札往來……僧眼阿の著で、漢文の書簡文の例を示すと共に常識を楚はしめんとしたものである。

◎尺素往來……一條兼良の著で前のもとの内容に類似してゐる。

◎雜筆往來……著者不明、前者の内容をいくらか平易にしたようなものである。

◎新撰類聚往來……丹峰和尚の著で、雜筆往來に類似のもの。

◎富士野往來……著者不明頼朝の富士の裾野巻狩の有様を手紙の文體で綴つたものである。

◎下學集……實語教・童子教・庭訓往來などの字句を解釋した辭典で、初學用のものである。

◎節用集……南都林宗二が作つた引きやすい字引で、我國に於ける最初のものである。

平泉澄博士はこんな往來物の種類が二十九種あつたと言つてられる。石川謙氏はその上になほ四種ほどあけてゐるから、三十種以上もあつたと思はれる。

3 教育法 學業のうちで最も力を入れたのは手習である。この手習を中心として、読みも教へるし、常識も養ふし、教訓も與へるのである。寺小屋の教科書は、庭訓往來でも實語教でも童子教でも、皆常識を養ひ、教訓を與へ、手習手本を兼ねるやうに出来てゐる。今日の新しい教授法から見れば、幼稚な程度で、習字中心の合科教授を行つてゐたとも觀察されるのである。又繪畫等の直觀的方便物も用ひられてゐた。教科書の中にも繪入のものもあつたのである。

訓練はなかなか嚴格で、朝早くより起き、手水を使ひ髪を結び、本尊を拜し先祖の靈に廻向するの目課である。學業には一心不亂に精を出させ、怠が見えると厳しく罰した。體罰も行はれてゐたらしいが、兒童は導師を怨むやうな事はなかつた。兒童は信賴する人を選んで登山し、其の許で數年間起居を共にするのであるから、師の人格的感化を受くる事が著しく、爲に師弟間の情誼恩愛は極めて

濃やかで、下山後も長く感恩の情を失はなかつた。

(問題)

一、左の人々につき知れる事を記せ。(明三一巻)

撰載。僧玄慧。畫仲舒。クインチリアン。パセドウ。

二、寺小屋教育の沿革及び状況を略述せよ。(大六本)

三、左について知れるところを記せ。(大一二本)

庭訓往來。世界圖繪。フエネロン。トーマス。アノルド。

第七節 女子教育

この時代になると女が男の家に嫁に貰はれて行く風習が盛んになつて來た。この爲に女子の地位が男子よりも低くなつた。これに佛教の女人觀や、儒教の七去三從の教が手傳つて、女子は男子より不利な位置に立つやうになつた。従つて女子の教育も次第に消極的になつて來た事は争はれぬ事實である。

先づ公家に於ける女子の教育を見るに、唯不完全な家庭教育を受けたに過ぎないのである。けれども平安時代からの習慣上、相當の年齢に達する時は、和歌の詠法や和文の読み、綴り、書きを學んだ。

それで中には仲野禪尼(定家の妹)や阿佛尼(藤原爲家の妻)の如き歌文に巧なものが出たのである。公家に於ける女子教育の精神は、恭謙を旨とし、物事を慎み、感情を外に現さず、低聲で柔和の態度をとり、貞操を以て夫に事へ、慈愛を以て奴婢に接する婦人を養成しようとするにあつた。「めのとのさうし」には次のやうに言つてをる。「思ふことをしのび、あらまほしきこと、かんにんして、さすがにうきをも、またうれしきをも、ふかう思ひ知りて、そのことなく云々。」また「乳母のふみ」には次の様に言ふてをる。「たとへ人のいみじうつらき御事候とも、色に出で、人に見えんは、はづかしかりぬべきことおぼしめして、さらぬ顔にてはありながら、さすがに、うやとは覚えて、ことすくなくなるやうに、御もてなし候へ。また嬉しう御心にあふ事とも、こと紫にうれしやありがたやなどおほせことあるまじく候。」これ等によつて、當時公家の女子教育が、如何なるものであつたか想像する事が出来るであらう。

武家の女子も學校教育を受くることなく、家庭に於て教育された。上流にては讀書習字和歌等が授けられたが、知育の點に於ては、公家の女子に劣つてゐた。しかし實踐教育に於ては遙かに公家のそれに優つてをる。武士の女子教育の理想は、貞操にして三従の教を守り、柔順の美德を有し、而かも剛健不屈の氣象を兼ね備へ、表面鈍才智愚の如くなるも其實慧敏なる女子を養成する事であつた。斯かる理想のもとに養成された武士の妻は、一朝戰の起るに及んでは、夫に代つて家政を處理し、夫をして後顧の憂なからしめたのである。頼朝の妻政子、松下禪尼、覺山禪尼等はこの代表的人物である。

當時の女子教育を今日から見れば、幾多の短所がある。知育に缺けてゐたこと、あまりに消極的であつた事、あまりに自然を無視して形式道徳を強いた事などはそれであらう。然しながら半面には眞に女性らしい奥床しさをもつてゐることは、今日のモダンガールと同日の比ではない。喧嘩に勝つた者が必ずしも強いのではなく、これを呑み込んで相手にしなかつた者が却つて眞の強者であるとするならば、専横な男子の壓制に黙々と聽従してゐた當時の女子は、外面的には意氣地なしと見ゆるかも知れないが、内面的には男子以上の強さを持つてゐたとも考へられるであらう。吾々は負けて勝つ女性の強さを思はねばならぬ。

第六章 近世の教育

第一節 時代の概観

近世といふのは徳川家康が江戸に幕府を開いてから、明治維新に至る二百六十餘年間を意味するもので、所謂徳川時代のことである。この時代は我國に於ける文藝復興 Renaissance とも目すべき時代

で、我國の文化がさなから百火燎亂たる觀を呈し、隨て學問教育が未だ曾つてない進歩を遂げた時代である。

既に中世に於て徳川時代の學問の萌芽は、五山に於ける文學として芽生えたのであるが、戰國時代應仁の亂以後京都も戰亂の巷と化し、公卿僧たちも難をのがるべく四散するに至つて、學問は京洛の地から委をかくした。當時山口の大内氏は豊裕で學問を奨励し公卿學僧たちを保護したので、京都の學問は山口に移り、山口は一時我國唯一の學府たる觀を呈するに至つた。この地に朱子學の遠祖桂庵禪師が生れた。その弟子には土佐南學の祖南村梅軒があり、又其の流れを汲む官學朱子學の祖とも言ふべき藤原惺窩があつた。斯くて文學復興の曙光がほの見えはじめたのである。しかし徳川時代の學問の復興には他に大なる動因があることを忘れてはならぬ。即ち家康及び歴代將軍の文教奨励、朝廷に於ける御好學、民衆勢力の充實等はそれである。

一、徳川家康の文教奨励 家康は馬上で天下を取つて、中央集權の制度を確立し、幕府を開いて天下に號令したのだけれども、武を以ては天下を治むる事が出来ないことを知つて、常に學問を奨励した。公家法度の第一條に「公家衆家々の學問、晝夜油斷無き様仰せ付けらるべき事。」と規定してゐる。また「人倫の道明かならざるよりおのづから世も亂れ、國も治まらずして騒亂やむことなし。」と言つて儒學を奨励してゐる。なほ武家に對しては「文を左にし武を右にするは古の法也、兼ね備へざ

るべからず。」と戒めてゐる。以て彼の精神を知るべきである。家康の文教奨励について特筆すべきものが三つある。

1 儒者の登用 永い間の戰亂で殺伐になり險害になつてゐる人心を和げなければ治平は永く續かない。この人心を和げる爲に家康は學問を奨めたのである。彼は先づ儒者を登用して自ら學問に勵んで模範を示した。第一に擧げられたのが藤原惺窩である。しかし惺窩は辭退して其の高弟林羅山を推した。家康は頼朝の政治を崇拜してをつたから鎌倉幕府の編纂した吾妻鏡を羅山に講ぜしめたのである。また伏見に圓光寺學校を建て足利學校の校主三要を其の校主に擧げ、書籍を蒐集刊行せしめたのである。

2 古書の蒐集 戰國の争亂によつて我國の書籍は著しく散佚してしまつた。家康はこの點に着眼して古書の搜索に着手し、公家の舊家や社寺等から古書を集め、京の南禪寺の能書僧をして書寫せしめ江戸城内に富士見亭文庫を營み、ここに藏した。また禁中から秘書を一時拜借して五山の僧に寫さしめ、一書毎に三部を作り、一を御副本として禁中に上り、一を駿府に留め、残る一を江戸の文庫におさめた。金澤文庫の藏書も多く富士見亭文庫に移された。この文庫は後の紅葉山文庫で、今日の内閣文庫はこれをひきついたものである。

3、書籍の出版 朝鮮役で秀吉は木活字を手に入れてこれを諸侯に頒つた事があつた。家康はこの本

活字を集めて、圓光寺學校の校主にあげられた三要に命じて、孔子家語、貞觀政要、東鑑、周易等の書を相ついで發行した。これが所謂慶長活字本と稱するものである。次で銅活字を鑄造して群書治要大藏一覽等を出版し、朝廷に献じ御三家諸侯等に頒つた。これを元和活字本といふ。

二、歴代將軍の文教獎勵

1、秀忠と法度の制定 秀忠は家康の遺志を奉じて禁中法度、武家法度を定めた。禁中法度の第一條には「天子は藝能の事、第一は學問也。學ばざれば則ち古道明かならず而して能く太平を致すものは未だ之あらざる也。」とあり、武家法度第一條には「文武弓馬之道専ら相嗜む事。」と規定してをる。文教に留意せることを知るべきである。

2、家光と鎖國 家光は天主教の異圖を恐れて鎖國を實行した。その爲に西洋文化の移入の道が絶たれて、一面から見れば我文化の發達を妨げたと考へられるが、他面から見るとその爲に太平を保つ事が出来て、東洋固有の學問藝術が興隆したとも見る事が出来る。若しも徳川三百年の日本の思想の準備がなかつたら、明治時代に於てあれだけの西洋文明の利用は出来なかつたであらう。此の點から見て家光の鎖國にも相當思想的意義を認めなければならぬ。

3、綱吉と昌平校 綱吉は自ら殿中に書を講じたり、袖珍本の四書を刊行したり、大名の邸に至つて講筵を開いたりして、頗る學問の獎勵に意を用ひた。殊に彼の大なる功績は昌平坂學問所の經營である。彼は私塾弘文館を忍ヶ岡から本郷湯島の地に移し、昌平坂と其の地を稱し、大成殿を設けて孔子

を祭り（大正十二年の震災に焼失）幕府直轄の學校となし聖堂と呼んだ。そして林鳳岡を大學の頭となし、子孫を代々聖堂の祭酒たらしめた。これより林家は代々幕府の殊遇を受け、朱子學が幕府の官學となる基礎を固めたのである。

4、家宣と新井白石 六代將軍家宣は綱吉の學問獎勵に刺激せられ學問に興味を持つた。彼れは木下順庵の薦めで新井白石を侍講として登用した。白石は博覽強記、學和漢洋に互り、殊に制度歴史の造詣に至つては徳川時代を通じての第一人者で、其著讀史餘論は我國過去に於ける唯一の歴史哲學の著述である。また其著西洋紀聞は西洋研究の魁である。なほ白石には、閑院宮家の創立、悪貨政策による國家の財政的危急の救助、國家の體面を保持する爲の朝鮮使節待遇の改善等に幾多の功績がある。

5、吉宗と實學の獎勵 八代將軍吉宗は實用的見地から、綱吉時代の學問の弊を改めんとして盡力するところが多かつた。先づ儒教の修身齊家の實を擧げしめんとして、室鳩巢に六論衍義大意、五倫和解を作らしめ、之を江戸の手習師匠に賜い童蒙の手本となさしめた。又右筆下田師古を和學御用掛に任じ、本朝の古書記録の蒐集校正を司らしめ、醫師古林見宜に醫書を講義せしめ、西川如見に天文學を研究せしめる等、學問の獎勵に頗る意を用ひた。又家光の發した禁書令を解き和蘭、支那の商人に命じて外國の書籍を蒐集せしめたりした。

6、家齊と松平定信 家齊のとき松平定信が老中の首班となり、諸々の改革を斷行した。文教方面で

は柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲等の學者を登用して幕府の儒官とし、大學頭林信敬を助けて聖堂の講義に當らしめた。寛政二年には栗山の議を入れ、朱子學を以て官學とし、異學を堅く禁止した。これは仁齋、徂徠等の如き古學派が起つて、幕府の官學の如くなつてゐた朱子學の權威が薄らいで、學問の中心を失つたこと、及び山崎暗齋派の勤王思想が起つて幕府を脅かさんとする形勢を恐れた等の爲と思はれる。これを寛政異學の禁といふ。

三、朝廷の文教獎勵 皇室におかせられては後陽成天皇を始めとして後水尾天皇、明正天皇、後光明天皇、御西院天皇、靈元天皇等何れも御好學であらせられた。後陽成天皇は慶長二年に錦織段を出版され、同四年には日本書紀神代卷を出版されてゐる。何れも木活字で今日慶長勅版と稱し珍重せられてゐるものである。戰國時代に比ぶれば朝廷の經濟状態がいくらか良好になつてはゐたものの、まだ決して豊かな状態ではなかつたのに、比較的費用のかゝる書籍の出版を行はせられたといふ事は如何に御好學であらせられたかを想像することができるのである。家康の書籍出版は之に刺激されたものである。

又御水尾天皇は御好學であらせられたのみならず、書籍に對して御趣味をもつてをられ、御讓位の後は朝廷の書庫東山御文庫の繕書には毎年御臨幸になつて、色々御指圖をなされた程である。斯様に朝廷に於ける學問の獎勵は自然に公卿の間に感化を與へた。そして公卿仲間では中庸、周易、蒙求、

尙書、論語、周禮、孟子、孫子、史記、詩經等を講師を招いて學んだ。これを學問講といふ。講師も明經道の家の人に限ることなしに、民間の學者をも招いてゐた。眞面目に學問を研究しようとする精神がよく現れてゐる。

四、民衆勢力の充實 徳川時代の社會に於ける代表的階級は武士であつた。しかし大名や武士は永い太平が齎した奢侈遊惰の爲に財政的不如意に陥つたのである。然るに一般平民は只管商工農の職業に従事した爲に、土地の開拓、物質の増加、製造工藝の發達を來し、富の程度が高まつて來た。經濟的な發展は民衆の生活の充實を來し、遂に自己階級の教化を要望するに至つた。斯くて民衆の教育は武士の教育と相並ぶまで活潑なる發展を見るに至つたのである。

五、教育の内容 幕府及び朝廷の文教獎勵は、諸侯の文教獎勵となり、これ等の努力は平民の勢力の充實と相合して、徳川時代を文藝復興の時代たらしめたのである。この時代の教育の内容は多種多様であつたけれど、これを煎じつめれば神道と佛教と儒教とによつて織りなされた文化に外ならぬ。勿論その中で儒教が最大の勢力をもつてゐたことと言ふまでもない。重なる學派と思想家を擧ぐれば次の如くである。

(一) 儒教

1、朱子學派

A、周濂溪に始り程伊川に祖述され朱子の大成せる學派で、理氣二元で宇宙人生を説明する哲學的形而上學的
知的の色彩に強いのを特色とする。

B、藤原惺高、林羅山、松永尺五、木下順庵、雨森芳洲、貝原益軒、室鳩巢、新井白石、中村惕齋、柴野栗山
尾藤二洲等。

2、陽明學派

A、程明道、陸象山を経て王陽明に至つて大成された學派で、心即理、致良知、知行合一を標榜する實行本位
の學派である。

B、中江藤樹、熊澤蕃山、三輪執齋、中根東里、佐藤一齋、大鹽中齋、佐久間象山、横井小楠、西郷南洲、吉
田松陰等。

3、古學派

A、朱子、陸王の説が眞の聖人の道を傳へてゐないとなし、之を排して直ちに孔孟の思想に接せんとするもの
である。

B、山鹿素行、伊藤仁齋、伊藤東涯、荻生徂徠、太宰春臺等。

4、折衷學派

A、諸種の學派を統一し中正の道を求めんとする學派で、儒教合派を折衷せんとする平洲、儒教道教を折衷せ

しとする兼山、考證的な錦城等を含む。

B、細井平洲、片山兼山、太田錦城、井上金峨、皆川洪園等。

5、獨立學派

A、前人諸儒の學說を追はず、神儒佛三教の精神をさぐり、一派をはじめた人々を獨立學派とよぶ。

B、三浦梅岡、帆足萬里、廣瀬淡窓、二宮尊徳、大原南學等。

(11) 神道

1、闇齋學派

A、我國體を明にし、尊王愛國の精神を發揚しようとするものを神道と名づけておく、その中でこの派は朱子
學を以て神道を説明するもので、所謂垂加神道派である。

B、山崎闇齋、淺見綱齋、佐藤直方、三宅尙齋、山縣大貳、竹内式部等。

2、國學派

A、古典の研究によつて、儒教佛教に影響されぬ我國の古道、即ち神の道を發揮せんとする學派で、純神道と
いふ。

B、僧契沖、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤等。

3、水戸學派

A、大日本史の修史事業を中心とし、神道をたすくるに朱子學を以てし、敬神尊王愛國の念を鼓吹した學派である。

B、徳川光國、徳川齊昭、藤田鳴谷、藤田東湖、會澤正志齋等。

4、歴史學派

A、歴史の研究によつて我國體の真相を説き、尊王愛國の精神を鼓吹したるもの。水戸學の一分派と見てもよい。

B、頼山陽。

(三) 武士道學派

A、武士道の學を組織大成し、國家的思想を鼓吹せる學派である。

B、山鹿素行、吉田松陰等。

(四) 心學派

A、神道儒教の長所を採つて一丸となし、平易に實踐道德を説いた學派で、商業及び女子道德を説くこと周密である。

B、石田梅巖、手島堵庵、中澤道二、鎌田柳泓、柴田鳩翁、協坂義堂等。

(五) 實學派

A、神道も儒佛もつまり至誠の一であるとなし、至誠に基く實行を重んじ、特に農民道德を唱くのである。

B、二宮尊徳、佐藤信淵等。

(六) 洋學派

A、西洋の學問の移入紹介につとめた學派である。

B、新井白石、青木昆陽、前野良澤、桂川甫周、杉田玄白、大槻玄潭等。

六、教育の機關 教育の機關には幕府直轄の學校に、儒學を主とする昌平坂學問所、國學が主である和學講談所、新來の學問を教授する開成所があつた。各藩には三百有餘の藩學があり、浪人や學者によつて開かれた郷學、漢學塾、寺小屋があつた。殊に寺小屋は徳川時代を通じて二萬を數へてゐる。又社會教育機關としては、心學教の講席と農民道德を教へた報徳教の組織とがあつた。表解すれば次の如くである。

(一) 幕府直轄の學校

1、昌平學——儒學特に朱子學を教へた。

2、和學講談所——國學を教へた。

3、開成所——外國語の翻譯を掌り、且西洋の學術を教ふ。

4、醫學所——西洋醫學を教授す、後開成所と合し今の帝大となる。

5、甲府徵典館、駿府の明新館、長崎の明倫堂、佐度の修教館、日光の日光學問所、横濱の修文館。

(二) 藩學(重なもののみ)

- 1、名古屋の明倫堂——徳川義直の建つるところ、細井平洲總裁たりしところ。
- 2、水戸の弘道館——徳川齊昭の建つるところ、藤田鳴谷其子東湖出づ。
- 3、和歌山の學習館——吉宗の藩宗のとき建つるところ、文武を教授す。
- 4、金澤の明倫堂——前田治備(ムナゴロ)の建つるところ、和學算醫書歴史天文詩等を教授す。
- 5、佐賀の弘道館——鍋島吉茂の建つるところ、和漢洋兵砲の學を教授す。
- 6、仙臺の養賢堂——伊達吉村の建つるところ、文武を教へ庶民の入學を許さず。
- 7、萩の明倫館——毛利吉元の建てしもの、醫學洋學兵學を教授す。
- 8、熊本の時習館——細川重賢の創設、平民をも入學せしめ、文武を授け、個性を重んず。
- 9、米澤の興讓館——上杉鷹山の再興せしもの、細井平洲講筵を開く。
- 10、福岡の修猷館——黒田齊隆の建つるところ、朱子學及び徂徠學を講ず。
- 11、岡山の花鳥教場——池田光政の創立、後軍に學校と稱し、和漢英の學を講ず、士庶共に入學を許す。
- 12、會津の日新館——松平氏の藩學、始め稽古堂といふ、朱子學と神道とを採用す。
- 13、鹿兒島の進士館——島津氏の藩學——昌平校に倣ふ、文武を教授す。

(三) 民間教育所

- 1、郷學 藩學と寺小屋との中間に立つもので、次の二つは特に著名である。

- A、肥前多久學校——元祿十二年國老多久氏の私設、士庶共にとり文武を兼修せしむ。
 - B、備前閑谷學校——池田光政庶民教育の爲に建つるところ、途中廢絶があつたが再興されて現在に及ぶ。
- 2、漢學塾 漢學塾とは儒者の私塾で有名なものは次の如くである。

- A、菅茶山の康塾——備後の福山にある。朱子學に準據す。頼山陽も嘗て此の塾に學ぶ。
 - B、伊藤氏の堀川學校——京都にある。仁齋の教育を參照せよ。
 - C、中井覺菴の懷徳書院——大阪にあり、尊王と教幕との兩思想を調和せんとする朱子學が中心であつた。
 - D、廣瀬淡窓の成宜園——豊後日田にあり、淡窓の弟子四千人、以て其の盛況を思ふべしである。淡窓の教育を見よ。
 - E、吉田松陰の松下村塾——長門にあり、吉田松陰の教育を參照せよ。
 - F、松永尺五の講習堂——京都にあり、木下順庵、安東省庵其門より出づ。
- 3、寺小屋(寺小屋教育參照)

斯くの如くこの時代は教育が民衆の間に普及し、其の内容は内外古今の思想を包容し、教育機關も整然たる體系をととのへ、新日本の偉大な發展の基礎を築いた時代であつて、日本教育史中最も重要な意義と位置とを有することは、更に詳しい叙述によつて一層明になるであらう。

第二節 朱子學の發達

朱子學は南宋の朱熹（皇紀一七九〇—一八六〇）の大成した學說である。朱子は頗る博學多識で殆どあらゆる過去の思想を集成してゐる觀がある。しかし其の理氣二元論、本然氣質の性論等の學說は一方孟荀二子の性說の綜合であり、他方周濂溪に始まり程伊川によつて祖述せられた思想の發展である事は明らかな事實である。それで朱子の先驅思想を概観しよう。

一、**孟荀二氏の學說** 1 孟子の學說 孟子は子思を通じて孔子の學說を祖述し、之を明にするを終生の事業とした。氏は仁の意味が當時平等無差別の愛を説く墨子一派の兼愛說と混同せられ易いのを思つて、宜即ち事のよろしきを得る意味の義の一字を加へ、仁義を儒學の根本とした。仁義は開けば仁義禮智の四徳となり約すれば仁の一字となるのである。

而して如何なる人でも仁義の徳を成就し得る要素を有つてゐる事を論證し、所謂性善說を唱導したのである。一方に於ては中庸の誠の説より演繹し論理的に性善でなければならぬ事を論じ、他方心理的に事實を歸納して性善なることを明にしたのである。「赤子が今や井戸に陥らうとしてゐるのを見れば、誰れでも厭寄つて救はうとするに相違ない。これは功利的にしかするのでなく、やむにやまれぬ惻隱の心即ち人に忍びざるの心が發動したのである。惻隱の心は仁の端である。同様に人は義の端である羞惡の心、禮の端である辭讓の心、智の端である是非の心を有つてゐる。これを四端といふ。此の四端を有するところを見れば、性善は疑ふべからずである。そしてこの性善を助長する爲に、修養

の工夫として放心を求むる事、細説すれば、寡欲、存夜氣、擴充、善氣等を説くのである。

孟子の性善說は道德を完成し得る要素が、先天的にあるとの信念を後世の學者に與へた點に大なる價值があるが、惡の起原の説明に不明なところがある。これと正反對のものが荀子の學說である。

2、荀子の學說 荀子の學說の中心は性惡說である。彼の性惡篇によつてその説を窺つて見よう。彼に依れば人の性は惡である。其の善なるものは偽である。今人の性を見るに、生れながらにして利を好む。是れに順ふ故に爭奪が生じ辭讓が亡ぶのである。又生れながら疾惡を有つてゐる。是に順ふから殘賊生じ忠信が亡ぶのである。又生れながら耳目の欲を有つてゐる。是れに順ふから淫亂生じ、禮儀文理が亡ぶ。それで人の性に從ひ、人の情に順ふときは必ず爭奪に出で、犯文亂理となり、暴に歸するのである。だから師法禮儀を用ひて化性しなければならぬ。斯くてはじめて辭讓に出で、文理に合し、治に歸する。これを以て見れば人の性は惡であつて、其の善なるは偽である。

つまり荀子は人性の利己的性情に目をつけて性惡說を唱へたのである。丁度孟子が人性の利他的性情に目をつけて性善說を唱へ、惡の説明に窮したやうに、荀子は善の説明に窮し化性の可能といふ事で難を逃れようとしてゐるのである。何れも人性の一面的見解であつて、道德行爲及び品性を評價すべき善惡の概念を、道德以外のものに適用したといふ批難を免れない。朱子の本性氣質の性說は、この孟荀二氏の性說の綜合的位置にある。

二、周程二氏の學說

朱子の立場が孟荀二氏の綜合的位置にあると言つても、その學統は周濂溪及程伊川の流れを汲む事は言ふまでもないのである。従つて之等の思想を一瞥しなければならぬ。

1、周濂溪の學說 彼は宇宙の本體を無極にして太極とした。無極とは聲もなく臭もなく形もないからいふので、太極とは萬物が皆之から發展するから言ふのであつて、無極と太極は同じものである。此の無極而太極の動的方面を陽といひ、靜的方面を陰といふ。この陰陽から水火木金土の五元素が生じる。これを五行又は五氣といふ。無極の眞と陰陽五行の精とが妙合して形を生じ男女兩性となる。これが萬物の始である。これを圖解したものが所謂太極圖である。

人は太極の秀氣を得てゐるから、其の本性は純粹至善なもので、中庸の誠にあたる。即ち人の性は善である。しかし五行の氣より受けた五種の性が外物に感動して善惡が生ずる。そこで修養法として慎動無欲が必要であると説いてゐる。要するに周子の説には老子の思想が多分に含まれてゐる。

2、程伊川の學說 程伊川の學說の中心點は理氣二元論である。彼によれば宇宙は理氣二元よりなつてゐる。萬物の根源をなす陰陽は氣であつて、陰陽する所以の道が理である。理は萬物の生命として本質として働くものであり、氣は萬物の形をなすものである。そして理は氣を離れて存するものではなく、氣が亡べば理もなくなる。理はアリストテレスの形相にあたり、氣は質料に相當するやうに思はれる。

人に於ても理氣二元から成り立つてゐる。理に基づくものは本性であつて、それは善である。然るに氣に基づく氣質の性には善惡の別がある。つまり人に於ては本性は善であるが、氣稟の昏濁によつて惡が生ずると見るのである。故に敬と致知とを以て修養すれば、本性の善に復ることが出来る。敬とは靜坐によつて心を内面的に統一し外物に奪はれぬことであり、致知とは格物である。即ち事物の理を窮めることである。

朱子の理氣説、本然氣質の性説、居敬、窮理の説等は皆伊川に出づるのである。

三、朱子の學說 朱子は字を元晦といふ。幼時より穎悟な生れつきで、十九歳で進士の試験に合格し、二十四歳で李延平の門に學んだ。博學多識なること希臘のアリストテレスに比較すべき大人物である。性豪直、屢々上書して時弊を痛論した。随つて世人の忌憚を受け、迫害されること一再に止まらなかつた。しかしこれに屈する事なく、一生を講學に身を委ね。七十一歳を以て逝く。諡して文公といふ。

1、宇宙論 周濂溪は宇宙の本體を無極而太極といひ、其の動的方面を陽、靜的方面を陰となし、この陽陰二元から水火木金土の五行が生ずると説いた。程伊川は宇宙萬物は理氣二元から成ると論じた。朱子の宇宙論はこの周濂溪の太極説と、程伊川の理氣の説とを綜合組織したものである。

朱子は理氣二元を太極によつて綜合しようと試みたけれども「太極は只是れ一個の理字」と見たの

である。それで理氣二元論とも理一元論とも見る事が出来る。理とは時空を超越した絶対的のもので、精神的のもので、法則であり、抽象的のものである。それで萬物の化成にはこの理。法則に對する實質がなくてはならぬ。この實質を氣といふのである。氣は物質であり、質料である。理即ち法則によつて支配せられて、一切萬物を形成する材料である。陰陽の五行はこの氣に外ならない。一切の萬物は理氣二元が融合して生み出されたのであつて、理は法則氣は質料であるから、理が無ければ氣の作用が行はれず、氣がなければ理も動きやうがない。つまり理氣二元は相依つて存するものである。

2、人性論 萬物は理氣二元から成る。そして理を具へてゐる點から見れば皆同一であるが、氣には偏正、厚薄、清濁、明暗の別がある。事物の差異は一に氣の如何に基く、即ち其の正・厚・清・明なるものは人となり、偏・薄・濁・暗なるものは禽獸草木となる。

人も理氣二元から成つてゐる。理に基くものを本然の性といふ。本然の性が氣質即ち肉體に寓するとき之を氣質の性といふ。本然の性は氣質の性から抽象的に思考して得られた概念であつて、従つて普遍的抽象的である。之に對して氣質の性は具體的であり、個別的存在である。而かも普遍を宿せる特殊である。本然の性から言へば人間は凡て同性であり、聖凡の區別はない。しかし氣質即ち身體には、偏正、清濁、明暗等の差別があるから、普遍的な本然の性が身體に宿るときには、種々異なつた氣質の性を生ずるのである。聖人凡人の分れるのは此の爲である。

3、修養論 氣質の性には聖凡の區別があるのであるが、凡人も修養によつて氣質の性を變化する事が出来るのである。それで人は須らく氣質の發作を節し、人慾を絶つて本然の性に復し、虚靈不昧の明德を保全しなければならぬ(復性説)。

朱子はこの修養の方法として窮理と居敬との二方法を擧げてをる。窮理とは中庸の道問學、大學の格物致知に當るもので、つまり廣く事物の理を窮めて知を致すことである。大學の補傳に「久しく力を用ひてをると、一旦豁然として貫通し、衆物の表裏精粗到らざるなく、我心の全體大明かならざるなし。」と言つてをるのは窮理の意を最もよく表現してゐる。そして其の段階として程伊川の説いた博學、審問、慎思、明辨、篤行の五段を祖述してゐる。これは儒教の教授段階とも見ることが出来る。

居敬とは中庸の尊徳性、孟子の存心養性に相當するもので、内面的には省察を怠らず、外面的には起居動作を慎む事である。この爲には靜坐を最も重んじてゐる。この窮理居敬を怠らず勵むときは必ず聖域に至り得るとした。その先後を問へば窮理が先で、居敬が後である。これ朱子の説が先知後行の説と目せられ王陽明の知行合一と對照される所以である。(哲學雜誌第四六四號宇野博士程朱の理氣説に關する二三の考察参照)

4、朱子學の影響 朱子の學説は佛老の影響により靜寂主義に傾いてゐること或は科學的藝術的思想

に乏しい等の缺點はあるにしても、なほ幾多の長所を有する。(一)學説が包括的、集成的で凡ゆる思想を取り入れてゐる事。(二)學説が哲學的、形而上學的で、進んだ人智の要求によく適合する事。(三)本然氣質の性説中に特殊即普遍主義の進んだ思想が現れてゐること。(四)道德説が功利主義にあらざして、人格完成を理想とし、所謂自我實現説に通ずるものあること。(五)朱子學は學問と道德と分離せずして、學問は實行の爲に尙び、單なる知識の探究を重んじなかつた事、などは其長所の重要なものである。従つて教育主義としても極めて温健である。斯様な事情から、徳川時代には幕府の官學として非常な發展を遂げたのである。藤原惺窩、林羅山、木下順庵、中村惕齋、貝原益軒、室鳩巢等その代表者であつて、それ等の謹嚴篤實な人格によつて唱導せられた學説は、徳川時代の徳育上に偉大な影響を與へるるのである。

〔問題〕 修身

- 一、孟子の四端説を論述せよ。(六一一豫)
- 二、性善惡の説を批評せよ。(明三九豫)
- 三、孟子の四端とは何ぞや。(明二九年)
- 四、孟子の所謂義とは何ぞや。(大六本)
- 五、孟荀二氏の性説を叙述し之を論評せよ。(大十三本)

- 六、孟荀二子の倫理説を比較対照せよ。(明三三豫)
- 七、氣質の性と本然の性との差異。(明二九年)
- 八、宋儒の氣質を變化するの説如何。(明二九年)
- 九、宋儒の理氣の別如何。(明二五年)
- 一〇、宋儒の所謂窮理居敬の意義如何。(六一〇豫)
- 一一、周茂叔の太極圖説の要を述べよ。(明三〇年)
- 一二、朱子の倫理説を述べよ。(昭二本)

〔問題〕 教育

- 一、朱子學派の教育思想を挙げ、これが我邦教育に及ぼせる影響を述べよ。(大十五本)

第三節 朱子學派の教育

朱子學を我國で最初に講じたのは、吉野朝時代の僧玄慧であつた。その頃から京都五山の學僧の間に研究されてゐたのであるが、應仁の亂後學者は難を避け京師を去つて山口に集まつた。ここに大内文學が起つたのである。この山口に桂庵禪師が生れて朱子學の祖となつた。桂庵の弟子南村梅軒は士佐の朱子學、所謂南學を起した。其の一派には谷時中、野中兼山、山崎闇齋等がある。殊に山崎闇齋に至つては所謂崎門の一派をなし、京都を中心として強大な勢力を有し、著しく尊王思想が濃厚であ

つた。また桂庵の流れを汲む藤原惺窩は、京師朱子學を起し、其の門には林羅山、松永尺五、木下順庵、室鳩巢、雨森芳洲、貝原益軒、中村惕齋等の大儒を出した。この一派は厚く幕府の保護を受け、主に江戸に榮えた關係上、敬慕思想に濃厚で、大義名分の論に暗いものがある。また大阪には懷徳堂書院を中心とした大阪朱子學が榮えた。其の一派には五井持軒、三宅石菴、中井整菴、中井竹山、五井蘭洲等の學者がある。この派は敬慕と尊王とを調和せんとした。此の學派は幕末勤王論の勃興に大なる影響があるのである。

第一 藤原惺窩

一、小傳 藤原惺窩(1561—1619)は永祿四年磨播國に生れた。十八歳のとき京都に上つて僧となつた。文祿元年朝鮮征伐のとき、小早川秀秋の客として九州の名護屋に下り、家康に知られた。後明に遊學の途中、難波して目的を達する事が出来なかつた。しかし桂庵の著家法和點に接し、朱子學に入つたのである。家康の知遇を受けその爲に屢々書を講じた。遂に儒臣に擧げられたが、辭して高弟林羅山を推した。彼は全く師傳によらず、独自の研究工夫によつて一世の大儒、官學朱子學の祖となつたのである。

二、學風 惺窩の學風は神道儒教佛敎を調和せんとする態度を示し、寛大で包括力に富んでゐる。それで旗幟の不鮮明な嫌ひがないではないが、この清濁併せ呑む底の學問が、徳川時代に於ける各方面

の文教發展の刺激となつてゐる。

彼は日本神道によつて儒教を日本化し、神儒一致説を説へ、其の著「假名性理」の中に「日本の神道も我心を正しうして、萬民をあはれみ、慈悲を施すを極意とし、堯舜の道もこれを極意とするなり。もろこしにては儒道といひ、日本にては神道といふ、名はかはり、心は一なり。」と述べてゐる。

また佛敎と儒教との一致を説いて、「儒釋の道、造る所異なりと雖も、力を用ふるの功、亦應に殊ならざるべし、眞に力を積むの久しきに至り、一朝豁然の境に造りては、則ち吾儒の所謂知至るにして而して佛者の所謂契悟なり。」と述べてゐる。尤も彼は佛敎を非難する口吻を漏らしてはゐるが、それは佛敎そのものの攻撃ではなくて、當時の腐敗せる僧侶の敎説を痛嘆せるものである。

三、教育論 惺窩は特別に教育論を述べてゐるのではないけれども、其の著「千代もとぐさ」を讀んで見ると、教育意見が諸處に見えるのである。これ等によつて惺窩の教育意見を窺ふことにする。

一、教育の理想 教育の理想を聖人に置いてゐた。聖人とは天の道にかなふた明德を明にみかいた慈悲の心の持主をいふのである。「千代もとぐさ」に次の様に述べてゐる。「明德とは天より分れ來て我心となりて、いかにも明かにして、一もよこしまなるころなく、天地にかなふたるものを明德といふなり。天より生れつきたるごとく、此の明德を明かにみかきたる人を聖人といふなり。」(日本倫理彙編七ノ三) 又「天の本心は、天地の間にあるほどの物をさかえるやうにあはれみ給ふなり、かるがゆる

に人となりては、人に慈悲を施すを肝要とするなり。(日本倫理叢編)と述べてをる。つまり天の心である明德をそなへ、天の心である慈悲心を具へた人を聖人と稱し、この聖人を人間理想、従つて教育理想と考へたものと思はれる。明德と慈悲、これは儒佛の理想とするところを調和綜合したものである。

2、教育の方法 明德と慈悲心とを具へた聖人に至るには、道心を明にし人心を抑へなければならぬ。四書五經其他萬卷の書をまなぶのも、つまりその爲に外ならない。欲ふかく、民をし虐げ、人をたらし、財寶を集めるは人心の甚だしいものである。また物知りと言はれんと思ふも、藝能に勝れて人に譽められんと思ふも、武道をみがき名を高め所領を受けんと思ふも人心である。これ等の人心をすてて、心のみがかん爲に學問をなし、只我職をみがき、ただ君の爲に命を捨つる事を心掛けねばならぬ。これが道心を發揮する所以の道である。(千代もとぐさ)

この道の實行の爲に、彼は師道に傾る嚴であつた。曾て家康が褻服するを見て爲めに書を講じなかつたといふことである。

三、批評 彼は徳川家康の文教獎勵に劃策して、文教復興の魁をなし、官學朱子學の祖となり、近世教育史上重要な位置を占めてをる。彼れの思想は旗幟不鮮明の點はあるが、(一)神道を以て儒學を説き日本人としての態度を示したること。(二)神儒佛の精神を採り入れ、公平にして寛大な包擁的態度

を示したること。(三)學問を僧侶の手より儒者の手に移したること。等の長所を有つてゐる。

文章達徳錄百卷、假名性理一卷(千代もとぐさといふ)、惺窩文集等の著書多く、羅山、尺五等の學者を其の門に出してをる。

第二 林 羅 山

一、小傳 林羅山(1583—1657)は天正十一年京都に生れた。幼時より聰慧、十三のとき建仁寺に入りて書を習ひ、二年の後家に歸つて四庫の書を獨習した。十八歳のとき朱子集註を読んで大いに喜び朱子學を講義した。二十二歳で惺窩の門に入つたが、惺窩の包擁的な學說と一致せず、旗色鮮明に朱子學を主張した。惺窩の推薦によつて家康に仕へ、書籍の蒐集、諸般の制度の調査に當り獻策する所少くなかつた。秀忠及び家光の侍講となつて、講說に東奔西走した。家光から忍ヶ岡に地を賜ひ、書院塾舎を營んだ。これが弘文館となり、昌平校となつたのである。明曆三年の大火に書庫を焼き、嘆きの中に歿した。

二、學說 彼は純然たる朱子學を説いた。心胸の度量、學問の正大に於ては師惺窩に劣るも、學問の博宏才識の敏慧に於ては遙に惺窩に優るものがある。惺窩は清濁併せ呑むといふ風で、佛老陸王をも捨てなかつたが、羅山は朱子以外の説を取らなかつた。尤も朱子の理氣二元論のみは捨てて、王陽

明の氣一元論を採用してをる。これは活動主義的の日本精神が必然的に現れたもので、我國に於ける儒學者の共通的傾向である。

彼は幕府の顧問役たる地位にあつたから、自然に敬慕思想を鼓吹し、反尊王の氣運を促し、後世の大義名分の論を紊亂するに至つたのは、彼れに責任があると言はねばならぬ。しかし彼に尊王の精神が全然なかつたのではない。國體讚美、史上の人物論、三種の神器論等を見ると、彼れも國體を崇敬する論者の一人である事がわかる。しかし幕府の顧問として敬慕鼓吹はまたやむを得なかつたものと思はれる。

三、教育法 羅山は品性の高雅なる點は怪窩に及ばなかつたが、其の人となり恭遜謹恪にして、四代の將軍に仕へて何等の失策もなかつた。彼は衆に勝れた才を持つてゐたが、自ら誇るやうな事なく一生讀書に倦まず、克苦勉勵した。彼れは耳鼻の疾患に常に惱されてゐた。そして病床に就くやうな時でも決して書物を捨てなかつた。人が靜養を勸れば、自分の讀書は人の歌舞を喜ぶやうなもので、聊かも煩勞するところはないと言ひ、笑つて用ひなかつたといふ。此等の模範が弟子たちに深く感化を與へたものと思はれる。

又門弟の教育に意を用ひ、其の講説にも驚くべき熱心さであつた。曾て歳の暮に明春より通鑑綱目を講ぜられたしと請ふ者があつた時、彼は即日より講じ始めたといふ。其の講席に臨むや、舌端圓熟

文義明昭にして、少しの曖昧をもゆるがせにしなかつた。門生放縱にして業を廢するものがあると、
「懶は戒めざるべからず、心は放つべからず、倦は之を動に移し、決して中道にして廢すべからず。」と訓誡した。

彼は身を以て學問の研究に熱中し善良なる模範を示し、其の教授に當つては極めて熱心であつた。斯くて朱子學を以て幕府の教育主義となし、其の一門は幕府に於ける教育上の趨勢を掌握して、明治維新に至つたのである。

四、批評 彼は幕府の御用學者であつた關係上、表面敬慕思想の鼓吹に急にして、大義名分に暗きかの如き思想を發表してゐる點のあるのは、一代の碩儒たる彼の爲に、惜しむ所である。しかし朱子學を以て明瞭に幕府の教育主義を標榜し、昌平校の管理經營によつて、教育實際上に大なる貢獻をした事は、稱揚するに足るものである。

第三 山崎 闇齋

一、小傳 山崎闇齋(2278—2342)は京都の人、幼時より頗る腕白であつた。長筆を持つて堀川の橋上に出で、行人の塵を打ち水中に轉落せしめて戯れとしてゐたといふ。父は之を心配して妙心寺の僧としたが性行が少しも改まらなかつた。或日佛前で讀經中哄然として大笑するのでその理由を問へば

釋迦の虚誕笑ふに堪えないと大言し、又或日廟堂と議論して詞窮するや、其夜紙帳に火を放つて去つたといふ。土佐侯の公子に見出されて土佐に赴き、谷時中に就いて朱子學を學んだ。そして二十五歳のとき京師に歸り學を講じた。其の門に集まるもの六千人、伊藤仁齋の門弟三千人といふが、實に其の倍數である。以て其の盛況を察すべきである。晩年垂加神道なる一派を創唱した。

二、學風 閻齋は朱子を孔子以後第一の人物となし、朱子學を尊崇すること他に越えたのである。彼は朱子の説を眞理として信仰的に尊信し、儒家たるの使命は單に朱説を實行するにあると考へたのである。従つて彼の學風は實踐躬行が根本主義なのである。

斯くの如く忠實に朱子の學を信奉し、隨喜渴仰、眞に宗教の如きものがあつたけれども、決して日本人としての自主的精神を忘れたのではない。彼は晩年に神道を喜び垂加神道を主張するに至つたのであるが、これもつまり日本主義の發揮であつた。彼曾つて多くの弟子に向つて、「方今彼邦孔子を以て大將となし、孟子を副將となし、騎數萬を率ゐ來りて我邦を攻むるときは、吾黨孔孟の道を學ぶもの之を如何となす。」と問ふたが弟子は顔見合せて答ふるものがなかつた。彼は教へて曰く「不幸にして若し此の厄に逢はば、吾黨身堅を被り、手銳を執り、之と一戦して孔孟を擒にし、以て國恩に報ぜん此れ即ち孔孟の道なりと。」(先哲叢談)その國家的自主的精神を見るべきである。彼の學派に淺見綱齋竹内式部、山縣大貳等の勤王愛國の士を出だし、速く明治維新の大業にまで影響を與へたのも故ある事である。

事である。

三、學說 閻齋の學說として注意すべきは、教内義外の説である。此の説は程子の「教以直内、義以方外、合内外之道也。」及び「教義夾持、直上達天德自此」といふ語に本づいて立てた説である。即ち教を持つる事によつて我内界を正直にし、義によつて我外界を方正にし、内外兩界を併せて身を修め道德を實行せんとするものである。カントが「汝の行爲の格率が普遍的法則に合致する如く行へ。」といふ道德的法則を定めてをるが、閻齋の教はカントの格率に當り、義は普遍的法則に相當するものである。

兎に角閻齋は教と義を以て道德の眞髓となし、修身の要はこれが實行に外ならずとなし、常に教と義によつて己を律することを務めたのである。彼が字を教義と稱するも、これを最も重んずる意に出でたものと思はれる。彼れは教義によつて内外を修めようとする結果、おのづから格法形式に拘泥するの弊に陥り、劃一固陋に傾かざるを得なかつた。斯かる學風の下に於ては、個性を發揮することが出來ず、従つて人物英才の輩出が少なかるべき筈であるのに、閻齋の門に於いては事實は之に反し、一大學派を形成し、多士齊々たる有様である。一見これは不思議であるが、それは閻齋の人格的感化の然らしむるところである。

四、教育法 閻齋は其師谷時中の嚴格なる教育を受けた影響と、其の性格嚴肅を極めたるによつ